

日輪寺遺跡

第10・11・12次発掘調査報告書



2008

神戸市教育委員会



1. 日輪寺遺跡遠景。南より低位段丘上の遺跡を望む。



2. 日輪寺遺跡側から、明石海峡を望む。



3. 土坑08出土 複弁八葉蓮華文軒丸瓦(左) 中心三葉花文均整唐草文軒平瓦(右)

日輪寺遺跡

— 第10・11・12次発掘調査報告書 —

2008

神戸市教育委員会

序文

「ハイカラでモダンな港町」「お洒落で瀟洒な近代的都市」というイメージで語られることが多い私たちのふるさと神戸ですが、この従来の神戸像とは異なるもうひとつの神戸が、西区・北区を中心とした郊外には、今もなお多く息づいています。

それは時に森の緑の奥深く、中世から法燈を絶やすことのない古刹の姿で、また時に地中深く眠る遺跡の姿で、私たちに語りかけます。その物語に耳を傾けたとき、私たちはこれまで知らなかった神戸的一面を知り、顧みることのなかった、名もない祖先たちの息吹を感じることができます。

本書で報告する日輪寺遺跡も、西区の明石川流域に残された、異なる神戸を語る遺跡のひとつです。近世近代を通じ都市文化を開花させた神戸にあって、この遺跡はより根源的な基層としてのふるさとのかたちをよく留めています。

今回の調査は日輪寺遺跡のなかのごく一部であり、西区の歴史にとってほんの小さな点ですが、小さな点をいくつも重ねることによって、私たちを包むこの世界がどのようにしてできてきたのかを解き明かし、世界の価値や、生きることの意味といった、人が入たる所以ともいえる問いについて、自治体として皆さんとともに模索していきたいと考えています。

金銭で換算できるものに一義をおく社会的風潮のなかで、とかく疑問符を置かれがちな文化行政の世界ではありますが、文化財が私たちに語る生命の多様性と可能性を広く世に伝えることは、現在を懸命に生きる人々の心を支える、自治体として不可欠の姿勢であると信じます。本書がより豊かな市民社会構築のための一助となれば、これ以上の幸いはありません。

2008年 神戸市教育委員会

例言

1. 本書は現住所・兵庫県神戸市西区玉津町小山561にあたる地区的埋蔵文化財発掘調査報告書です。当該地区およびその周辺は、埋蔵文化財包蔵地「日輪寺遺跡」として周知されています。
2. 本報告の調査は個人事業者による宅地造成を原因とするもので、神戸市教育委員会が平成20年2月5日から、平成20年4月5日まで、二ヵ年度にわたり実施したものです。
3. 本書で使用した方位は座標北を示し、水準値（標高）は東京湾中等潮位（T.P.）を表わしています。国土地標は世界測地系第V系を用いています。
4. 本書に掲載されている出土遺物写真のうち、写真図版については杉本和樹氏に撮影作業を委託して撮影されたものを使用しています。本文中の挿図写真については丸山潔が撮影し、遺構写真は調査担当学芸員 石島三和が撮影したもので、また独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所の牛嶋茂氏より、写真図版作成に関してご指導を賜りました。
5. 調査地の空中写真・航空測量図については株GEO・ソリューションズに作業を委託し撮影・図化されたものを使用しています。
6. 本書の執筆・編集は神戸市教育委員会文化財課 学芸員 石島三和が担当し、第4章6節についての中村大介が執筆しました。第4章5節については、丸山潔、中村大介の協力を得て、石島が執筆しました。
7. 第5章に記載されている三木市平井窯跡群出土軒丸瓦当拓影については、三木市教育委員会のご好意により採拓したものを用いています。この瓦については毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会が刊行した『久留美毛谷：古窯跡群等の発掘調査報告書』に掲載されている平井窯跡群出土軒丸瓦D（参22-13）と同一資料です。
8. 現地での発掘調査及び出土品の調査・整理作業は、調査原因者各位の費用負担によって行われました。関係者の皆様より、神戸市の文化財保護事業に関する理解と協力を得られましたことをここに記して、厚く御礼申し上げます。

目次

巻頭図版

扉

序文

例言

日輪寺遺跡 第10・11・12次調査

第1章 はじめに

1. 丘上の遺跡	1
2. 調査に至る経緯	3
3. 調査組織	3
4. 過去の調査	4

第2章 日輪寺遺跡の概要

1. 地理的特徴	5
2. 歴史的環境	6
a. 弥生時代後期	10
b. 中世	10

第3章 遺構

1. 基本層序	11
2. 遺構の概要	14
3. 弥生時代の遺構	14
a. 壇穴建物	14
(1) 壇穴建物01 (SB01)	14
(2) 壇穴建物02 (SB02)	15
(3) 壇穴建物04 (SB04)	15
(4) 壇穴建物05 (SB05)	18
b. 土坑	18
(1) 土坑01 (SK01)	18
(2) 土坑06 (SK06)	19
(3) 土坑09 (SK09)	19
c. 用途不明遺構	19
(1) SX01	19
4. 平安時代～中世の遺構	20
a. 溝状遺構	20
(1) 溝状遺構01・02 (SD01・02)	20

(2) 溝状造構03 (SD03)	20
(3) 溝状造構04・05・06 (SD04・05・06)	21
(4) 溝状造構07 (SD07)	21
b. 土坑	21
(1) 土坑08 (SK08)	21
(2) 土坑19・20 (SK19・20)	21
c. 用途不明遺構	21
(1) SX02・03・04	21
(2) SX05	24
d. ピット	24

第4章 遺物

1. はじめに	25
2. 弘生時代の遺物	25
a. 器種および型式分類	25
b. 竪穴建物出土の土器	26
(1) 竪穴建物01、02の上器	26
(2) 竪穴建物04の上器	28
(3) 土坑出土の土器	28
(4) SX01出土の土器	28
(5) 施文土器	29
(6) 小結	29
3. 平安時代末～中世の遺物	33
a. 概要	33
b. 土器・陶磁器類	33
(1) 土師質土器の型式	34
(2) 須恵器の型式	37
(3) 他産地系陶磁器の年代	41
c. 遺構ごとの共伴関係	42
(1) 土坑08出土の土器	42
(2) 溝状造構07出土の土器・陶磁器	45
(3) 土坑19出土の土器	48
(4) SX02出土の土器・陶磁器	48
(5) SX03出土の土器・陶磁器	50
(6) SX04出土の土器・陶磁器	52
(7) SX05出土の土器・陶磁器	57
4. 瓦	67
a. 分類	67
b. 土坑08出土の瓦	69

c. 溝状造構07出土の瓦	74
d. SX03出土の瓦	77
e. SX04出土の瓦	79
f. SX05出土の瓦	81
g. 小結	81
5. 断面サンプリングによる玉縁丸瓦製作技法の構造的分析	83
a. 目的	83
b. 方法	83
c. 型式分類	84
d. 神出古窯址群資料	90
e. 前提	92
f. 結果	94
g. 考察	94
6. 鉄製品	102
第5章 結語 明石川流域中世世界へのアプローチ - 仏教寺院と荘園社会 -	
1. はじめに	103
2. 中世造構の時期と機能	103
3. 山上の寺、山下の寺 - 普光山日輪寺の立地について -	106
4. 日輪寺所用の瓦、および土器、陶磁器 - 結語にかえて -	111

巻頭図版目次

巻頭図版 1

1. 日輪寺遺跡遠景。南より低位段丘上の遺跡を望む
2. 日輪寺遺跡側から、明石海峡を望む
3. 土坑08出土 複弁八葉蓮草文軒丸瓦（左）
中心三葉花文均整唐草文軒平瓦（右）

写真図版目次

P.L. 1

写真1 調査地全景 北から

P.L. 2

写真2 調査地南半 溝状遺構07（手前）竪穴建物04
(中央) SX01（右） 北東から

P.L. 3

写真3 竪穴建物04（右）竪穴建物05（左） 北から

写真4 竪穴建物04 北東から

P.L. 4

写真5 竪穴建物04中央土坑周辺土器出土状況 北東
から

写真6 竪穴建物04中央土坑周辺土器出土状況 北から

写真7 竪穴建物04土坑1 土器出土状況 北から

写真8 竪穴建物05 北東から

P.L. 5

写真9 竪穴建物04（左）SX01（右） 北東から

写真10 SX01 北東から 9. 酒造遺構 2 柱穴列

検出状況 東から

P.L. 6

写真11 SX01土器出土状況 南東から

写真12 竪穴建物01 南西から

写真13 溝状遺構07 北東から

写真14 溝状遺構07 北から

P.L. 7

写真15 調査地全景 北東から

竪穴建物02（中央左） SX05（中央右）

SX02（手前奥） SX03（手前） SX04（奥）

P.L. 8

写真16 調査地北半 南東から

写真17 溝状遺構01・02・03（奥右から） SX03（丁前）

P.L. 9

写真18 土坑19土器出土状況 東から

写真19 溝状遺構03（奥） SX03（手前） 東から

写真20 調査地全景 南西から

P.L.10

写真21 竪穴建物04出土赤土器 鉢

写真22 墓穴建物04出土弥生土器 小型壺

写真23 墓穴建物04出土弥生土器 小型壺

写真24 墓穴建物04出土弥生土器 小型壺

写真25 SX01出土弥生土器 外反口縁鉢

写真26 SX01出土弥生土器 高杯

写真27 墓穴建物04出土弥生土器

P.L.11

写真28 墓穴建物04 中央土坑出土弥生土器 壺

写真29 墓穴建物01・02出土弥生土器

写真30 土坑09出土弥生土器 壺

写真31 墓穴建物04他出土 施文弥生土器

写真32 土坑08出土須恵器 壺

P.L.12

写真33 土坑08出土須恵器 鉢および壺

写真34 SX04出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真35 SX01出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真36 SK19出土土師質土器 煮炊具・羽釜型

写真37 溝状遺構07出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真38 SX02出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

P.L.13

写真39 SX02出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真40 SX03出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真41 SX04出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真42 SX05出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真43 SX04・05出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真44 SX04・05出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

写真45 SX04・05出土土師質土器 煮炊具・ほうらく型

P.L.14

写真46 溝状遺構07出土土師質土器 その他煮炊具

写真47 SX02出土土師質土器 煮炊具・なべ型

写真48 SX03出土土師質土器 その他煮炊具

写真49 溝状遺構07出土 土器・陶磁器

写真50 SX03出土須恵器 壺

写真51 SX03出土 土器・陶磁器

P.L.15

写真52 SX04出土 備前焼

写真53 SX05出土 青磁・小瀬戸・備前焼

写真54 SX04・05出土 東播系須恵器 鉢

写真55 溝状遺構07・SX02・03出土 東播系須恵器 壺

P.L.16

写真56 溝状遺構07・SX02・03出土 土師質土器
擂鉢外面

写真57 溝状遺構07・SX02・03出土 上師質土器
擂鉢内面

写真58 SP27出土 磚石石材 膜面

写真59 SP27出土 磚石石材 背面

P.L.17

写真60 上坑08出土 複葉八弁蓮華文軒丸瓦瓦当面
写真61 同左 裏面

写真62 SX05出土 二次の焼成痕のある軒丸瓦瓦当
写真63 溝状遺構07出土 複葉十三弁蓮華文軒丸瓦

写真64 上坑08出土 中心三葉花弁均筋唐草文軒平丸
瓦当

写真65 溝状遺構07出土 中心樹状均整唐草文軒平瓦
瓦当

P.L.18

写真66 第7次調査出土 軒平瓦瓦当(範)

写真67 二ツ屋遺跡第4次調査出土 軒平瓦瓦当
(564)と同範

写真68 溝状遺構07出土軒平瓦226四面調整(上左)

写真69 同 凸面調整(上右)

写真70 同 瓦当面

写真71 溝状遺構07出土軒平瓦227四面調整(上左)

写真72 同 凸面調整(上右)

写真73 同 瓦当面

P.L.19

写真74 土坑08出土 軒平瓦210 平丸部四面調整

写真75 同左 凸面調整

写真76 上坑08出土軒丸211四面調整(上左)

写真77 同 凸面調整(上右)

写真78 同 瓦当面接合痕 包み込み式

P.L.20

写真79 土坑08出土 平瓦213 凸面調整

写真80 同左 凸面調整(×印斜格子叩き目)

写真81 上坑08出土 平丸214 凸面調整(コビキ痕)

写真82 同左 凸面調整(斜格子叩き目)

写真83 土坑08出土 平瓦215 凸面調整

写真84 同左 凸面調整(平行叩き目・縄目均等)

写真85 土坑08出土 平瓦217 凸面調整

写真86 同左 凸面調整(縦位ナデすり消し)

P.L.21

写真87 土坑08出土 平瓦218 凸面調整

写真88 同左 凸面調整(縦位ナデ)

写真89 上坑08出土 平丸219 凸面調整

写真90 同左 凸面調整(平行叩き目の中不定方向ナデ)

写真91 土坑08出土 平瓦220 凸面調整

写真92 同左 凸面調整(平行叩き目の中不定方向ナデ)

P.L.22

写真93 土坑08出土 丸瓦221 凸面調整(斜格子叩
き目)

写真94 同左 凸面調整

写真95 土坑08出土 丸瓦玉縁部223 凸面(玉縁 I
-a式)

写真96 同左 凸面調整

写真97 溝状遺構07出土 平丸231 凸面調整

写真98 同左 凸面調整(平行叩き目・縄目不均等)

第1章 はじめに

1. 丘上の遺跡

私たちの暮らす神戸市域は、かつて東の「摂津国」と西の「播磨国」とに分かれていた。両国の境は、垂水区と須磨区の区境をなす境川であったとされ、今にかつての国郡制の名残を伝えている。

この二つの国はそれぞれが大阪湾と播磨灘というひとつながら異なる海に面し、互いが違う個性をもった文化圏として発展してきた。

海から程近くに、せりあがるようにそびえる六甲山系の横にかき抱かれる摂津国と比べ、播磨国は六甲山系の果つところ、ゆるやかな段丘・丘陵と明石川流域の平野から始まる。明石川を越えてさらに西へ進めば印南台地が広がり、現在の明石市域へと到達する。言わば播磨国の東端、明石川流域周辺だけが現在神戸市域に属することになるのだが、この明石川は、六甲山系に源流をもち、西に進路を取りながら明石平野をへて途中、支流である櫛谷川と伊川が合流してひとつとなり、やがて播磨灘へと到達する。河口周辺は「明石泊」と万葉人に呼びならわされた、いにしえの港である。

この港を漕ぎ出せば、かつての明石大門、今の明石海峡が眼前に広がり、気候おだやかな漸戻内海への玄関口として、西国と都を行き来する船も人も、皆ここを通う海路の要衝であった。

列島の西と東を行き来するためのこの海路がいつ確立されたかは知る由もないが、おそらくかなり古い段階から人の往来は不斷にあったと思われる。そして人々が農耕技術を獲得した弥生時代にはすでに広く知られたルートであったろう。

その弥生時代も終わり近く、日本列島が大和(現在の奈良盆地あたり)を中心とした政権によって、ゆるやかな政治集団のもとにまとまり始めようとするころには、市内でも屈指の大集落群が、明石川流域に形成される。

本書で報告する日輪寺遺跡は、これら明石川流域に残された弥生時代後期の集落遺跡のひとつである。と同時に、さらに時代が下った平安時代から鎌倉時代を経て、戦国時代に至る中世の遺跡もある。



図1 日輪寺遺跡の位置

「日輪寺」遺跡というその名が示すとおり、この場所は天台宗普光山日輪寺という古刹のかつての寺域であり、遺跡の存在する段丘上には寺にまつわるさまざまな遺構が残されているのではないかと期待されている。

今日この地を訪れたとき目にするのは、緩やかな丘とその上に造られた瀟洒な住宅街、そして家並みの間から眼下に垣間見る明石海峡大橋である。

しかしこの若い街並みの地下さほど深くないところには、弥生時代に始まり、千年以上の時を経て、中世・戦国を生きた幾世代もの祖先の足跡が眠っているのである。このことから、今も昔も変わらずこの地は、人間の営みに適した地であり続けてきたことがわかる。そしてこの遺跡と今の街並みに暮らす人々の姿が重なりあったとき、今を生きる私たちの暮らしが、はるか長い時をこえて祖先から受け継がれてきた生命のリレーであることを教えてくれる。

現在の地表面とさほど変わらぬ深さに存在する遺跡でありながら、比較的良好な状態で遺跡が残されていることでも知られる日輪寺遺跡は、普遍と不斷の変化とが共存するふるさとの歴史を知るためによい教科書として、今もこれからも、良好な情報を多く提供してくれるだろう。そういった視線で眺めると、金銀の輝きをもたぬ丘上の廃墟ではあるが、目に見えぬ値千金の輝きがこの地には残されている。

この遺跡が現代にもたらすかけがえのない情報を正しく通訳し、そこに住もうすべての人間に聞こえるよう、地域が守り育していく文化財として輝きを失わぬよう、遺跡を昇華させることは、自治体にとって、地域力を深めるために不可欠の努力である。本書がその活動の一端となることを、願ってやまない。



図2 調査地位位置図

2. 調査に至る経緯

本書で報告する日輪寺遺跡第10次・11次・12次調査は、現住所神戸市西区玉津町小山において行われたもので、同地における宅地開発事業を契機とする。現地での調査は平成20年2月5日から平成20年4月7日まで行い、その後平成21年3月末日まで西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターで出土遺物の整理および調査を実施した。本報告書の刊行をもって日輪寺遺跡第10次・11次・12次調査におけるすべての調査作業を完了とする。

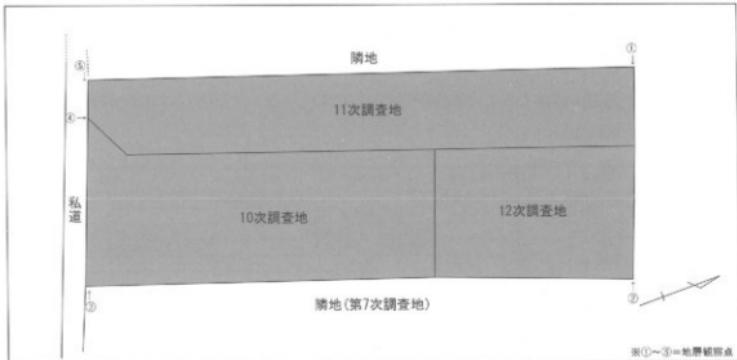


図3 調査地配置図 ($S=1/500$)

3. 調査組織

日輪寺遺跡における調査組織は以下の通りである。

神戸市教育委員会事務局

教育長 小川 雄三（平成19年度）

教育長 橋口 秀志（平成20年度）

社会教育部長 黒住 章久

参事 柏木 一孝（文化財課長事務取扱）

主幹 丸山 潔（埋蔵文化財指導係事務取扱）

文化財課 埋蔵文化財調査係

係長 千種 浩

調査担当学芸員

石島 三和

出土品調査・整理担当学芸員

黒田 勝正・石島 三和

保存科学担当学芸員

中村 大介

4. 過去の調査

日輪寺遺跡ではじめて発掘調査が行われたのは平成5年のことである。本報告以前の調査履歴は表1に示す通りである。

過去の調査においても、本報告同様弥生時代後期から古墳時代初頭の集落遺跡と中世の遺構とが同一層上で発見されているが、このうち普光山日輪寺に関係すると考えられる遺構が確認されたのは第1次、第3次、第4～7次調査である。

第1次調査では平安時代の「地鎮遺構」とされる土坑が、第3次調査では寺の榮地塀の可能性が高い土壘状遺構が、第4～7次調査では室町時代後半まで使用されていた埴状の遺構がそれぞれ発見されている。これらはいずれも寺院伽藍の一部ではなく、その周辺部の施設、寺域に含まれるさまざまな施設の痕跡である可能性が指摘されるにとどまっている。これまでの調査で堂塔址が確認された例はない。

次 数	調査年度	所在地	実績 (m ²)	調査原因	調査概要	調査機関	文獻
1	1993	玉津町小山(59)	1200	市営住宅建設		日輪寺遺跡調査会	
2	1994	玉津町小山字日輪寺5	145	宅地造成	中世窓立壁建物・濠・土堤	横浜市教育委員会	
3	1995	玉津町小山41	400	*	弥生後期住居・15～16C墓地跡	*	平成7年度 横浜市埋蔵文化財年報
4	1997	玉津町二ノ堀	1820	*	弥生後期住居・中世ピット	*	日輪寺遺跡発掘調査報告書 第4次～第7次調査
5	1997	玉津町小山	171	*	*	*	*
6	1998	玉津町二ノ堀字西69	2560	*	*	*	*
7	2000	玉津町小山字日輪寺56	720	*	弥生後期住居・15～16C溝	*	*
8	2006	玉津町小山字五9	4	古木愛敬伐	中世ピット	*	
9	2006	玉津町二ノ堀字町上	300	*	窓立物・ピット	*	
10	2007～2008	神戸市西区玉津町小山561-22, 463	宅地造成	後期住居・中世ピット・溝	*	本書	
11	2007～2008	神戸市西区玉津町小山561-24, 408	*	*	*	*	
12	2007～2008	神戸市西区玉津町小山561-23, 251	*	*	*	*	

表1 日輪寺遺跡 既済調査一覧



図4 日輪寺遺跡既済調査地(S=1/2,500)

第2章 日輪寺遺跡の概要

1. 地理的特徴

本書で報告する日輪寺遺跡は、前章に記した通り明石川流域に所在する弥生時代後期および中世の、二つの異なる時代の遺構が重なり合う複合遺跡である。

しかしこの二つの時代の遺構は互いに有機的な連続性をもたない、個々の存在としてとらえられている。つまり弥生時代後期にこの集落を築いた人々の直接の子孫が中世まで村を存続させたかと尋ねられると、そうかもしれないし、そうではないかもしれない、というあいまいな答えに終始することになるだろう。互いの間に連続性を示すような遺構は現在見つかっていない。

平成5年の第1次調査を契機として、本書で報告する平成19年度・20年度調査まで数えて12回の発掘調査が行われてきたが（表1参照）、どの調査でも掘削深度は極めて浅い。

この遺跡は現在地表面となっている堆積層を取り除いたごく浅い地下に、段丘を形成する明美面とよばれる疊層が露呈することが特徴である。

遺跡はこの地山層上に残されているが、地表から遺跡までの深度は浅いところではわずか15cm程度、深くても50cm程度となる。にもかかわらず比較的良好な状態で遺跡が残されている遺跡としても知られている。



図5 昭和48年神戸市都市計画局作成 1/2,500都市計画図(1/5,000に縮小)

遺跡のひろがりは榎谷川の西方約200m地点、榎谷川と明石川の合流点からは北方約1.3kmに位置する小高い丘（低位段丘）の上…帶と考えられている。現在は宅地開発が進み、かつてより本来の地形がわかりにくくなっているものの、やはり今も遺跡にアプローチするためには、ニュータウンの外周に沿ってできた街路をゆっくりと上がっていくねばならない。

この遺跡の最大の特徴である丘の上の集落ということを体感するための最良の方法は、坂を上り眼下に明石海峡を望むことだが、残念なことに現在はその眺望も周辺の開発とともに損なわれており、海峡は家並みの隙間から伺うばかりで、祖先たちの見た光景を共有することはもはやかなわない。

しかし、この丘のもつ本来の眺望こそが日輪寺遺跡を日輪寺遺跡たらしめる最大の特徴であることに留意せねばならない。それは弥生時代の集落であっても、中世の寺域であっても変わることはない。そこで現在の地図では不鮮明になっている本来の地形に近い等高線を残す昭和40年代作成の神戸市都市計画図（図5）を掲載しておく。

図5に示した昭和40年代の地図でもすでに遺跡のある段丘上はかなり宅地化が進んではいるが、舌のような形で明石平野にのびる段丘本来の形状ははっきり確認できる。現在日輪寺がある場所の背後あたりが標高38.0mをやや超え、この段丘面の頂上をなすもので、段丘自体は明石川と並行して南へ延びる。段丘裾の平地との比高差は20mに満たないが、遺跡を残した祖先たちはここが小高い丘なす地形だからこそこの場所を選んだと考えられる。そして丘を下った周辺には、同時代の遺跡が多数取り巻いている。これも弥生時代、中世ともにかわらぬ地理的特徴である。

2. 歴史的環境

日輪寺遺跡の時代である弥生時代後期も、平安時代末も、どちらも日本社会におけるある種の画期であったといえよう。言わば本遺跡に残されている遺構は、そういった社会のうねりの中を生き抜いた人々が残したものである。このことは地形的特徴とともに、遺跡の特質を決定付ける大きな要因である。本節では、これら二つの時代、この地域の社会がどのようにであったかを概観しておくこととしよう。

a. 弥生時代後期

過去の調査によって、日輪寺遺跡に残された集落は弥生時代後期にはじまり、古墳時代初頭まで継続した集落であることが判明している。現時点では後期を廻る遺構は確認されていない。

日輪寺遺跡は明石川と榎谷川の合流点より北に約1.3km地点の段丘上に位置する遺跡だが、段丘裾の平地には日輪寺遺跡と同時代の集落遺跡が数多く存在し、これら平地の拠点集落から、後期になって分岐した集団が築いたのが日輪寺遺跡の集落と考えられる。

日輪寺遺跡を中心に、段丘裾に点在する同時代遺跡を概観すると、東から時計回りに二ツ屋遺跡、小山遺跡、玉津田中遺跡が存在する。さらに距離を広げると南側には新方遺跡、吉田南遺跡、出合遺跡などがある。これらは一部重なり合いながら広範な遺跡群を形成しており、互いに有機的な関係で結ばれながら発展してきたものと考えられる。

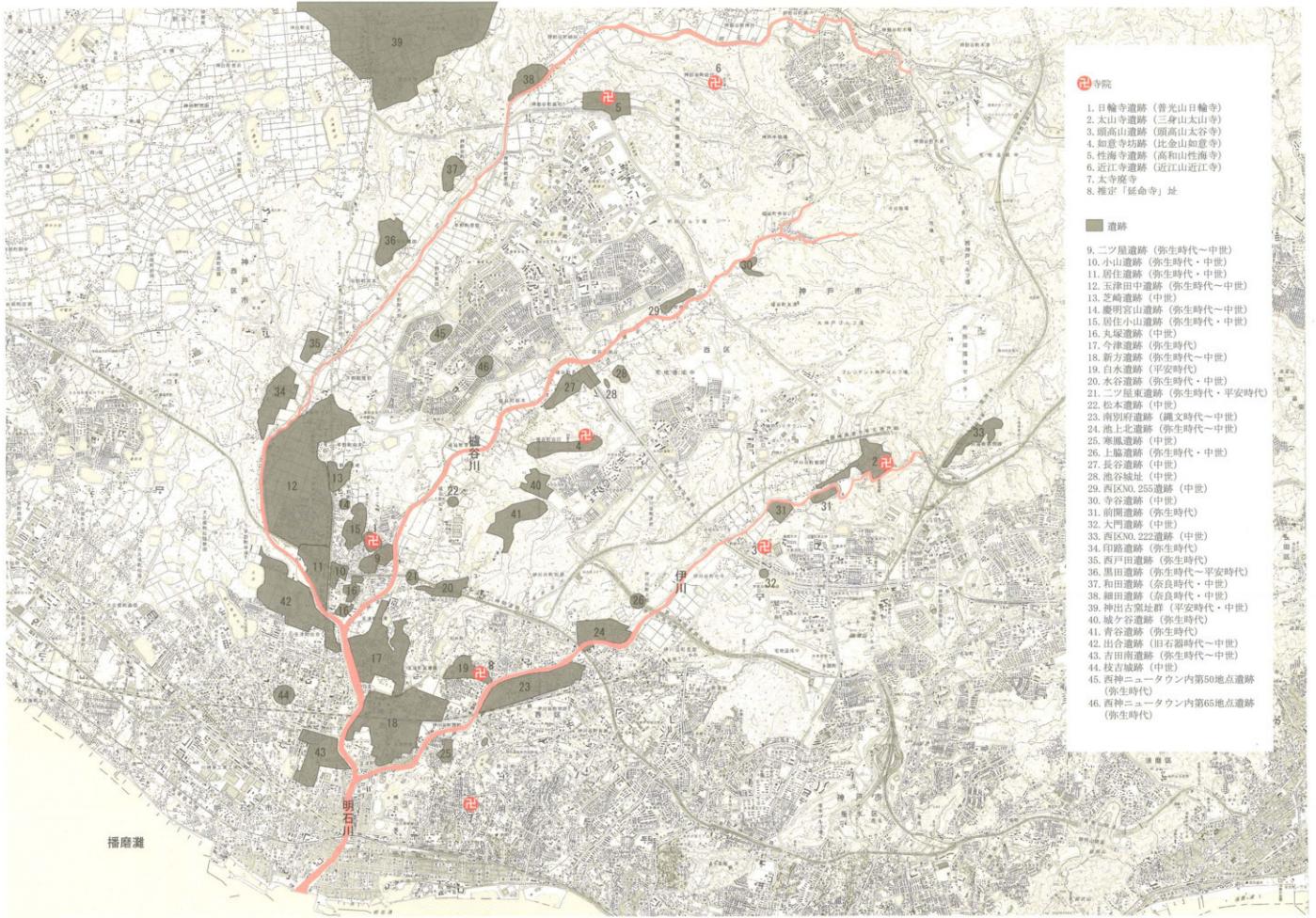


図6 日輪寺遺跡周辺の遺跡 (\$=1/50,000)

農耕技術の獲得による弥生時代の開始とともに、人々は集団で耕作可能な土地を求めた。明石川と榎谷川の合流点北方の平地に密集する弥生時代の遺跡群は、明石川流域を開墾した集団が漸的に拡大したことにより形成されたものである。その中心にあったのが新方遺跡あるいは玉津田中遺跡と考えられ、弥生時代前期から古墳時代まで継続した、この地域における母集落ともいいうべき存在である。この二つの集落を中心に弥生時代数百年間をかけて開墾に開墾を重ねて人々が生産力を向上していった結果、この地域は市内でも屈指の集落群が形成され、繁栄を謳歌していたものと考えられる。

しかし弥生時代も終わりごろになると、日本社会の中に政治的緊張が生み出されていったといわれており、明石川流域の人々もいやおうなくその流れの中に身をおいたようである。

次なる古墳時代への胎動期である弥生時代中期後半から後期は、従来の研究では後にヤマト政権とよばれる汎日本的な政治集団により日本社会全体が緩やかにまとまり始める前段階として、武力衝突的な騒乱が絶えない社会であったと指摘されている。それは水資源をめぐる戦いであつたとも弱權をめぐる戦いであったともいわれているが、この騒乱を経て大和地方に政権が誕生した結果、日本社会に初めて古代国家の萌芽が生まれたと考えるのが有力な説である。

日輪寺遺跡はこの弥生時代後期に生み出された集落である。集落を築いた集団は平地の集落群を母体とし、そこから分岐したものと考えられるが、かれらが周辺の集落と異なり、水田に不向きな丘の上を選択したのはなぜだろう？

後述するが日輪寺の段丘上は必ずしも水のよりつかない枯れた土地ではない。集落の背後に位置する高位段丘からの地下水脈が集落の地下を通っており、場所を違えずに井戸を掘ればわずか数mで湧水地点に達することができる。弥生時代の農耕技術をもって此地での水田經營はかなわぬとしても、水田以外の作物栽培までが不可能だったとはいがたい。したがって彼らを水田耕作の不可能な高地に押し出したのは、水田經營から離脱した集団の形成という母集落群の内的要因である可能性も十分にある。

それと同時に、先述のような日本社会全体の政治的緊張である可能性も考えられる。従来こういった弥生時代の平地集落から耕作不可能な高地への集団の移動は「高地性集落」という概念をもって語られることが多い。日輪寺遺跡周辺にも弥生時代中期から後期にかけて、標高100mを超える山中に集落が形成された痕跡がある。日輪寺の北方から時計回りに西神ニュータウン第50地点遺跡、西神ニュータウン第65地点遺跡、青谷遺跡、城ヶ谷遺跡、頭高山遺跡と表山遺跡の6ヶ所の高地性集落が存在し、神戸市内では六甲南麓の灘区・東灘区と並んで高地性集落の密集する地域である。

集団間の武力衝突が頻発した結果、防衛的な性質をもつ集落が高地に形成され、それらは母集落を同一とするもの同士互いに視認できる位置にあり、烽火等で連絡をとったともいわれるようにな、これら高地性集落の特徴のひとつにその眺望のよさがある。

日輪寺遺跡については、標高の点から高地性集落の概念にはあてはまっていない。また遺跡を構成する要素も平地のそれと同質で、高地性集落的な要素は含んでいないというのが調査結果からの印象としても得られた。しかしこの集落が本来持つ眺望は、おそらく明石川流域のどの高地

性集落より、明石大門方面への監視が効く場所でもある。したがって社会的な外圧もまた、この段丘上に弥生時代後期から古墳時代初頭に限り集落が営まれた理由のひとつとして、可能性を残すことを指摘しておきたい。

ただし高地性集落の大きな特徴である、弥生時代後期前半のうちに衰退・消滅していくものと異なり、日輪寺遺跡の弥生時代集落は後期後半をこえて古墳時代初頭まで継続していく。これはその他の高地性集落とは明らかに異なる時代背景を持つと考えるべき要素である。

近年弥生時代の年代測定法についての見直し論が盛んになる中で、弥生時代の騒乱が起こった時期は後期後半まで下るという指摘が存在する^⑪。弥生時代の年代測定法についてはまだ議論の途上であり現時点では判断しがたい部分を多く含むこと、また日輪寺遺跡の弥生集落が本来的な高地性集落の定義とは異なることも確認した上で、ここまで述べたような集団の内圧・社会的外圧の両方が此地に集落が形成された要因となる可能性として残されると考えたい。

b. 中世

古墳時代初頭をもって一時この段丘上の集落は姿を消す。その間も周辺の平地集落群は栄枯盛衰を繰りかえしつつ営まれ続けるが、基本的には明石川流域の社会の動きは、古墳時代以降のヤマト政権を中心とした汎日本的な政治集団への組み込みと、その後の古代国家形成の流れの中で理解できるものである。

段丘上にふたたび人々が目を向けるのは、古代も終わりに近い平安時代末を待たねばならなかった。ただし今度は眼下に海峡と平野を望む集落としてではない。段丘裾の集落から仰ぎ見る袖陀羅世界として、この丘の上は人々の目に映じていたはずである。

かつて弥生集落があった段丘は、時代を経て天台宗普光山日輪寺の寺域となり、明石川流域に暮らす人々の信仰のよりどころのひとつとなった。

古代の人々が畿内と呼んだ世界から、西へ踏み出したとき最初に目にするのが播磨国明石郡である。明石郡を南北に貫く明石川の流域は、古代律令社会の中で畿内からフローした開発の手がまず届く位置でもあった。

大宝律令の成立と施行によって日本列島における中央集権的政治制度は完成を見るが、その後の人口の増加にともない口分田が枯渇すると、律令社会が生み出した官人・貴族層・社寺等がしだいに土地の私有化を進め、律令國家が目指した土地国有制は徐々に崩壊していく。天平15年(743年)に聖武天皇私財法が定められたことで律令社会のその後の解体は完全に方向付けられ、以後10世紀にいたるまでのこのような土地私有化の流れの中で、畿内に程近い明石川流域の開発は推し進められたと考えられる。

律令期における明石川流域の土地開発は、住吉大社、熊野大社、東大寺、法隆寺等の有力社寺勢力が開発領主となり封戸、神封などが形成されていたようである。「住吉大社神代期」天平年間の記述に「住吉保」(現在の明石市魚住付近)の名が確認でき、ここにすでに中世莊園制度の萌芽を見ることができる。

律令制の崩壊が加速度的に進んだ平安時代後期、社会は急速に武者の世へと傾き始めており、平氏・源氏という武家の2大勢力が台頭していくが、源氏は浜津岡多田荘に根拠地をもち、播磨国にはもう一方の平氏勢力が浸透していたようである。「吾妻鏡」からは垂水区舞子付近の「山田荘」が平氏領であったことも確認できる。同じく伊河荘も平氏領と考えられている⁽²⁾。

以上のように明石川流域を含む明石郡一帯は、比較的早い段階に古代社会から離脱し中世化が進んでいたと見られ、今日明石川流域に多く残される遺跡の中には、この時代の莊園開発によるものが多く含まれると考えられるが、一方で保もなく律令的土地制度が長く残存したとも言われている。平安時代から中世にかけての明石川流域の莊園としては、伊河荘（伊河上荘と下荘）、柳谷荘、平野荘、押部荘、堅田荘、神出荘、山中荘、黒田荘、玉造保などが確認でき、多数の在京領家の名も知ることができる⁽³⁾。これら莊園の厳密な莊城を知ることは考古学的には不可能であるが、現在地名がその名残を伝えており、いずれの荘も大まかな位置を推測することができ、日輪寺遺跡の位置する付近は平野荘に比定されると考えられる。

おそらくこの時代の明石川流域には、国衙領と官人、中央の権門領家とそこに結びついた在地領主など支配層、名主、領民などの農民（被支配層）が入り乱れた中世の社会が繰り広げられていたはずである。郷・惣といった莊園の生産をささえる農民の生活空間、支配層、富裕層の生活空間である居館・屋敷地、そしてかれらの精神活動を支えた信仰の空間である社寺・堂などが、明石川流域を舞台にさまざまに織りなしていた。今日わたしたちが遺跡として垣間見るのは、そういういった中世びとの暮らしの片鱗なのである。

たとえば日輪寺遺跡のある段丘裾に存在する二ツ屋遺跡では掘立柱建物跡、礎石建物跡などが発見されており中世平野荘における富裕層の居宅跡と推測されている⁽⁴⁾。また日輪寺の北方6.5kmの地域はかつての神出荘と考えられるが、この地には神出古窯址群と呼ばれる11世紀から15世紀にかけて操業していた窯址が存在する。ここで生産された須恵器、瓦などは西日本各地に供給され、明石市の魚住窯とならぶ当時の一大生産地としての地位を確保していたが、その背景には平氏、中央権門家などの関係性があったと指摘されている⁽⁵⁾。また明石川流域には、太山寺をはじめとして中世から今日まで法燈を絶やすことのない古刹が多く点在し、今回調査した普光山日輪寺もそのうちの一つである。

これら中世寺院については後ほど詳述するが、その多くがいわゆる顕密仏教寺院であり、明石川流域における中世社会と、顕密仏教寺院とのかくも密接なつながりの中に、われわれはまたこの地に生きた中世びとの心のありようと社會のありようをも垣間見ることができる。末法の世に生きた人々が心のよりどころとした補陀落世界は、かつての人を寄せ付けぬ高みから、人間世界へとより近づきつつあった。

やがて平氏の世が終焉をむかえ鎌倉幕府が成立した後、播磨国はいまだ上昇方向にあった生産力を背景に、南北朝、室町時代にかけて在地領主が悪党として跋扈する世界を形成していく。この時期の明石川流域については「太山寺文書」に多く見られるように、播磨一帯を巻き込んだ赤松一族の興亡の渦中に取り込まれていたと考えられる。元弘3年（1332）の赤松円心の挙兵に際しては、伊河荘は本来持明院統とつながりの深い土地にもかかわらず、太山寺衆徒が醍醐天皇側

に加担している⁽⁶⁾。

戦国時代に入り赤松氏が衰退すると、三好長慶が播磨に進出し三木を根拠地とする別所氏や枝吉城（西区玉津町）の明石氏と対立したため、明石川流域も戦乱に陥ったと考えられている。天文23年（1555）三好長慶が明石氏攻めのため太山寺に陣を張るが、対する明石氏が日輪寺に布陣し、ために寺院は焼き打たれたとの伝承が残されている。同様の伝承が西区学園西町に所在した頭高山遺跡（天台宗頭高山太谷寺）にも残されており、実際に発掘調査によって室町時代後期に火災で焼亡した可能性の高い本堂跡が発見されている。

戦国時代、明石川流域が三好氏に席巻されていく中で、中世びとにとての補陀落世界であり現実世界の権勢でもあった顯密仏教寺院は衰退を余儀なくされていく。

《注》

- (1) 森岡 秀人「考古学が語る本庄地区周辺の地域史」

『本庄村史 歴史編 -神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ-』 2008 本庄村史編纂委員会

- (2) 間尾 真一「太山寺の歴史」「特別展 太山寺の名宝展」展示図録 1993 神戸市立博物館

- (3) 熊田 公「兵庫県の莊園制」「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」 1982 兵庫県教育委員会

および独立行政法人 歴史民俗博物館 データベースれきはく1 「日本莊園」

<http://www.rekihakaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>

- (4) 「二ツ原遺跡」「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」 1995 神戸市教育委員会

- (5) 森田 稔「神出古窯址群の発掘成果」

『神戸市史紀要 神戸の歴史 第19号』 1988 新修神戸市史編纂室

- (6) (2) におなじ

- (7) 石田 勉「戦国争乱の世」「兵庫県史 第3巻 第7章」 1978 兵庫県

- (8) 「頭高山遺跡第7次」「頭高山遺跡第8次」

『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』 1999 神戸市教育委員会

《参考文献》

- 黒田義隆「明石市史 上巻」 1960年 明石市役所

- 入間田 宣夫「武者の世に」 集英社版 日本の歴史 第7巻 1991 集英社

第3章 遺構

1. 基本層序

日輪寺遺跡における地層の特徴は、先述の通り遺構面となる明美面までの堆積が非常に浅い点にある。今回の調査区も標高31.00m地点付近まで掘り下げたところで遺構面に到達しているが、現地表面から遺構面までの掘削深度は平均で40cm程度である。この地山層上面で弥生時代後期と平安時代末～中世にいたる複数の時期の遺構を同時検出している。

基本層序としては図7～9が示すように、調査区全体がほぼ同様の状況を示し、現地表を形成する層の下位に1～2層の旧耕作土が認められるものの、その下位で明確な遺物包含層は存在せず、旧耕作土を除去した地点で遺構面＝地山層となる。今回の調査区は南北に長い長方形を呈するが、南北両端で遺構面上面の標高に大きな差はない。

地山層直上から近現代の耕作土層が認められることから、おそらく本来の地層＝地山上面に遺構が形成された直後に堆積するべき弥生時代後期～中世の包含層は、耕作とともに置換された可能性が高い。また今回調査区のような平坦面は自然地形でなく人為的に形成されたものと思われるが、段丘上を整地した時期についても本来の地層が残されていないため判断が難しい。本来的には地山→弥生時代包含層→中世遺構面・包含層が堆積していたと推測されるが、近現代の耕地化・宅地化のなかでそれらすべてが削平されたため地山層上面での一括検出となったと考えられる。

日輪寺遺跡における堆積層のもう一つの特徴として挙げるべきは、遺構面を形成する地山層＝明美面が礫層・極細砂層・粘土層などの互層をなしているため、粘土層が優勢に堆積している範囲では非常に遺構の残存状態がよいが、礫層が優勢の範囲では極端に遺構の残存状態が悪いという両極端な検出状況を示すことである。今回調査区は北東にむかって次第に粘土層が勝っていくものの、全体的には礫層優勢の傾向を示し、ために過去に行われた本調査区以東の既済調査に比べて竪穴建物の床面などは極端に残存状態不良であった。

なお今回調査地北半部の地山層上面は、広範囲に火を受けて変色したような色調が認められた。遺構からも複数、火を受けて赤化した石材片、壁材片が出土しており、この場所で何らかの火災があった可能性を示していると思われる。しかし地山面の変色の度合いは少なく、目視でのあいまいな確認にとどまるものであった。

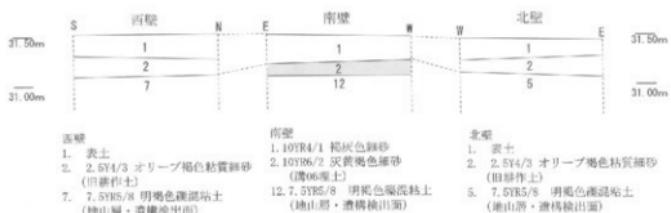


図7 調査地堆積層柱状模式図(S=1/50)

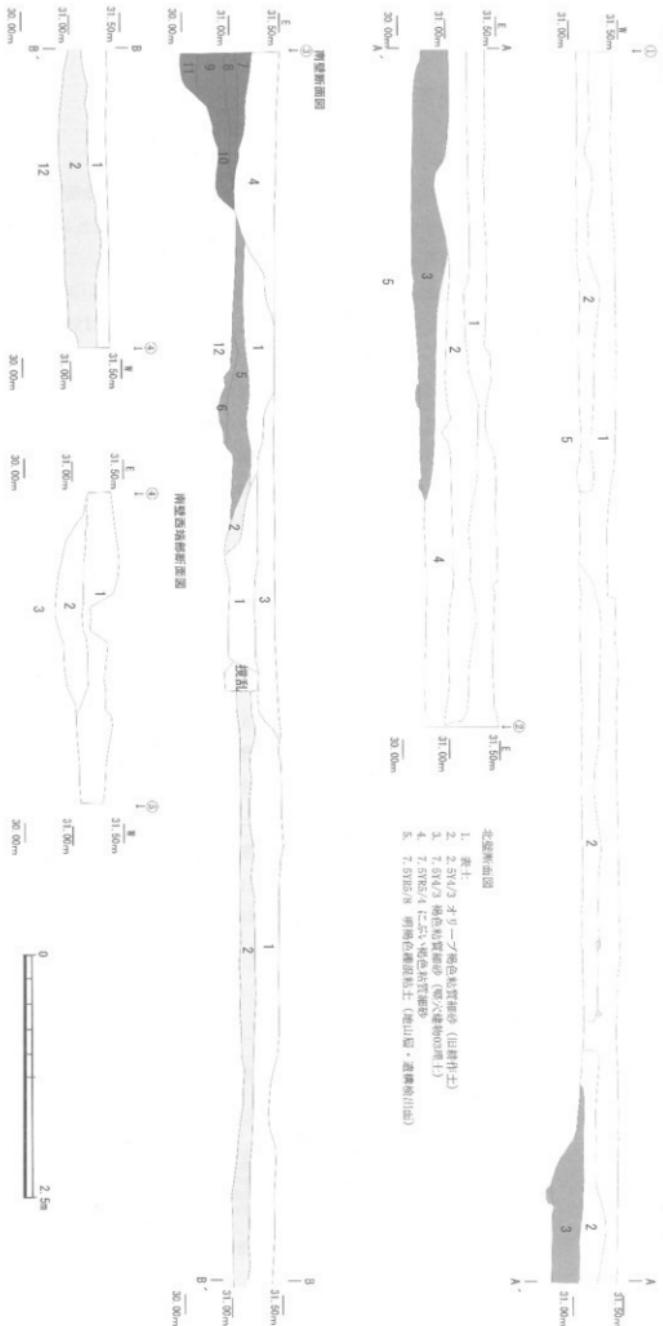


図 B 調査地北壁および南壁断面図 (S=1/50)

南壁断面図
1.10R2/1 黄褐色粗砂
2.10R6/2 灰黄褐色細砂 (薄6cm厚)
3.10R7/4 に5cm-黄褐色砂 (近現代堆肥)
4.10R4/1 棕褐色細砂 (近现代堆肥)
5.10R2/1 黑褐色粗質粗砂 (窓穴建物6cm上)
6.10R2/1 黑褐色粗質粗砂 (窓穴建物6cm中央上)
7.10R2/1 和灰褐色粗砂
8.10R3/2 黑褐色粗質粗砂 (1~5cm人面頭)
9.10R3/4 に5cm-黄褐色粘質砂 (1~5cm人面頭)
10.10R5/4 に5cm-黄褐色粘質砂 (1~5cm人面頭)
11.2.5m/3 に5cm-黄褐色粘質砂 (5mm人面頭)
12.7.5m/8 明褐色粘質粘土 (堆山層・堆積層上部)
7.~11. 壊石堆土

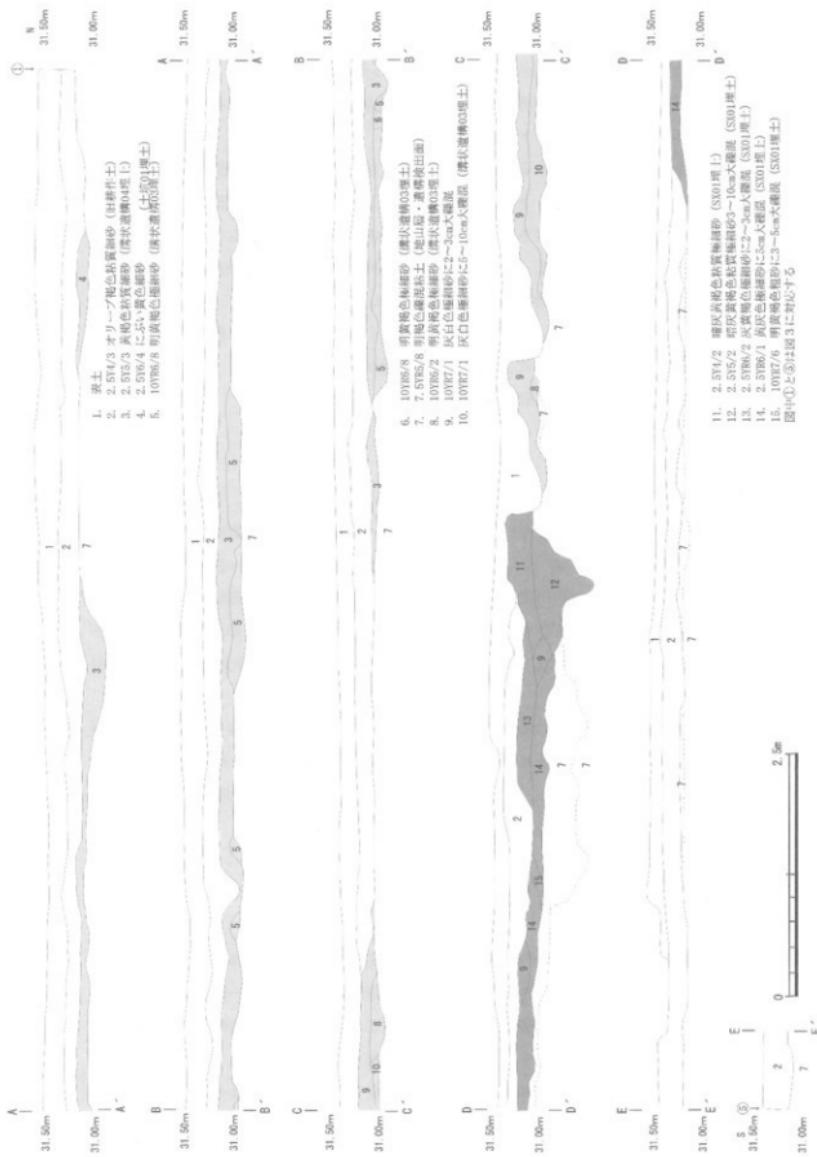


図9 調査地西壁断面図 (S=1/50)

2. 遺構の概要

前章で述べたとおり、今回の調査区では標高31.00m～から31.20m地点で露呈する地山層上面で、弥生時代後期と中世～平安時代末の2時期に人別できる遺構を検出した。

弥生時代の以降と断定できるものは竪穴建物が4棟、土坑が3基、竪穴建物の可能性が考えられるが、正確な機能の不明な遺構が1ヶ所である。

中世～平安時代末の遺構と判断できるものは溝7条、土坑2基、井戸の可能性が高い遺構1ヶ所、用途不明の落ち込み3ヶ所、ピット多数である。ピットには、内部から礎盤となるような石材がすえられている、あるいは埋め戻されているような状況で検出しているものもあり、建物の柱穴である可能性が高いと考えられる。ただし規則的な配列の柱穴列として検出できたものではなく、最終的に本調査区内で掘立柱建物の存在は確認できないと判断した。

その他、遺物をまったく出土しない土坑が複数ヶ所認められたが、これらは埴土の状況も他の遺構と異なり、植生痕跡など自然現象によるもの可能性がある。

以下時期の判別出来たものについて詳述する。

3. 弥生時代の遺構

竪穴建物4棟のうち、全体を確認できたのは竪穴建物04とした1棟のみで、その他はごく一部を調査区端辺にそって検出したにすぎない。竪穴建物02は、平成11～12年に行われた東隣地での第7次調査に際して確認されている「SH41」と番号が付された建物址と同一遺構である。また竪穴建物04の北西直近で竪穴建物の可能性が非常に高い半円形の落ち込みを確認しているが、明美面の礎層上で遺構そのものの残存状態が悪く、竪穴建物として明確な平面形を確認することができなかったため他の可能性を残るものとし、この遺構には用途不明遺構を意味する「SX」01と番号を付した。

なおこの遺構には「竪穴建物03」の検出番号が当初割り振られていたが、調査の進展に伴い竪穴建物以外の可能性が考えられるようになったため「SX」の番号を付した。ために竪穴建物「03」については今回の調査では欠番号となっている。これらの遺構からはそれぞれ弥生時代後期・VI様式の土器が出土しているが、土器の詳細については次章で詳述する。

a. 竪穴建物

(1) 竪穴建物01 (SB01)

調査区北辺で一部を確認した。円形の竪穴建物の一部と考えられるが、全体は不明である。幅約30cm程度の周壁溝が2条めぐり、その内側におそらく高床部とおもわれる一段高い部分が確認できた。今回確認できた範囲からは壁高約23cm以上であることがわかる。建物床面で7基のピットを確認したが、主柱穴となる位置のものではない。中央部分が調査範囲外となるため、炉の有無なども確認できなかった。検出範囲の最大長は6.50m程度で、建物の直径はそれ以上であると推測できる。

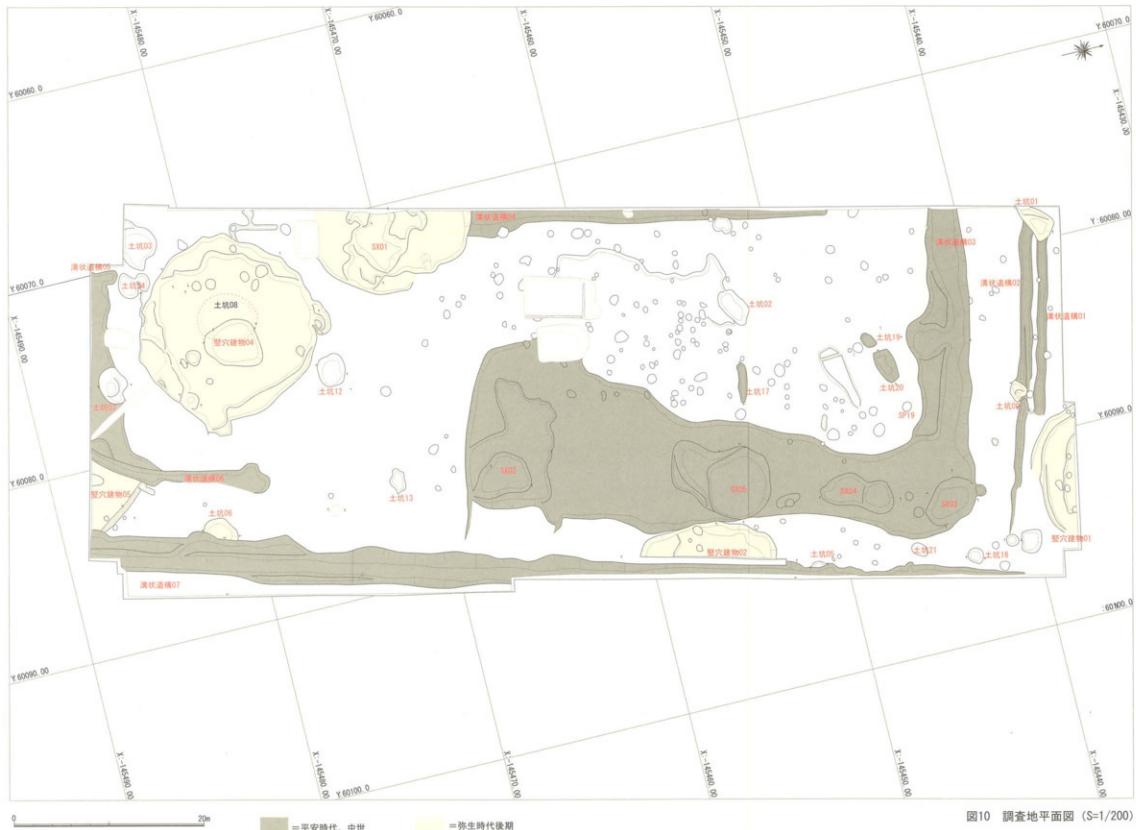


図10 調査地平面図 (S=1/200)

(2) 窓穴建物02 (SB02)

調査区東辺で一部を確認した。平成11~12年に行われた東隣地での第7次調査で「SH41」と番号が付された建物址の西側部分である。建物の中央を中世の溝状遺構07に、西辺を溝状遺構03に切られているため平面不定形をなすが、実際は円形住居だったと考えられる。第7次調査ですでに規模等はほぼ確認されているが、今回の調査で東西径が平成7年度検出部分とあわせて東西径約8.0~9.0mと判明した。高床部が部分的に確認されている点も第7次調査と顕著がない。

(3) 窓穴建物04 (SB04)

調査区南側で確認した円形の窓穴建物で、高床部、張り出し部を有する構造である。東西径約10.3m、南北径約9.5m、壁高約39cmと比較的大型である。北側、東側に張り出しと思われる床が突出した部分が存在する。張り出し部の機能については從来建物入り口説などが指摘されているが、窓穴建物01に関しては、張り出し部床面で土坑が認められるため、入り口の可能性は低いと考えられる。

床面中央に炉跡と思われる浅い凹みが認められたが、明瞭な形状は確認できなかった。また高床部や柱穴の残存状態も悪く、建物全体が崩れたような形状で確認されている。既済の調査においても縄層上面で検出された窓穴建物を中心に複数崩れた建物址が確認されており、建物が使用されなくなつてから早い段階で崩壊が進む地層のためではないかと考えられる。主柱穴も明確には把握できなかった。

この窓穴建物のほぼ中央部分に、平安時代の遺構である土坑08が切り合って存在していた。土坑08については次節で詳述する。

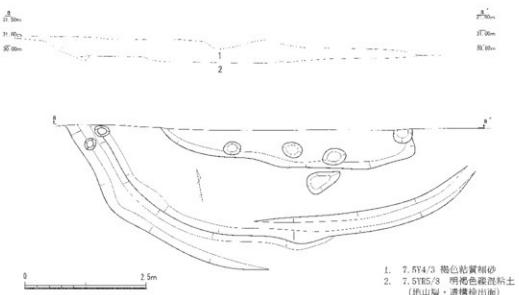


図11 窓穴建物01 (SB01) 平面および断面図

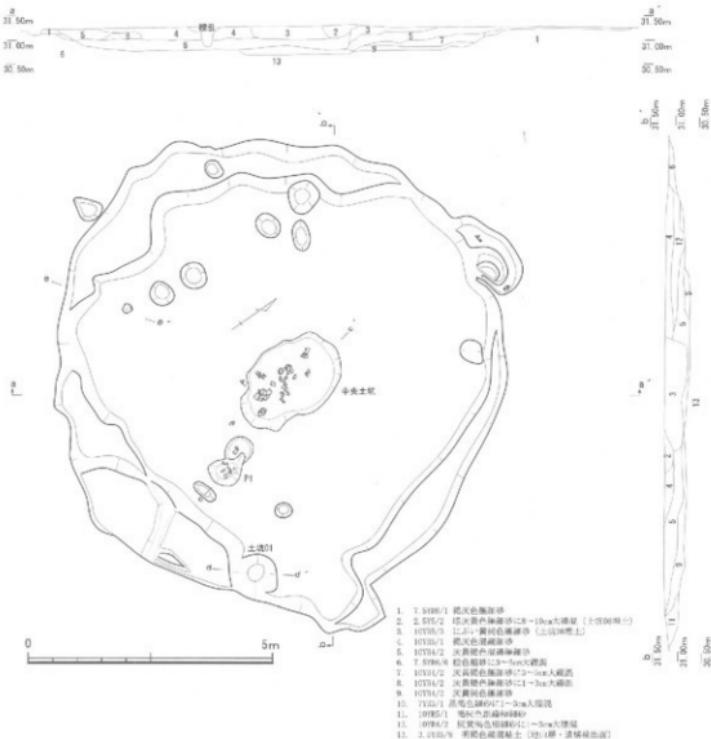


図12 積穴建物04(SB04)平面および断面図

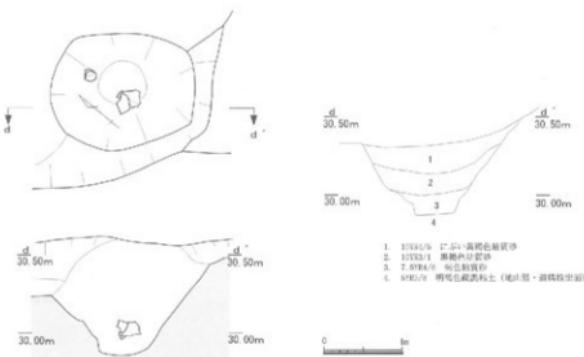


図13 積穴建物04内土坑01 平面および立面・断面図

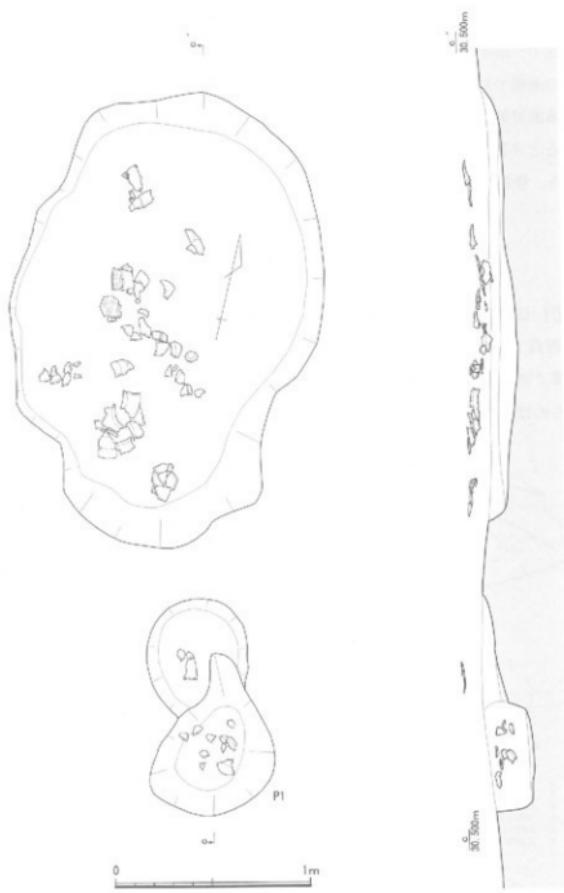


図14 竪穴建物04 中央土坑土器出土状況 平面および立面図



図15 竪穴建物04 床面土器出土状況 平面および立面図

(4) 壇穴建物05 (SB05)

調査区南近で一部を確認した。建物址の南半分は調査区外であり、調査区内で確認できた北半部も、中世の遺構である溝状遺構05および06、07に大きく切られているため、大半がすでに失われていた。床面で灼跡と考えられる炭屑の堆積した土坑を部分的に確認しているため、そこを基点に復元すると半径6.0m前後の壇穴建物ではないかと推測される。ただし円形でない可能性も残されている。壁高約10cmと浅く、直近の壇穴建物04との差が大きすぎることも不自然を感じさせる。

b. 土坑

(1) 土坑01 (SK01)

調査区北西角で確認した長径約1.74m以上、短径約1.28m、深さ約60cmの不整形土坑である。埋土中から多くの弥生時代後期土器片が出土しているが、建物址から出土するものにくらべて破片が小さいものばかりである。

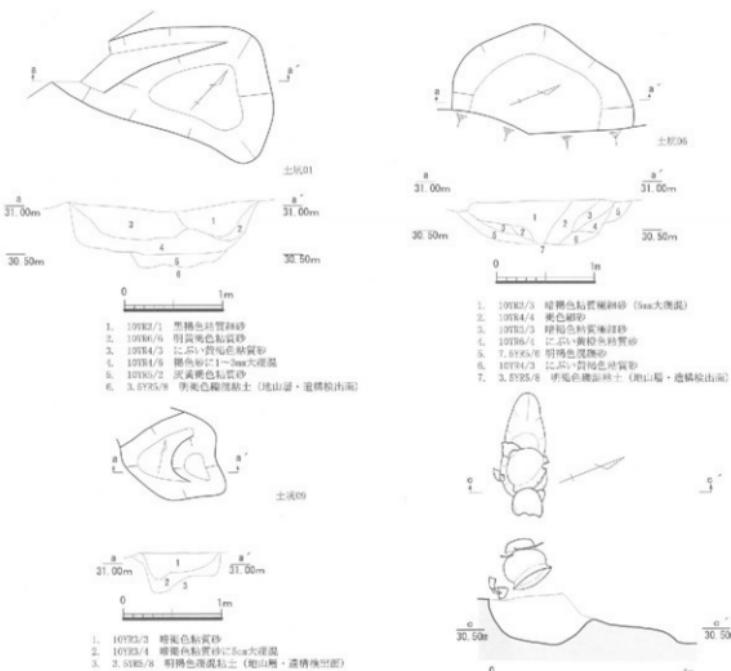


図16 土坑01・06・09 平面および断面図

図17 SX01土器出土状況平面および立面図

(2) 土坑06 (SK06)

竪穴建物04の東側で確認したが、中世の溝状遺構07に東半分を切られているため、全体の形状は不明である。確認できた範囲では直径約1.84m、深さ約44cm程度の土坑である。

(3) 土坑09 (SK09)

土坑01の東側で確認した。長径約1.0m、深さ約40cmの不整形土坑である。土坑01と同様、埋土中から多くの弥生時代後期土器片が出土しているが、建物址から出土するものにくらべて破片が小さいものばかりである。

c. 用途不明遺構

(1) SX01

調査区西辺で一部を確認した。当初直径8.50m程度の円形竪穴建物と思われたが、中心部に不定形落ち込み状に深くなる部分があることが精査で判明した。落ち込みの一部は現代の電柱設営時の搅乱坑だったが、弥生時代後期と思われる搅乱されていない部分も認められた。竪穴建物と土坑の切り合ったものを検出した可能性が高いが、建物としての平面を確認できなかったことと、出土遺物から落ち込み部分と竪穴建物ではないかと考えられる部分とに時期差が認められなかつたため、用途不明遺構として一括して報告する。

外形の最長部分は8.50mで検出した範囲内では半円形を呈している。中央の落ち込み部分は深さ50cm程度の不整形である。

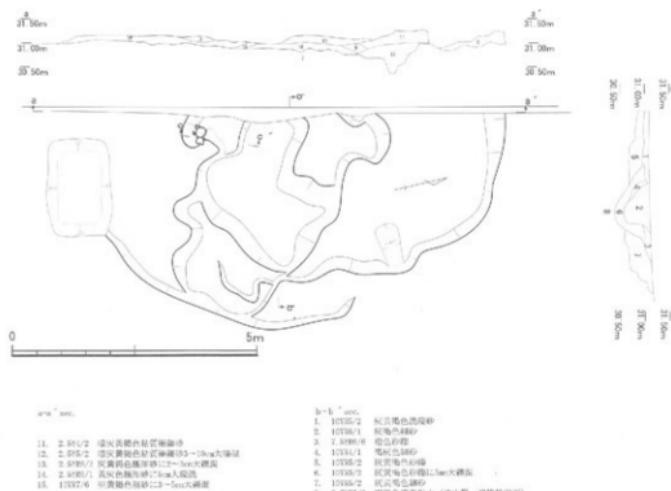


図18 SX01 平面および断面図

4. 平安時代～中世の遺構

遺跡の名が示すように、日輪寺遺跡は古刹普光山日輪寺のかつての寺域であり、寺院関連遺構の発見が期待される。しかしこれまで堂塔跡の検出例はなく、今回の調査においてもその例に漏れるものではなかった。

中世仏教寺院を構成する要素は多様であり、堂塔、坊といった建物とその周辺を結界する堀、塀、石塔までさまざまに存在するが、今回確認できたものはそのいずれにもあてはまらない、不定形な落ち込みを中心とした遺構がほとんどである。

わずかに溝状遺構07としたものだけは、かつての普光山日輪寺の結界をなす堀である可能性が指摘される。その他は大半がSXを冠する用途不明遺構として扱わざるを得なかった。

遺構の時期については、平安時代末の土器を出土する土坑08以外は、すべて中世15世紀～16世紀まで下るものである。ただし、どの遺構からも濃密な瓦の出土を見ており、瓦そのものは共伴する土器類よりかなり古層を示すことが特徴である。

遺物の側面からは寺院伽藍の存在を強く匂わせながら、その本体である遺構には近づくことかなわなかったというのが全体的印象である。

a. 溝状遺構

(1) 溝状遺構01・02 (SD01・SD02)

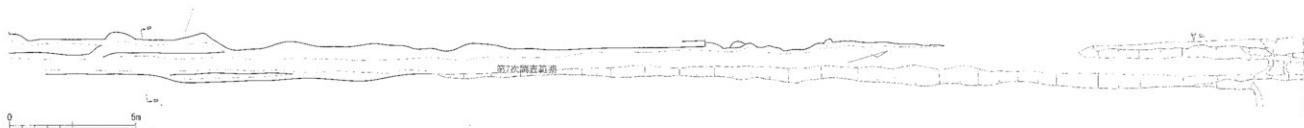
調査区北端で確認した、幅約50～60cm、深さ約7cmの東西に併行して走る溝2条である。埋土からは中世の土器の小片が出土しているが、時代を確認できるほどの量と大きさは得られなかった。今回検出した範囲では01が長約9.0m、02が長約16.5mである。どちらも調査区の東端付近で途切れしており、本調査区より東には延びないが、西側は調査区外まで続くと思われ、全体の形状・規模とも不明である。

(2) 溝状遺構03 (SD03)

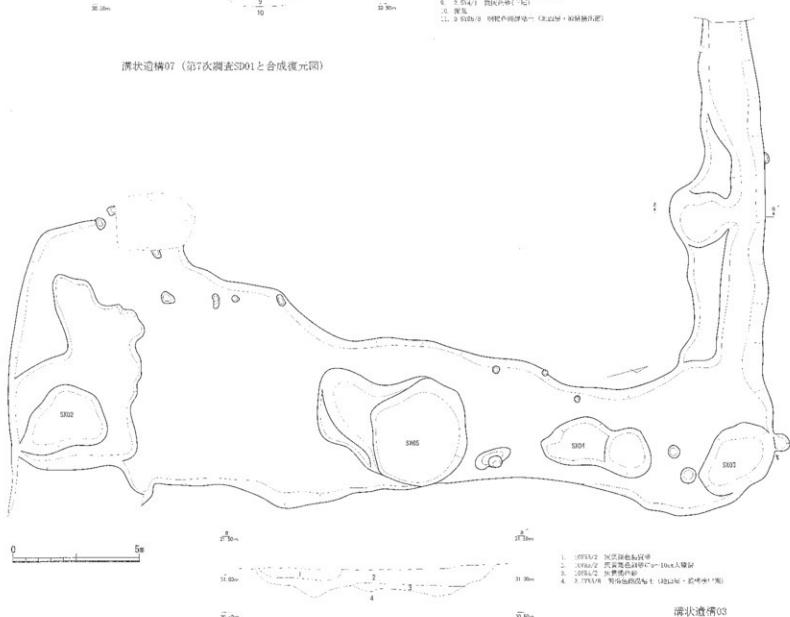
溝状遺構01・02に併行して東西方向に走るが、途中90度屈曲して向きを変え、南北に広がっていく。東西部分で幅2.0～3.5m、深さ約20cm、南北部分で4.0m、深さ約25cm程度だが、平面形は南へ行くほど広がって崩れる。調査区西側へさらに続くもので、全体的な形状・規模は不明である。

東西部分では遺物は小片しか出土しないが、南北部分では大きな破片を中心にまとまった量が出土しているため、2つの遺構の切り合いである可能性も残される。

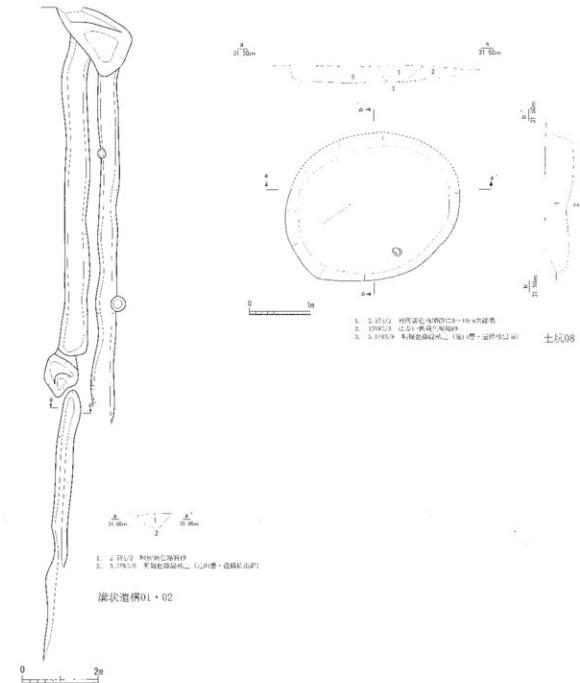
特に南北部分には部分的に掘りより深く落ち込み、土器が集中して出土する箇所3ヶ所(SX02、03、04)と井戸の可能性が高い遺構(SX05)が1ヶ所認められた。これらは溝状遺構03検出開始時には平面としては認められないもので、ある程度掘り下げた地点で、複数の土器集中地点に分かれしていくものであった。溝状遺構03と時間差のある別個の遺構であれば、SX群の示す時期より溝状遺構03の示す時期のほうが新しい可能性が考えられる。



溝状遺構07(第7次調査SD01と合成復元図)



溝状遺構03



溝状遺構01・02

図19 溝状遺構01・02・03・07 土坑08 平面および断面図

(3) 溝状遺構04・05・06 (SD04・05・06)

溝状遺構04は溝査区南側に沿って検出された、長約19.0m程度の溝状を呈する遺構だが、大半が調査区外に続くと思われるため全体の規模・形状は不明である。

溝状遺構05は調査区南端に沿って検出されたが東端は溝状遺構06に切られている。南側の調査区外に続いているため、全体の規模・形状は不明である。あるいは溝以外の形狀の可能性もある。検出された範囲では東西に幅1.7m、長11.0m程度である。

溝状遺構06は溝状遺構05を切って南北に走る。幅70cm、長9.50m分を確認したが、調査区外南北にさらに延びると考えられるため、全体の規模・形状は不明である。いずれの遺構からも時間の判定が困難な程度の土器小片が出土している。

(5) 溝状遺構07 (SD07)

調査区東端で検出されている。第7次調査で「SD01」として報告されている遺構と同一である。南北に長い調査区とはほぼ平行に約50mの長さで南北に走り、検出された範囲で幅2mを測る。深さは約60cm程度で、底部が平坦な点や断面が逆台形である点なども第7次調査と顕著がない。調査区外南北にさらに続く遺構であり、全体の規模は不明である。出土遺物は中世15世紀～16世紀の土器類と平安時代後期の瓦が混在しており、遺構の最終埋没時期は中世と考えられる。

b. 土坑

(1) 土坑08 (SK08)

豊穴建物04のはば中央付近に切り合って存在した遺構で、径約2.1～2.3m程度の円形を呈する。深さは約47cmで、埋土は砾を中心とする。この遺構からは11世紀末～12世紀初頭の土器と瓦が多く出土しており、砾とともにこれらを投棄するための土坑ではないかと考えられる。

(2) 土坑19・20 (SK19・20)

溝状遺構03の南側で検出した。どちらも不整規円形を呈するが互いの配置等に規則性などはなく両者の関連は不明である。土坑19から一括で出土している土器は16世紀初頭を示す。

c. 用途不明遺構

(1) SX02・03・04

溝状遺構03の南北部分の底面で部分的に周りより深く落ち込み、土器が集中して出土する箇所3ヶ所が認められた。これらは溝状遺構03検出開始時には平面としては認められないもので、溝状遺構03と時間差のある別個の遺構であればSX群の示す時期より溝状遺構03の示す時期のはうが新しい可能性が考えられる。一方で同一遺構の可能性も残るが、今回は土器が特に集中して深く下がった部分だけを個別にSXの遺構番号で区別することとした。

いずれの箇所も、出土遺物は中世15～16世紀の土器類と平安時代後期の瓦が混在している。形状は全て不定形で、軸方向にも共通性は認められない。

SX02は不整方形を呈し、深さ約20cm、長辺7.0m短辺4.3m程度である。SX03は溝状遺構03の屈曲部分に位置し、平面梢円形を呈する。長径3.0m、短径2.0m程度、深さ26.0cmを測る。SX04はSX03の南直近に位置する不整梢円形の落ち込みである。長径3.8m、短径1.5mを測る。

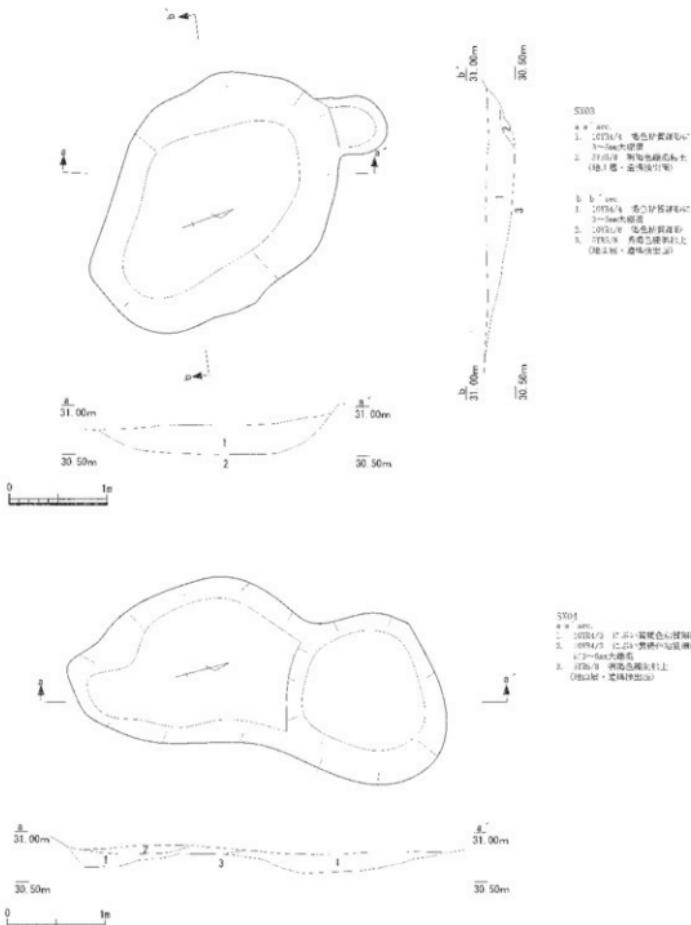


図20 SX03・04 平面および断面図

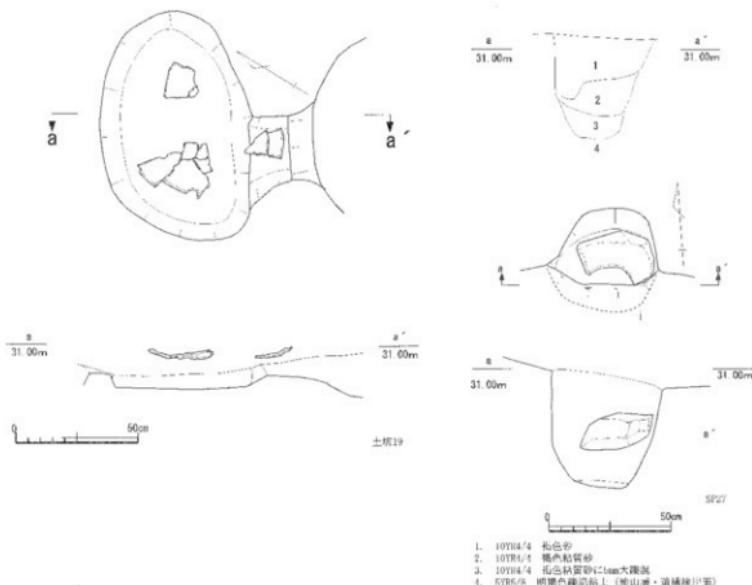
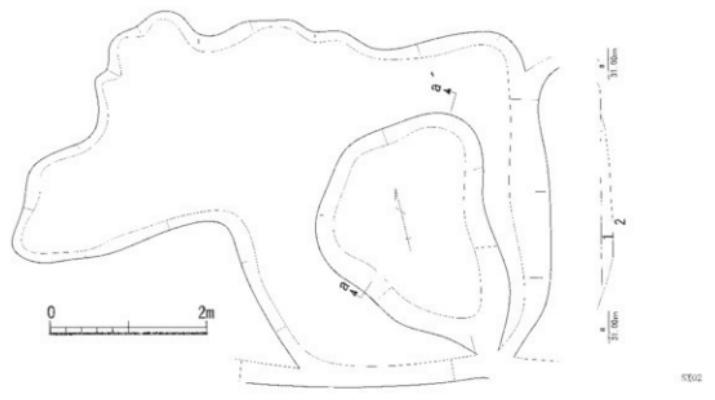


図21 SX02・土坑19・SP27 平面および断面図

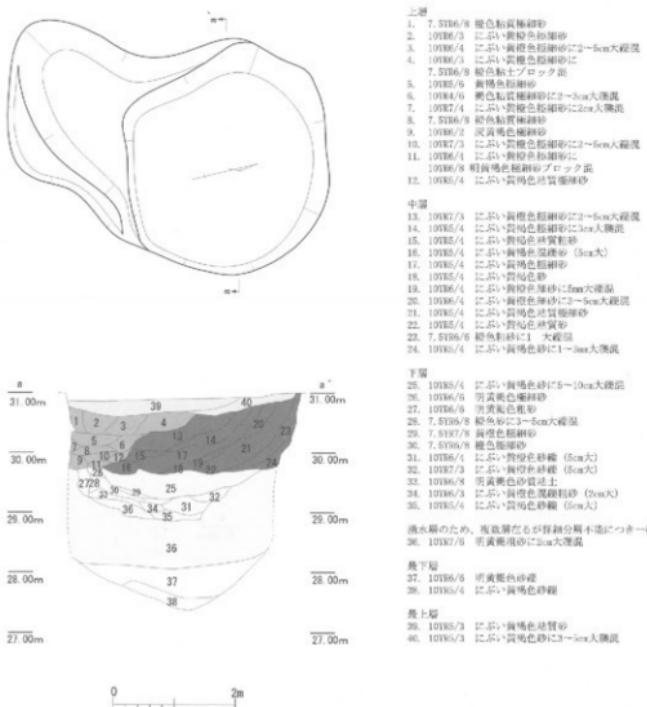


図22 SX05 平面および断面図

(2) SX05

SX04の南側4mの地点で確認した。直径3.3m程度の円形の平面を呈し、深さは約2.0mの垂直に近い素掘り構造である。約1.5m掘り下げた地点で湧水層に達し、完掘後は常に一定レベルで湧水状態を維持していた。これらの状況から、砂質内部隔壁が取り去られた丘井と見られる。

d ピット

調査区北半を中心に多数のビットを検出しているが、配置に規則性がなく、掘立柱建物などの柱穴と証明できたものはなかった。しかしSP27と番号を付したビットは埋土内に柱の礎盤と思われる石材が埋もれており、何らかの構造物の柱穴であると考えられる。

第4章 遺物

1. はじめに

今回調査の特徴としては、近現代に削平されたことによってほぼ地表直下で、遺構面が露呈したことである。そのため明瞭な遺物包含層が存在しなかった。したがって、わずかに旧耕作土に混入したものを除けば、今回の調査で出土した遺物のほとんどすべてが何らかの遺構に伴うものである。

それらの遺物は大きくは「弥生時代末から古墳時代初頭の遺構に伴うもの」と「平安時代末から中世にかけての遺構に伴うもの」とに大別できる。以下それぞれの時期の遺物について詳述する。

2. 弥生時代の遺物

前章で詳述した弥生時代遺構のうち、特に多くの遺物を出土したのは竪穴建物04である。そのほかの竪穴建物からも一定量の出土を見たが、細片が多く、図化できるものは一部である。そのほか、土坑01、06、09のそれから土器の細片が出土しており、これらの土坑の形成された時期が弥生時代後期あるいは末頃と判定できたが、図化できたものは1点だけである。

a. 器種および型式分類

弥生土器の器種としては、壺、壺、高坏、鉢、台付き鉢、小型壺、小型器台、小型壺が確認できた。なお本調査では調査地の東に隣接する第7次調査との境で一部同一遺構を分割して調査している。弥生土器の編年に関しては、黒田恭正の六甲南麓における編年案を基礎に、篠宮正の東播磨の案も参照している^{①)}。

壺

体部に叩きを有するV様式系壺・布留式系壺の2型式が認められる。今回の調査では完形品はほとんどなく、口縁部のみ、底部のみ、体部のみといった破片が大半であるが、最も量的に多いものはV様式系の壺である。口縁部の形態を細分すると(a)中ほどの肥厚ぎみな単純くの字(b)器壁が薄く内湾する口縁部の端面は外傾するものの2種となる。底部は(a)平底あるいはドーナツ底(b)尖底の2種が確認できる。底部についても圧倒的に(a)が多く、(b)はごくわずかである。ただし底部に穿孔の認められるものがそれぞれの遺構で複数存在したが、穿孔のある底部については逆に(b)に多く認められるという特徴も存在した。

壺

壺は口縁部形態から(a)広口壺(b)直口壺(c)二重口縁壺に分類できる。壺と異なり口縁部に装飾を持つものも多く認められ、西摂の当該時期の土器と比較して装飾的で中期様式の延長線上にある要素がより明確である。

高坏

図化可能な破片で明確に高坏と確認できたものは少ないが、破片自体は多数出土している。図化できるものについては(a)有稜高坏(b)塊形高坏(c)装飾高坏の3型式に分類した。それぞれの

遺構からは脚部の破片も多数出土したが、中実の棒状脚がほとんどで、脚部の開く布留式系のものは認められなかった。

鉢・台付き鉢

図化可能な範囲で鉢と判別できるものは(a)屈曲口縁鉢(b)外反口縁鉢の2型式となる。台付き鉢の台部と思われる破片が出土しているが、小型器台の可能性も残る。

小型土器

小型土器としては小型壺、小型器台、小型甕などが確認できた。小型壺は竪穴建物04で複数確認できたが、1型式のみである。小型器台は穿孔タイプとなる。

b. 竪穴建物出土の上器

竪穴建物のうち、図化できる程度に状態のよい上器を出土したのは竪穴建物01、02および04である。竪穴建物05からは細片しか出土しなかった。竪穴建物04がもっとも量的に多く、出土状態も建物床面に近い位置のものが多数認められた。

(1) 竪穴建物01、02出土の上器 図23・24

図化できるものは少ないが、壺が量的に優勢である。3の広口壺は口縁端部に刻み目を有する。10は二重口縁壺の口縁部のみの破片だが、櫛描波状文および刺突文で装飾を施している。

これらのどちらも竪穴建物からは尖底の底部の破片が出土していることから、時期的には庄内併行期と考えられる。竪穴建物02は第7次調査においても同様の時期のものと判定されており、互いに離隔がない。

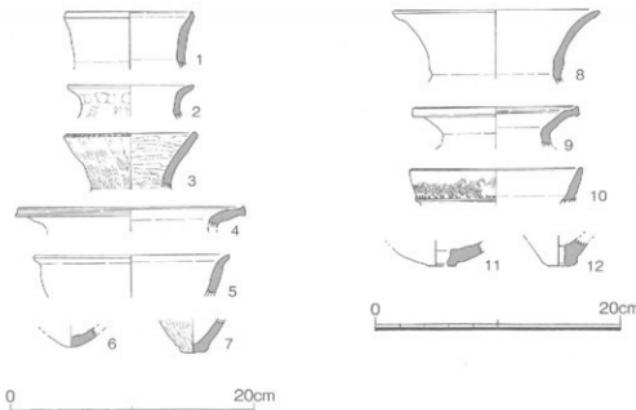
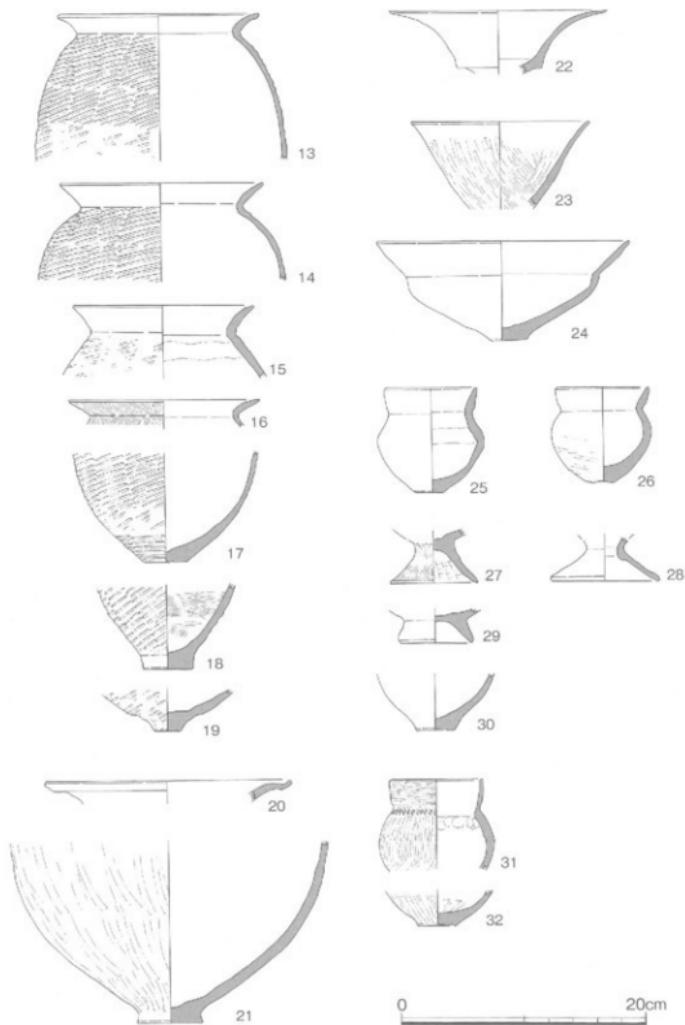


図23 竪穴建物01出土土器実測図

図24 竪穴建物02出土土器実測図



1~16、22、25=中央土坑周辺出土・括土器
31、32=P1出土時

図25 穂穴建物04出土土器実測図

(2) 壺穴建物04出土の土器 図25

床面、ピット内など原位置に近いものが数点認められる。13~16はV様式系の単純くの字口縁部を有する壺だが、どれも中央土坑跡ではないかと考えられる位置から一括で出土したものである。24の小型壺および29の台付き鉢の台部と考えられる破片も同じ一括資料である。31と32の小型壺はP1とした柱穴から出土したものである。

壺穴建物04から出土した小型壺はいづれも類似の形状を示しているが、底部の形態から庄内式併行期初頭にあたると考えられる。一方で壺は破片も含めて尖底のものが確認できないことから、V様式的な傾向が強く、同じ庄内式併行期でも壺穴建物01、02に先行する時期の建物である可能性が高い。

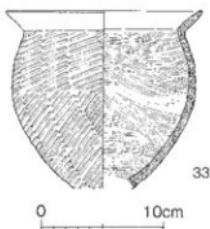


図26 土坑09出土土器実測図

(3) 土坑出土の土器 図26

土坑出土の遺物の内、図化できたのは土坑09から出土した33の壺のみである。単純口縁のV様式系壺だが、分割成形技法を用いていることが明瞭な資料である。

(4) SX01出土の土器 図27

34は布留式系口縁部の破片である。35は外反口縁鉢の完成品である。36は有稜高壺、37は塊形高壺、38は塊形の装飾高壺と、少ない資料数ながらも多様な高壺の型式をみせている。特に38の装飾高壺は塊形のものに貼り付け突帯を施すなど、類例が少ないものといえる。

布留式系壺の口縁部が出土していることと、外反口縁鉢の形態から庄内併行期でも末葉あるいは布留式の可能性が高い。

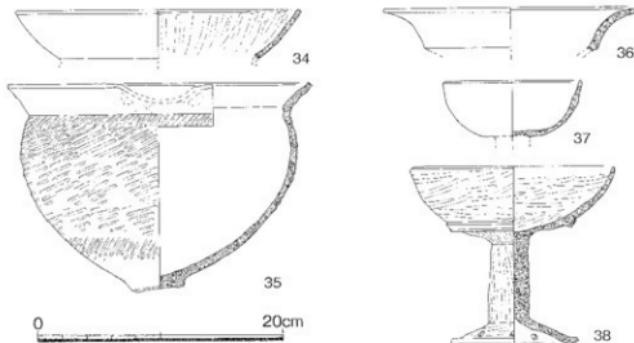
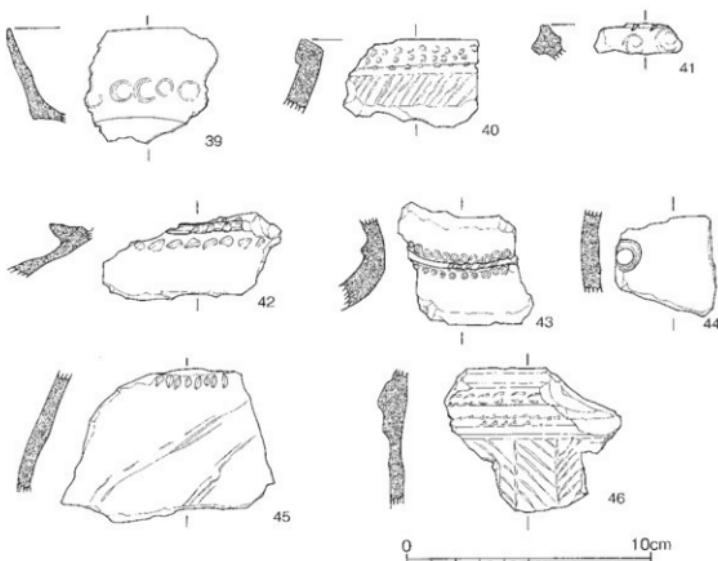


図27 SX01出土土器実測図



39、40、42~46 = 窓穴建物04出土 41 = 土坑01出土

39、41~45 = 壺 41 = 台付き無頸壺 46 = 装飾器台

図28 施文土器実測図

(5) 施文土器 図28

上記の土器以外に、小片ではあるが明瞭に装飾が認められる破片を数点図化した。大半が窓穴建物04からの出土品だが、41のみ土坑01から出土している。これら施文土器については、壺がほとんどと考えられるが、46は装飾器台の脚部の破片と考えられる。綾杉紋の線刻を有し、播磨では類例の少ない資料である可能性が高いが詳細は不明である。40は台付き無頸壺の口縁部の可能性が高い。45は壺の体部の破片だが、肩部の刻み目以外に、磨滅しており不明瞭だが線刻が認められ、絵画土器であると考えられる。これらの装飾はスタンプ、刻み目、線刻、突帯などが主流で、そのほか櫛攝波状文も複数存在する。

(6) 小結

以上のように弥生時代の遺構から出土した資料は、後述する中世の資料に比べて量的に少なく、図化できるものも限られていたが、少ないながらも窓穴建物04（V様式期末～庄内併行期初頭）→窓穴建物01、02（庄内併行期）→SX01（庄内併行期～布留式初頭）という遺構同士の時期的前後関係は推測可能であった。

表2 弥生土器観察表(1)

()内は復元あるいは残存値

器種 記号	出土地点	着種	型式	造形 (L×W 直径) (直径)	口腹部	調整部	底部(脚部)	色調	胎土	参考 等	
1 垂穴建物01	広口壺	(a)	(10.2) (4.7)	内面ナデ 外面ナデ	欠損	欠損	内面5YR6/6 和色 外面5YR6/6 橙色	長石、 チャート 黒色粘物質	16		
2 垂穴建物01	広口壺	(b)	(10.0) (2.7) -	内面模様ナデ 外面縦條ハケ -	欠損	欠損	内面5YR6/6 橙色 外面5YR6/6 橙色	長石 赤色酸化土粒	18		
3 垂穴建物01	広口壺	(b)	(10.4) (4.5) -	背面ハケのち縦條ミガキ 外面縦條ハケ - 山線部削み目	欠損	欠損	内面5YR6/8 橙色 外面5YR6/6 橙色	長石 黒色粘物質 赤色酸化土粒	6		
4 垂穴建物01	広口壺	(b)	(18.3) (1.8) -	内面ナデ (暗成著しい)	欠損	欠損	内面10YR6/4 に赤・黄褐色 外面7.5YR6/4 に赤・褐色	石英、長石 チャート 雲母	13		
5 垂穴建物01	斧	(a)	(16.0) (3.3) -	内面ナデ・ユビオギス 外面ナデ	欠損	欠損	内面10YR7/4 に赤・黄褐色 外面7.5YR8/4 浅黄色	石英、長石 雲母	25		
6 垂穴建物01	斧	-	-	欠損 (1.6) -	欠損	欠損	内面N5 灰色 外面7.5YR7/4 に赤い褐色	石英 雲母	28		
7 垂穴建物01	小型斧	-	-	欠損 (2.3) 1.8	欠損	欠損	内面2.5YR6/8 豊色 外面2.5YR6/8 豊色	石英、長石 チャート	26		
8 垂穴建物02	広口壺	(b)	(16.0) (3.8) -	側窓のため不明	欠損	欠損	内面5YR7/6 豊色 外面7.5YR6/6 豊色	石英、長石 チャート	31		
9 垂穴建物03	広口壺	(b)	(13.3) (3.4) -	内外面ナデ	欠損	欠損	内面10YR4/1 豊色 外面10YR4/1 豊色	石英、長石 雲母	32		
10 垂穴建物02	直 口縁壺	(c)	(14.0) (2.9) -	内外面ナデ 外縁部剥離状況 剥突丸	欠損	欠損	内面10YR4/2 灰褐色 外面10YR4/2 灰褐色	石英、長石 黒色粘物質 赤色酸化土粒	33		
11 垂穴建物02	斧	-	-	欠損 (2.0) 2.5	欠損	欠損	内外面ナデ	内面2.5YR7/4 浅黄色 外面2.5YR7/4 浅黄色	長石 黒色粘物質	31	
12 垂穴建物02	小型斧	-	-	欠損 (2.4) 1.8	欠損	欠損	内外面ナデ	内面5YR5/6 明赤褐色 内面5YR5/6 明赤褐色	石英、長石 雲母	27	
13 垂穴建物04	斧 中央土坑 柄	(a)	(16.1) (12.1) -	内外面ナデ -	内面摩滅のため不明 外縁叩き	欠損	内面5YR7/4 に赤い褐色 外面10YR7/4 に赤い褐色	石英、長石 雲母	29		
14 垂穴建物04	斧 中央土坑 一括	(a)	(16.6) (8.0)	内面摩滅のため不明 外面ナデ	内面摩滅のため不明 外縁叩き	欠損	内面10YR7/4 に赤い黄褐色 外面N2 黑色	石英、長石 チャート	30		
15 垂穴建物04	斧 中央土坑 一括	(a)	(11.6) (5.7) -	内面摩滅のため不明 外面ナデ	内面摩滅のため不明 外縁消滅した跡	欠損	内面7.5YR3/2 黒褐色 外面10YR6/3 に赤い黄褐色	石英、長石 チャート	14		
16 垂穴建物04	斧 中央土坑 一括	(a)	(15.8) (2.2)	内面ナデ 外面縦條ハケ	欠損	欠損	内面7.5YR7/4 に赤い褐色 外面2.5YR6/4 に赤い褐色	長石 チャート 黒色粘物質	11		

表2 弥生土器観察表(2)

() 内は復元値あるいは残存値

器類番号	出土地点	器種	型式	法量 (口径) (高さ) (底径)	口部	調整溝部	底部(脚部)	色調	胎土	実測 番号
17	竪穴建物01	甕	-	欠損 (9.0) 3.6	内面摩滅したナデ 外面叩き	内外面ナデ	内面2SYR5/6 明赤褐色 外面10YR7/6 明赤褐色	石英・長石 チャート 赤色陶化土粒	19	
18	竪穴建物01	甕	-	欠損 (7.2) 4	内面横位ハケ 外面叩き	内外面ナデ	内面5YR7/6 橙色 内面5YR6/4 に赤い緑色	石英・長石 チャート	35	
19	壁穴建物04	甕	-	欠損 (3.5) 2	内面摩滅のため不明 外面摩滅した叩き	内外面ナデ	内面5YR8/3 淡青色 外面2.5YR8/3 淡青色	石英・長石 チャート 赤色陶化土粒	15	
20	壁穴建物04	広口甕	(a)	(20.0) 内外面ナデ (18) -	欠損	欠損	内面10YR5/3 に赤い黄褐色 外面10YR7/4 に赤い黄褐色	石英・長石 チャート	13	
21	壁穴建物04	甕	-	欠損 (15.0) 5	内面ナデ 外面縦位ミガキ	内外面ナデ	内面10Y5/2 灰青褐色 外面2.5Y5/2 灰青褐色	長石 チャート	37	
22	壁穴建物04	高杯	(a)	(18.0) 内外面ナデ (5.3)	内面ナデ	欠損	内面10YR8/3 浅青色 外面2.5YR8/3 浅青色	石英 チャート	9	
23	竪穴建物04	台付き鉢	-	(14.6) 内外面ナデ (7.2) -	内面横位ハケ 外面縦位ミガキ	欠損	内面10YR7/4 に赤い黄褐色 外面2.5YR7/6 橙色	石英・長石 チャート	10	
24	壁穴建物04	鉢	-	(20.5) 摩滅のため不明 8.3 2.6	摩滅のため不明	摩滅のため不明	内面10YR6/4 に赤い橙色 外面5Y7/4 に赤い橙色	長石 チャート 赤色陶化土粒	8	
25	壁穴建物04	小型甕	-	(8.5) 内面ナデ 7.5 内面摩滅のため不明 2.5	内面摩滅のため不明	内外面ナデ	内面5YR7/6 橙色 外面7.5YR8/6 浅青色	石英・長石 チャート 赤色陶化土粒 黑色粘物質	3	
26	壁穴建物04	小瓶甕	-	7.5 内外面摩滅のため不明 7.8 外面摩滅したミガキ 2	内面ナデ 外面摩滅したミガキ	内外面ナデ	内面5 灰色 外面10Y8/3 浅青色	石英・長石 チャート 赤色陶化土粒 黑色粘物質	2	
27	壁穴建物01	小型 盤台?	-	欠損 (4.5) (7.0)	欠損	内面横位ハケ 外面ケズリ・縫隙ハケ	内面5YR6/4 に赤い褐色 外面5YR6/4 に赤い褐色	石英・長石 チャート 黑色粘物質	4	
28	壁穴建物04	小型盤内	-	欠損 (3.4) (8.9)	欠損	内外面摩滅のため不明	内面10YR6/4 橙色 外面2.5YR7/6 橙色	石英・長石 チャート 黑色粘物質	5	
29	壁穴建物04	台付き 鉢?	-	欠損 (2.8) 2.8	欠損	内外面摩滅のため不明	内面5YR6/8 橙色 外面2.5YR7/6 橙色	石英・長石 チャート 黑色粘物質	6	
30	壁穴建物04	小型甕	-	欠損 (4.6) 3.1	内面ナデ 外面摩滅のため不明	内外面ナデ	内面5YR6/6 黄色 外面5YR6/6 黄色	石英・赤母 赤母 黑色粘物質	7	
31	壁穴建物04	小型甕 [P]	-	(7.7) 内面ナデ (7.5) 外面横位ミガキ -	内面ナデ・底部ユビオサニ 外面横位ミガキ・底部剥離	欠損	内面5YR6/4 に赤い褐色 外面5YR7/6 褐色	石英・チャート 赤色陶化土粒 黑色粘物質	1	
32	壁穴建物04	小型甕 [P]	-	欠損 (3.2) (2.9)	内面ナデ 外面縦位ミガキ	内外面ナデ	内面5YR6/6 橙色 外面5YR5/3 に赤い褐色	長石 チャート 黑色粘物質	12	

表2 弥生土器観察表(3)

() 内は復元値あるいは残存値

回収場所	出土場所	器種	型式	法蓋 (口縁) 器高 (底径)	口部	肩部	底部(脚部)	色調	加工	文様等 (有り)
33	十石09	甕	(a)	(160) (145) -	内面横ナデ 外面叩き	内面横ハケ	欠損	内面SYR8-1 にぶい赤褐色 外面SYR8-3 にぶい赤褐色	石英・長石 黒色鉱物粒	20
34	SX01	甕	(b)	(230) (40) -	内面底豆磨き 外面磨滅のため不明	欠損	欠損	内面10YR8-4 浅黄色 外面10YR8-4 浅黄色	石英・長石 チャート 赤色酸化土粒 黑色鉱物粒	22
35	SX01	釜	(b)	24.6 17.1 3.4	内外面ナデ	内面ナデ 外面叩き	内外面ナデ	内面25YR7-2 灰黄色 外面SYR8-6 淡色	石英・長石 チャート	38
36	SX01	萬件	(a)	(206) (33) -	内外面磨滅のため不明	内外面壁減のため不明	欠損	内面10YR5-2 灰黄色 外面10YR5-2 灰黄色	石英・長石 青母	23
37	SX01	高杯	(b)	(11.4) (4.5) -	内外面ナデ	内外面ナデ	欠損	内面6YR6-8 橙色 外面5YR6-8 橙色	石英・長石 チャート 黑色鉱物粒	21
38	SX01 P1	高杯	(c)	- - -	内外面横位ミガキ	内外面ミガキ	内面横位焼き 外画ナフ	内面7YR6-4 にぶい橙色 外面7YR6-4 にぶい橙色	石英・長石 チャート	36
39	壁穴遺物04 山林遺	二重 山林遺	?	- - -	内面横位ミガキ 外面ナデ	欠損	欠損	内面N2 黑色 外面25YR4-1 灰黑色	長石 チャート	1
40	壁穴遺物04	台付き甕	-	- - -	-	欠損	欠損	内面25YR5-6 明赤褐色 外面25YR6-8 橙色	石英・長石 チャート	3
41	土壤01	甕	-	- - -	-	欠損	欠損	内面5YR6-6 暗色 外面N2 黑色	石英・長石	8
42	壁穴遺物04	瓶	-	- - -	欠損	-	欠損	内面25YR5-2 暗赤褐色 外面5YR7-6 暗色	石英・長石 チャート 赤色酸化土粒	7
43	壁穴遺物04	甕	-	- - -	欠損	-	欠損	内面5YR6-6 橙色 外面5YR6-6 橙色	石英・長石 チャート 赤色酸化土粒 黑色鉱物粒	6
44	壁穴遺物04	甕	-	- - -	欠損	-	欠損	内面10YR6-3 にぶい黄褐色 外面10YR7-2 にぶい黄褐色	石英・長石 赤色鉱物粒	4
45	壁穴遺物04	甕	-	- - -	欠損	-	欠損	内面10YR7-3 にぶい黄褐色 外面10YR7-3 にぶい黄褐色	チャート 赤色酸化土粒 黑色鉱物粒	5
46	壁穴遺物04	黄錫器合	-	- - -	欠損	-	欠損	内面5YR6-8 橙色 外面5YR6-8 橙色	石英・長石 チャート	2

※色調については農林水産省監修『新規模拠土色名』による

3. 平安時代末～中世の遺物

a. 概要

もっとも多く当該時期の遺物を出土した遺構は、溝状遺構07とSX05である。また「SX」を冠する遺構それぞれからも一定量まとまって遺物が出土している一方、07以外の溝状遺構からの出土量はごくわずかである。今回出土したすべての土器・陶磁器類は破片であり、完形品として復元できるものはなかった。

なお今回の調査地では、多数のピットを検出したにもかかわらず、すべて網片・少量の出土遺物しかなく、ピットの時期は明確に判定できなかった。ために本章ではピット出土の遺物を除く遺構出土の上器について主に述べることとする。

ピット以外の遺構出土遺物の特徴としては、土師質土器（特に鍋）が量的に最も多く、それに若干の備前焼と須恵器を併い、青磁・古瀬戸といった陶磁器がまれに共伴する。さらに土器以外の遺物として一定量の瓦が共伴するという共通の傾向を示していた。瓦の出土量は土師質土器以外の土器・陶磁器類に比べると優勢である。遺物の大半を土師質土器と瓦が占めているといつてもよい。

これらの土器・陶磁器類が示す時期は、15世紀後半から16世紀初頭（室町時代後半）を中心となっているが、古瀬戸などは若干他に比べて古相を示しており、その他の土器・陶磁器類も多少の時間的振れ幅をもっている。なおかつ共伴する瓦は、ほとんどすべて11世紀末から12世紀初頭（平安時代末）の時期のもので、中世後期に下ると断定できるものはなかった。土器・陶磁器類と瓦の製作年代には約400年近い時期差が存在することが本調査の出土遺物における最大の特徴である。

ただし土坑08とよぶ遺構だけは例外である。この土坑からはその他遺構以上に多くの平安時代瓦が出土したが、共伴する上器はすべて11世紀末から12世紀初頭の時期の須恵器である。土坑08だけが共伴する瓦と土器の製作年代が一致しており、遺構の形成時期およびその性格を他の遺構と異にすること考えられる。

一方その他の遺構出土の遺物はすべて同様の傾向を示すのみならず、SXを冠した遺構同士から出土した上器片同士が接合する場合も多々みられた。この現象はSX名の遺構同士の埋没時期が同時であること、遺構の埋没過程が急速かつ人為的な現象である可能性が高いことを示していると思われる。

b. 土器・陶磁器類

土器・陶磁器類は焼成技法・材質・生産地などの特徴から土師質土器、須恵器、備前焼、古瀬戸と青磁として分類可能だが、個々の器種はそれぞれが型式差を内包している。

機能的視点からこれらを分類すると煮炊具、調理具、食膳具、貯蔵具となり、その分類にそつて器種ごとに振り分けると図66のようになる。ここからは中世の生活空間における土器・陶磁器の多様性がうかがえるとともに、中世明石川流域地域の食器消費のあり方の一端を知ることができる。

(1) 土師質土器の型式

無釉素焼の土器の総称を土師質土器とする。本調査で出土した中世遺物で量的に最も多いものであるが、器種別（機能別）にみるとごく単純な構成をとっており、煮炊具類、食膳具のうち皿、調理具の擂鉢がそれにあたる。特に煮炊具については土師質土器以外の出土を見ない。

〈煮炊具〉

土師質煮炊具については、近年畿内の多くの遺跡から出土例が増加し研究の進展著しい。特に兵庫県下では岡田章一・長谷川眞の両名により神戸市兵庫区所在の兵庫津遺跡出土品について^②、県外では十河良和により堺環濠都市遺跡出土品について編年案が提案されており^③、この2論が現時点では最もよく土師質煮炊具についてまとめられているものと言えよう。両案とも、土師質煮炊具のうち特に「ほうらく」と分類される器形に着目し、詳細な検討を加えているが、本調査出土の土師質煮炊具も、これらの編年案に沿って形態差および型式差を確認することができるだろう。本論では特に市内の遺跡である兵庫津に関する岡田・長谷川案に沿って検討していくこととする。この二つの遺跡は西摂と東播という地域性、中世湊町と農村内の寺院というように、大きな相違点を抱えているが、そのことは比較の妨げにはならず、逆にそれぞれの遺跡のもつ地域性・個性といったものを炙出することができるのではないかと考える。

ほうらく型

岡田・長谷川は兵庫津遺跡出土品について、本論でいうところの土師質煮炊具と同質かつより広義の意味で「土製煮炊具」としての括りを設け、さらに「鍋形」「羽釜形」「壺形」という大分類を設定している。本論でいうほうらく型は、このうち「羽釜形タイプ擂磨型」に該当する。両論の分類の差異について論することは避けるが、この形態の煮炊具についての表現は今も研究者によって揺れており定まっていない。ここでは近世ほうらくへの祖形としてとらえられる点を単純化して「ほうらく型」の呼称をもちいる。

本調査出土の土師質煮炊具としたもののうち「ほうらく型」と分類したものについては、特に鋤部の形態からおよそ3型式に分類可能である。この3型式はすべて、岡田・長谷川のいう「断面三角形状を呈する貼り付け成形の鋤部をもつもの（！類）」の範疇に収まる。岡田・長谷川は突帯の変化と体部最大径の変化の両方に着眼点を置いており、この手法が最も型式変化をとらえる上で有効であることは疑いないが、本調査出土の煮炊具についてはすべて底部を欠く破片、多くは体部の大半も欠損している資料であるため、体部最大径について数量的検討を加えることが不可能と判断し、突帯の変化に視点を絞ることで遺跡内での型式変化を明確にしようと試みるものである。

また本遺跡では、岡田・長谷川のいう1類のうち「鋤部の内面にヨコナデ調整による凹部がわずかながらも認められる」B系列のみが出土しており、両氏が「A系列」と呼ぶものの存在は確認できなかった。このことは兵庫津出土品との差異の最も特徴的な点として指摘できる。以下に本調査出土のほうらく型の分類を示す。

ほうらく型・突帯Aタイプ—鍔部の退化が最も少ない。ただし数値的に厳密な括りを設けているものではない。鍔部の断面が明瞭かつシャープな三角を呈するものである。兵庫津分類のⅠA類に該当する。

ほうらく型・突帯Bタイプ—鍔部の退化が始まっており、断面形が不明瞭な三角か、あるいは流れで低い方形に近い。鍔部の稜線も不明瞭で仕上げも粗く、時に突帯が波打って見えるほどである。兵庫津分類のⅠB類あるいはⅠC類に該当する。

ほうらく型・突帯Cタイプ—鍔部の退化が極まつたもので、不明瞭で低い鍔部に短い口縁部の立ち上がりを作るものである。からうじて貼り付け技法により突帯を形成しているが、次型式の段にかぎりなく近い外見を呈する。兵庫津分類のⅠC類か、あるいはⅡ類との過渡的段階に位置すると考えられる。

岡田・長谷川案は兵庫津分類において、ⅠA→ⅠB→ⅠC→Ⅱ類という変化を想定しており、その実年代に15世紀前半（ⅠA類）→15世紀第3四半期（ⅠB類・ⅠC類）→16世紀第2四半期頃（Ⅱ類）までの時間幅のなかでの変化としている。したがって兵庫津分類に沿い本調査出土のほうらく型の実年代を当てはめるとすると、突帯Aタイプ→Bタイプ→Cタイプへの型式変化と捉えられ、なおかつ15世紀前半から16世紀初頭～第1四半期までの実年代のなかでとらえられると考えられる。ただし本調査で出土した3型式にわたるほうらく型煮炊具は、すべての遺構で共伴した状態で出土しており、層位的前後関係は認められない。

なべ型

兵庫津分類における「鍋形タイプ」のうち特に岡田・長谷川が「鉄かぶと形」と呼ぶものと同じである。岡田・長谷川はこの形態の型式変化について、口縁部形態からⅠ類（口縁部が内側に肥厚するもの）→Ⅱ類（口縁部が肥厚しないもの）→Ⅲ類（口縁部が外側に肥厚するもの）への変化を設定し、その実年代を上記「羽釜形タイプ播磨型」のⅠA類からⅡ類以前までの変化の年代と一致させている。

本調査では、この型式の煮炊具について、ほうらく型にくらべて量的に著しく劣勢ではあるが、兵庫津分類におけるⅠ類からⅢ類まですべての出土が認められる。これもほうらく同様、すべてに遺構で層位的前後関係は認められない状態で出土している。

甕型

兵庫津分類における「甕形タイプ・播但型」と同じである。岡田・長谷川の分類は口縁部および体部形態に着目しているが、本調査ではすべて口縁部のみの破片で体部の形状が不明である。これらの破片はすべて口縁部の形態で判断する限り、どれも岡田・長谷川の言うⅣ類かⅤ類のどちらかに該当すると考えられ、岡田・長谷川はその実年代を上記Ⅱ型式の煮炊具同様の時期に設定しており、本調査で出土した3種の土師質煮炊具各形式差が示す時間幅は、どれも15世紀前半から16世紀初頭～第1四半期までの実年代のなかでとらえられると考えられる。なべ型同様はほうらく型にくらべて量的に著しく劣勢である。

羽釜型

從来より羽釜と呼ばれる形式の煮炊具については、上記3種の煮炊具が「鍋」と呼ばれていたのに対し「羽釜」として区別されてきた。研究も多少ながら「鍋」類にくらべて先んじており、国立歴史民俗博物館の共同研究「中世食文化の基礎的研究」において、鍊柄俊夫が畿内周辺の羽釜について地域ごとに編年案を提案している^④。そのほか岡田・長谷川も前出の案の中で羽釜も「上製煮炊具」に含めて兵庫津における編年案を提示している。

本調査で羽釜型煮炊具は、出土量的には上記のなべ型あるいは壺型煮炊具と同様か、それ以上に少ないが、岡田・長谷川の言う「羽釜形タイプ・B類」と同様のものが複数認められる。

鉄製羽釜が祖形とされるこの型式を両名は、体部形態および長さを主とした口縁部形態に着目して分類しているが、本調査での出土資料は口縁部のみの破片が多く、体部形態について数量的な考察を加えることは不可能である。ただし兵庫津分類では瓦質のものが中心で土師質の羽釜に関する言及は少ない。

鍊柄編年では播磨における羽釜の登場を「中世Ⅱ期」と設定している。本調査区出土の資料については口縁部形態から鍊柄編年「播磨・中世Ⅲ期」以降の時期と考えられるが、鍊柄案が提案された時点では資料数が少なく、詳細は述べられていない。現時点では鍊柄案の「西摂津中世Ⅲ期～Ⅴ期」「播磨中世Ⅲ期」との類似を指摘することが最も妥当と考えられる。その実年代は13世紀後半～14世紀前半および14世紀後半～15世紀前半となる。

その他、短く直線的な口縁部で古相の壺式を示し、岡田・長谷川の兵庫津分類には乗り得ないものが一点認められた。この資料は口縁部のみの破片だが、鍊柄編年の「京都・古代後Ⅲ期」ないし「中世Ⅰ期」あるいは「西摂津中世Ⅰ期」の資料に近似であり、鍊柄編年の播磨案では該当する資料が認められないため、およそこれら二地域の編年を参照するのが妥当と思われる。その実年代は古代後Ⅲ期が10世紀後半～11世紀、中世Ⅰ期が11世紀中葉～12世紀前半となる。

〈食膳具〉

土師質土器のうち食膳具に分類されるものは皿および小皿である。個々の定義については皿を直径12cm以上、それ以下を小皿と便宜的に設定するが、出土量も少なく、復元不可能な細片も多數認められるため数量的考察に基づく根拠はない。本調査で確認できた皿は1点のみで、それ以外はすべて小皿である。

皿・小皿ともに、その製作技法には共通点が認められる。手捏の粘土板の口縁部だけを指先で横位にナデて仕上げた簡素なもので、器高も著しく低いなどの特徴を持ち出土したすべての皿、小皿がこの型式のものである。ロクロ成形のものや西摂に多く見られる京都型のものなどはまったく認められない。

〈調理具〉

土師質土器のうち調理具と考えられるものは擂鉢のみである。擂鉢は外面口縁部下に突帯を有するものと、須恵器擂鉢に類似の形態のものと2型式が存在する。内面は偏前焼によく見られる、縦位に粗い横目を施すものと、強い横位の崩毛目を細かく施し擂目とするものの二種類が認めら

れるが、後者は後ほど詳述する東播系須恵器鉢と酷似しており、その写しである可能性も考えられる。

土師質捕鉢については出土数が少なく、器形と捕目との相関関係については不明であるが、捕目の形態から備前焼の写しとしての捕鉢と東播系鉢の写しとしての捕鉢とが共存していた可能性を指摘したい。

(2) 須恵器の型式

日輪寺遺跡の所在する神戸市西区は研究者の間で「東播系須恵器」とよばれる、古代から中世にかけての須恵器生産地として知られ、その製品は西日本各地の遺跡から出土するなど、広域流通商品であった。本調査区北方6.5km地点に所在する神出古窯址群、西方8.0km地点に所在する魚住古窯址群などがその具体的な生産場所とされているが、本調査でも一定量の東播系須恵器の出土を確認している。

東播系須恵器の生産地は東播磨一帯に点在するとと思われるが、特に実態の解明が進んでいるのは神出古窯址群および神山窯系の資料である。本論でも神出古窯址群に関する編年案⁽⁵⁾に沿って東播系須恵器に関する考察を進めているが、神出古窯址群そのものがおそらく15世紀前半の内に操業を停止している。

本調査で確認できた須恵器にも胎土的特徴から魚住窯系資料と確認できるものが多數認められる。したがって東播系須恵器として一括りにしてはいるが、その供給源は近在の多岐に渡ることが指摘できる。須恵器の種類としては食膳具と調理具、貯蔵具の3種が認められる。

〈食膳具〉

塊

東播系須恵器の代表的器種ともいえる塊については、神出古窯址群出土資料を中心に詳細な編年が確立しており、神戸市内一円の古代末から中世初頭遺跡における時間的標識としての地位を占めている。

その編年については森田稔⁽⁶⁾・丹治康明⁽⁷⁾が神出古窯址群の操業開始時から停止時までの変遷を、生産地からの資料によって明らかにしており、菅本宏明⁽⁸⁾が西摂を中心とした神戸市内の各遺跡から出土した資料を基に、消費地での様相を考察している。3者の論は手法に多少の差異を残しながらも、大まかな編年案としては同様の傾向を示している。森田編年が最も人口に論及する機会も多く、文書化されている資料も多いが、本書では瓦との共伴関係に力点を置いている丹治案にも必要に応じ準拠し、さらに細かいところでは消費地でのより詳細な方を考察している菅本案にそっている。

東播系須恵器窯においてその操業開始時より主力製品であった塊だが、神出古窯址群ではその変遷の中、途中で姿を消した器種である。本調査においても塊が出土しているのは土坑08とよぶ遺構のみである。その他の多彩な中世土器・陶磁器類を出土する遺構から塊の出土は確認できていない。

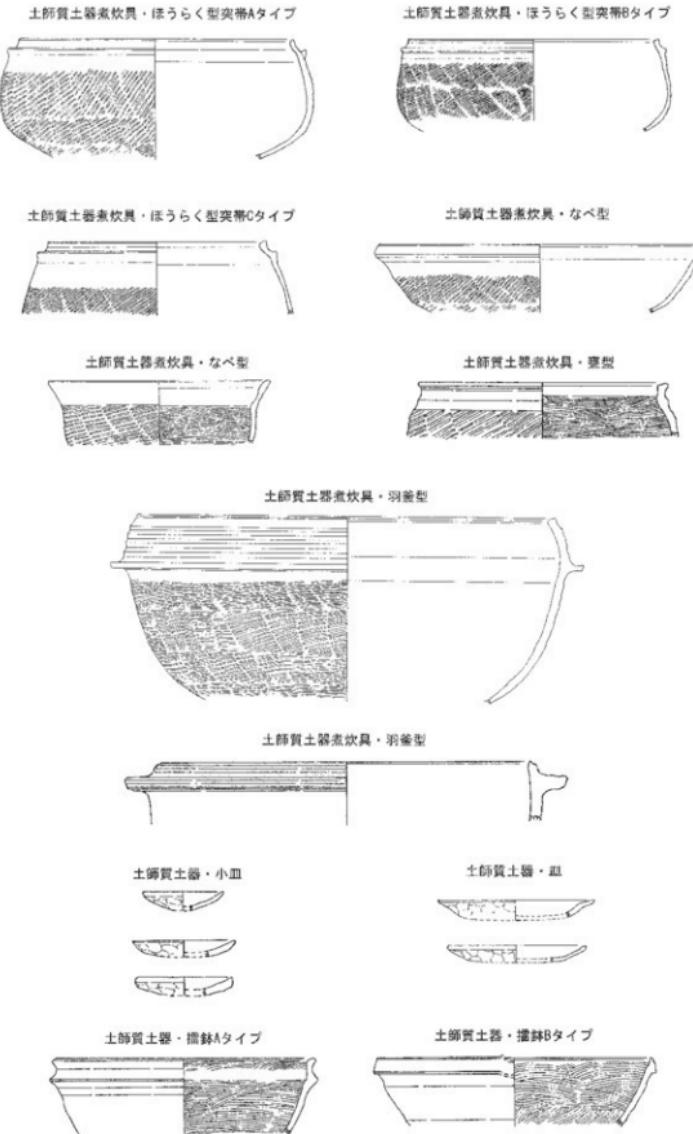


図29 土師質土器の分類

本調査出土の塊の形態については底部内外面の形態に着目すると、輪高台を有するもの、つぶれた平高台を有するもの、高台が消失したもの、の3形態となる。これまで輪高台のものについて編年資料として上げられた例はない。輪高台塊については現時点では型式にのらない器種として扱う。従来の編年案では、平高台から高台消失という底部の変化に対し内面の変化としてミコミが明瞭なもの、ミコミが不明瞭なもの、ミコミが消失したものが付随すると考えられるが、実際にはその中間形態のようなものも多数存在するため、底部の変化だけでは細かな変化はとらえがたく、口縁部から器壁にかけての形態の変化と底部形態の変化とをあわせてみた時はじめて、詳細に年代が絞りしていく。

口縁部を分類すると端部は肥厚せず、やや外反する気味に終わる端部と肥厚した端部のものとに分けられる。それぞれに内湾気味の器壁、直線的な器壁が付随するが、中間形態として肥厚した端部に内湾する器壁のものも存在する。

これらの型式差をまとめるとAタイプ=平高台・浅いミコミ・外反する口縁端部に内湾する器壁→Bタイプ=高台、ミコミ消失・肥厚した口縁端部に直線的な器壁という形態変のなかでとらえられ、森田案「第Ⅰ期第2段階」～「第Ⅱ期第1段階」まで、実年代で11世紀末葉から12世紀前半および12世紀中葉～12世紀後半までにあてはまるものと考えられる。ただし本調査ではすべての型式の塊が共存した状態で出土しており、層位的前後関係は認められない。

〈調理具〉

鉢

塊と並んで東播系須恵器の時間的標識として扱われる鉢であるが、塊が東播系須恵器の歴史の途中で姿を消す器種であるのに比べ、鉢はその終末期まで主力商品として生産され続けた。ためて本調査出土の資料には神出窯系資料、魚住窯系資料の両者が混在して存在すると思われる。両差の違いは主に胎土的特徴の視認によるものだが、一般に魚住系胎土と言われる特徴を備えていないものをここでは総称して神出窯系資料と呼ぶこととする。

鉢はまた、「片口鉢」とも呼ばれるように、本来完形品には片口部が付随している。捏鉢、擂鉢としての機能が従来より指摘されているが、本調査出土の鉢では横位のハケ目を細かく施すものが魚住窯系資料を中心に認められるため、最終形態としての東播系須恵器鉢は、擂鉢としての機能を強化することを志向したものと考えられる。ただし今回の出土品中に備前焼的な縱位の擂目が施されたものはない。

鉢の形態分類については、底部に関しては塊とはほぼ同様の変化が指摘されており、本調査でも輪高台を有するもの、つぶれた平高台を有するもの、高台が消失したもの、の塊と同じ3形態となる。鉢についても完形品の資料が皆無であるため、口縁部と器形の相関関係を明確にすることは不可能である。ここでは主に口縁部形態からAタイプ=拡張しない単純な口縁部のもの、Bタイプ=わずかに下方に拡張したもの、Cタイプ=玉縁状に拡張したものの3型式に分類する。玉縁状の口縁部には直線的な器壁が続く。これらはそれぞれ森田案の第Ⅰ期第1段階、第Ⅰ期第2段階、第Ⅱ期第2段階かそれ以降と考えられる。実年代でそれぞれ11世紀後半、11世紀末～12世

紀前半、14世紀後半～15世紀前半にあたる。森田・丹治編年ともに神出古窯址群出土資料を中心に編年しており、神出が急速に衰退する14世紀以降の準提資料数は少なく、変化も明確に示していない。

一方で口縁部が玉縁化して上下に拡張した形態の東播系須恵器鉢については、広島県草戸千軒町遺跡において多くの出土が確認されている。^⑨

上記のように生産地での編年が不明確ではあっても、消費地の資料とあわせることで、Cタイプ須恵器鉢の実年代を明確にすることは可能であろう。

草戸千軒町遺跡ではこのような東播系須恵器鉢は、Ⅱ期後半を中心としてⅢ期まで、実年代で14世紀中葉～後半と14世紀末から15世紀前半とされる時期の造構に多く認められ、特に「口縁部を玉縁状に厚くするもの」と「口縁部を帯状に拡張させるもの」の2形態が共存することが指摘されている。本遺跡においては玉縁状の口縁部がほとんどで、明らかに帯状に拡張している資料はわずか1点である。

なお草戸千軒町遺跡資料については、偏前焼の間壁編年Ⅲ期と共に伴する例が多い。

以上のように生産地の編年に消費地である草戸千軒町遺跡資料を加えて検討した結果、本調査で出土している玉縁状口縁部（および帯状口縁部）の東播系鉢については上限を14世紀中葉、下限を15世紀前半の時間幅の間で出現するものと位置づけることができる。なお、草戸千軒町遺跡資料には報告例の認められない内面に横位のハケ目を施し括目としているものについては、本調査出土資料についてはそのほとんどが胎上的特徴から魚住窯系と考えられている。このことは15世紀前半のうちに神出窯が操業を停止し、東播系須恵器窯の中心が魚住に移っていたとされる指摘とも齟齬がなく、草戸千軒町資料との相違が意味するところは、単なる資料化から零れ落ちた情報であるのか、それとも具体的な生産窯の違いなのかは両者の比較資料を詳細に調査する方法でしか明らかにされないと考えられ、今後の課題として残る。

〈貯蔵具〉

甕

同じく東播系とみられる須恵器甕が少量であるが認められる。甕は須恵器壺に共伴する平行タタキ日のもの=Aタイプと、中世の陶磁器類に共伴する綾杉文タタキ日のもの=Bタイプとの2型式が存在する。Aタイプの甕は2点出土しているが、どちらも土坑08からの出土品であり、共伴する須恵器壺と近似の年代のものと考えられる。Bタイプの甕は中世造構から出土するもので、綾杉文タタキの甕の年代に関しては、神出遺跡における発掘調査で土坑からの一括出土遺物について1986年に報告された例が存在する^[10]。

この報告によると、一括遺物として綾杉文甕と先述の玉縁口縁部を持つ須恵器鉢=Cタイプ鉢や、A～C各タイプの突帶を有するほんらく型土鍋質煮炊具などが共伴している。神出遺跡資料の甕については、その口縁部形態が非常にバリエーションに富んでいるが、明確な分類は提案されていない。また個々の資料の胎土を理化学的分析によって神出窯系と魚住窯系に分ける試みを行っているが、結論的には綾杉文甕に関しては神出窯、魚住窯いずれにも見られ、実年代として

は14世紀後半～15世紀前半となる、という範囲のことしかわかつていない。しかしこの一括遺物に関しては、本調査の土師質煮炊具や須恵器鉢・壺が同様の構成をなす点が注目される。

(3) 他产地系陶磁器の年代

土師質土器および須恵器が東播地域を産地とする在地系土器であるのに対し、これから述べる備前焼、古瀬戸および青磁は他地域からの流通品である。それぞれにその出自も明確で、各産地において研究の深化している資料類である。備前焼に関しては擂鉢と壺が、岡化できないものも含めて破片の状態で一定量出土しているが、古瀬戸と青磁に関しては古瀬戸平塊片2点水差片1点、青磁塊底部片2点と岡化できない小片の塊口縁部3点、盤口縁部1点がすべてである。数量的には古瀬戸が全出土遺物中最も少なく次いで青磁が少ないとと思われる。機能分類では備前焼堀が貯蔵具、擂鉢が調理具であるのに対し、古瀬戸・青磁は食膳具とした。ただし後者は持つものがその姿形を愛で、所有行為に精神的充足を感じる要素を多分に含む点で、土師質土器や須恵器の食膳具と相違点を有する、調度品的な意味を持っていた可能性を指摘しておきたい。

備前焼・古瀬戸・青磁ともに絶対量が少ないため、分類は不可能である。従って備前・古瀬戸については先学の優れた編年案に沿って、その示す年代の判定のみを行う。

〈食膳具〉

古瀬戸

愛知県瀬戸市に所在する尾張瀬戸窯を中心とする瀬戸焼のうち、特に12世紀末から生産を開始し、その後瀬戸大窯の成立までの約300年間に生産された中国製施釉陶器の写しを指して古瀬戸とよぶ。多彩な器種構成と施釉陶器ならではの華美な様式は、中世世界において東播系須恵器の素朴で古代的な存在と対極にあり、また須恵器の系譜を引き機能美の方向に深化した備前焼とも一線を画す存在であったろう。橋崎彰一によってその編年体系は確立されており⁽¹¹⁾、微に入り細を穿つ編年案は瀬戸焼研究の到達点とも言える。本調査で出土した古瀬戸は、橋崎の分類で平塊および水差しI類と考えられ、平塊の浅い削出輪高台の形状および、水差の細い頸部の形状から、橋崎編年における古瀬戸後期様式IIないしIV期にあたり、その実年代は15世紀前半と提案されている。

〈調理具〉

備前焼

岡山県備前市を中心に中世に開花した備前焼は、同じく中世窯であった神出・魚住といった東播系須恵器窯が中世の終焉を待たずに対し衰退していくのに対し、今日まで繁栄を誇っている。繁栄の要因は擂鉢・壺への生産ラインの特化と還元炎焼成技術からの脱却に成功した点にあると考えられるが、古代須恵器の系譜を引きつつも無釉焼締め陶器として古代的要素を払拭した製品を前面に押し出し、東播系須恵器窯との市場争いともいえる状況を西日本各地で繰り広げた。

本調査でも一定量のすり鉢の出土を認めるが、量的には東播系須恵器鉢と拮抗する、あるいは

やや優勢の感がある。この状況からは東播系須恵器のまさに膝元である明石川流域であってさえ、中世の…時期両者の激しい競合関係が存在していたことが読み取れ、興味深い。

備前焼に関しては、間壁夫妻による「備前焼研究ノート」の第1稿が発表されてからすでに半世紀近くが過ぎようとしているが、今日なおこの編年案の、備前焼研究の基礎としての地位はゆるぎない⁽¹²⁾。その後乗岡実による細分案も提案されており、これは間壁案をさらに強化したものとして評価されるものである⁽¹³⁾。

これらのすぐれた研究によって、また備前焼販路のもつ広域性によって、今日備前焼は西日本各地の中世遺跡における年代判定の指標遺物的役割を担っている。本調査出土の備前焼擂鉢は口縁部形態から、Aタイプ=菱形の口縁部断面の下角がわずかに突出したもの、Bタイプ=口縁部外面にナデを施し口縁帯をなすが、下角の垂下と上方の拡張が同程度のもの、Cタイプ=口縁帯がさらに発達し立ち上がり部が強化されているもの、の3型式に分類できるが、それぞれAタイプが間壁編年ⅣA期・乗岡編年中世3期b、Bタイプが間壁編年ⅣB期・乗岡編年中世4期b、Cタイプが間壁編年同じくⅣB期・乗岡編年中世5期に該当すると思われる。その実年代はAタイプ15世紀第1四半期、Bタイプ15世紀第2四半期、Cタイプ15世紀後半となる。

備前焼擂鉢における15世紀と16世紀の境界線の指標となる口縁部帯に凹線を施したものは認められず、本調査で出土した備前焼の年代的下限を示すものと考えられる。

〈貯蔵具〉

擂鉢と並んで備前焼のもう一つの主力商品であった甕も若干出土している。そのうち口縁部が確認できた2点については、玉縁の幅が狭く、間壁編年Ⅲ期と考えられる。その実年代は14世紀全般にわたるが、体部以下が欠損しているため詳細な年代決定は難しい。

c. 遺構ごとの共伴関係

以上が本調査で出土した土器・陶磁器の分類および年代である。これら多彩多様な中世土器・陶磁器は図66にあらわしたような共伴関係をもって各遺構から出土している。すべての遺構で土器・陶磁器とともに瓦も出土しているが、煩雑さを避けるため瓦は別節で詳述する。

(1) 土坑08出土の土器 図31

土坑08からは東播系須恵器塊(47~73)、須恵器鉢(74~83)、須恵器甕(84・85)および瓦が出土している。47~49は須恵器塊だが口縁端部が外反し、器壁は内湾するAタイプ、4~15はBタイプで程度の差はあるが口縁端部が肥厚している。器甕は口縁部だけの破片であるため判定が難しいものが多いが内湾から直線化したものまで混在する。63・64は須恵器塊の輪高台を有する底部である。65~69までは須恵器塊底部だが、浅い平高台と内面にわずかだがミコミが認められる。70~73も須恵器塊だが高台・ミコミともに消失した段階のものである。

74~78は須恵器鉢の口縁部だが、端部の形状はごくわずかに上下に拡張化がみられる。79~82はごくわずかに平高台が残存する須恵器鉢の底部、83は輪高台の須恵器鉢底部である。

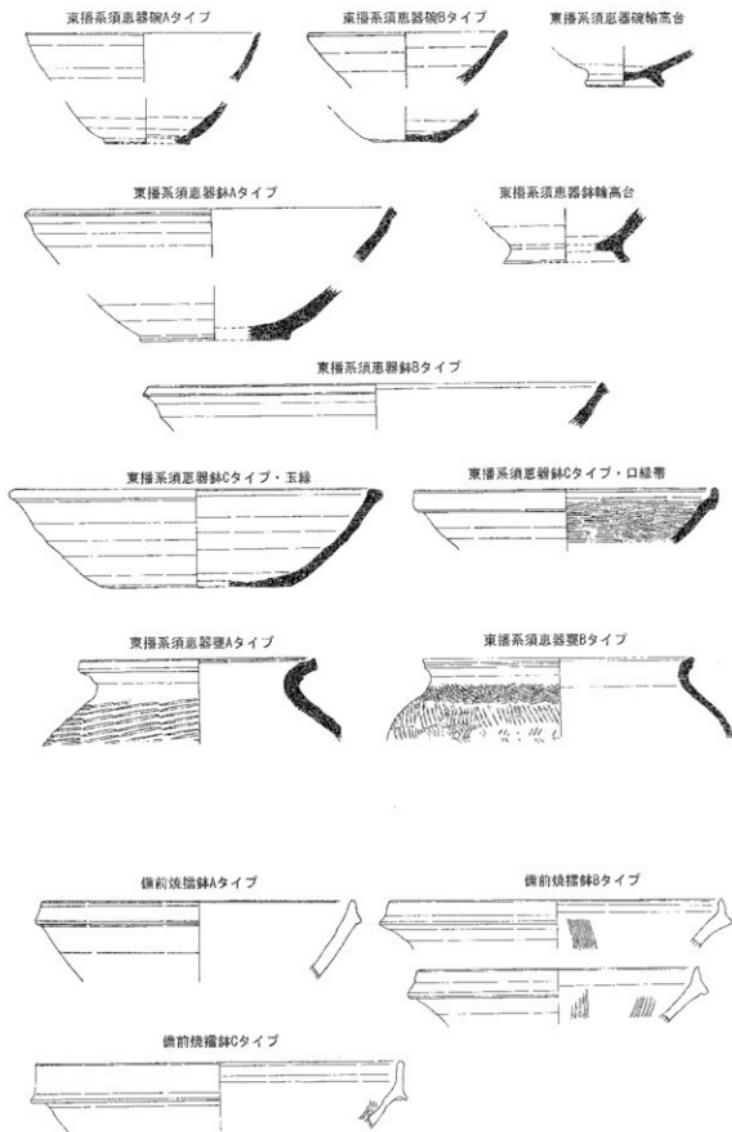


図30 東播系須恵器および他産地系陶器(備前焼)の分類

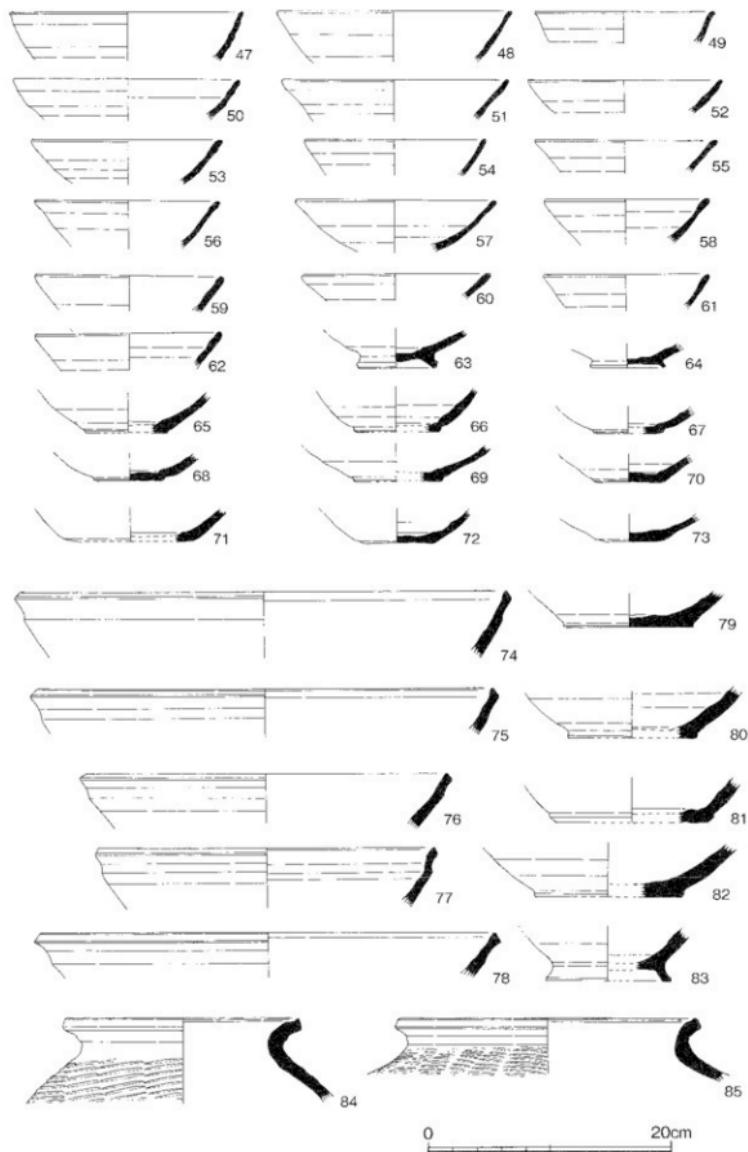


図31 土坑08一括出土土器 東播系須恵器

84・85は平行タタキ目を有する須恵器壺口縁部で、どちらも口縁端部はやや上方につまみ上げてつくる。

これらの共伴関係にある須恵器群のうち、鉢の示す年代は11世紀末～12世紀前半と考える。特に鉢類のほうが顯著に年代の特徴を示しており、鉢で見る限り12世紀中葉に下るものは見受けられない。

(2) 溝状造構07出土の土器・陶磁器 図32・33

溝状造構07からは、土師質土器煮炊具・ほうらく型（86～93）土師質土器煮炊具・なべ型（94・95）土師質土器煮炊具・羽釜型（96）東播系須恵器鉢（97～104）東播系須恵器壺（105）土師質土器・小皿（106～112）と、古瀬戸平塊（113・114）青磁塊（115・116）が出土している。

86と87はほうらく型土師質土器煮炊具のうち突帯Aタイプ、88と89は突帯Bタイプ、90～93は突帯Cタイプである。94、95は土師質土器煮炊具・なべ型だが、口縁部が直線的な94と比べ95の口縁部は玉縁状を呈し、器壁も大きく聞く。

97と98は口縁部が玉縁状に仕上げられた東播系須恵器鉢だが、灰色系の胎土で硬く焼きしまった97と淡黄色系の胎土の焼成が甘い98とが存在する。

98は東播系でも特に魚住窯系に特徴的な胎土であり、内面にハケ目を施すなどの違いも認められる。

100と101も東播系須恵器鉢だが、口縁部は玉縁化しておらず、やや下方へ拡張する段階のもので東播系須恵器鉢としては古相を示す。

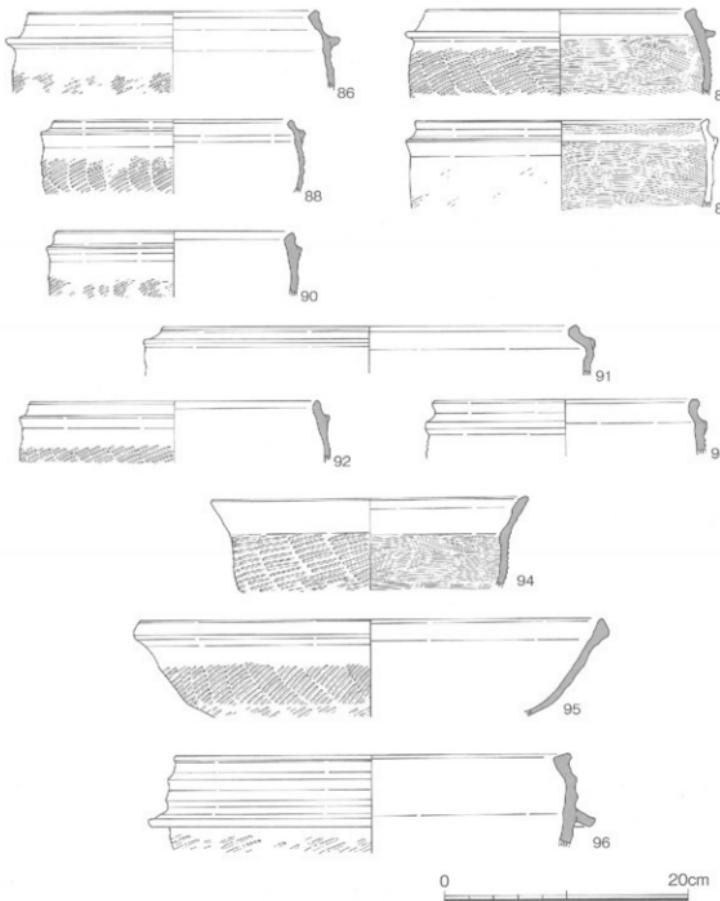
105は東播系須恵器壺の口縁部から肩部にかけての破片だが、綾杉文タタキが頸部付近は縱位、肩部は横位に施されている。

113、114はともに古瀬戸平塊の底部だが、113の釉薬は黄色系の発色を、114は緑色系の発色を示す。どちらも内面に三叉トチンの痕跡を残す。

溝状造構07出土の東播系須恵器鉢については、12世紀前半の古相を示す資料（99～101）と14世紀中葉～15世紀前半の新相を示す資料（97・102）とが混在している。一方土師質煮炊具については15世紀前半から16世紀第1四半期までの各型式が混在している。対して古瀬戸は15世紀前半を示す。

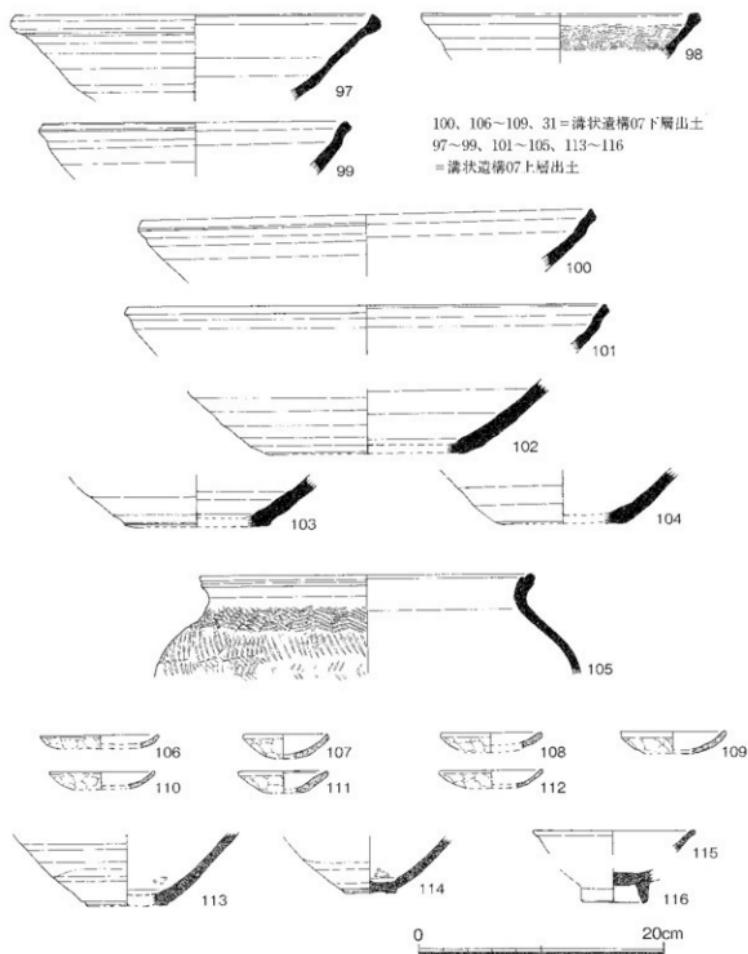
これらの多くは埋土の上層を形成する層から混在して出土しており、層位的な前後関係のない資料である。

106～109の土師質土器小皿だけが埋土最下層からまとめて出土しているが、その他の土器との時間差を判定する資料とはなり得ない。これらのことから、溝状造構07の最終堆積層が形成された時期は、共伴関係にある遺物の内、もっとも新しい時期をしめす土師質土器煮炊具の16世紀第1四半期が下限と考えられる。



- 86, 87 = 上師質土器煮炊具 ほうらく型突帯Aタイプ
 88~90 = 土師質土器煮炊具 ほうらく型突帯Bタイプ
 91~93 = 土師質土器煮炊具 ほうらく型突帯Cタイプ
 94, 95 = 土師質土器煮炊具 なべ型
 96 = 上師質土器煮炊具 羽釜型

図32 溝状遺構07出土土器(1) 土師質土器・煮炊具



97～104 = 東播系須恵器調理具 鉢

105 = 東播系須恵器貯蔵具 壺

106～112 = 上野質土器食膳具 小皿

113, 114 = 古瀬戸食膳具 平塊

115, 116 = 青磁食膳具 塊

図33 溝状遺構07出土土器(2) 須恵器・土師質土器・他産地系陶磁器

(3) 土坑19出土の土器 図34

土坑19からは土師質土器煮炊具・羽釜型1点(117)だけが出土している。錫柄編年における播磨中世Ⅲ～Ⅳ期の資料に近似している。その実年代は13世紀後半から15世紀中葉までの幅を持つ。

(4) SX02出土の土器・陶磁器 図35・36

SX02からは土師質土器煮炊具・ほうらく型突帯Aタイプ(118～121)・ほうらく型突帯Bタイプ(122～126)・ほうらく型突帯Cタイプ(127)・なべ型(128・129)・羽釜型(130)と東播系須恵器鉢(131～133)・東播系須恵器塊底部(134)・東播系須恵器壺(135)・土師質土器擂鉢(136・137)・備前焼擂鉢(138～139)・青磁塊底部(141)が出土している。

131は東播系須恵器鉢だが灰色系の胎土で硬質な焼成状態を示し、口縁部が玉緑化している。132の東播系須恵器も灰色系の胎土で硬質な焼成状態だが口縁部が上下に拡張して口縁帯化しており、かつ内面にハケ目を施し描目をしている。

136・137とともに土師質土器擂鉢だが、突帯を有する136と比べ、137は上下に拡張した口縁部や器壁のプロポーションなども東播系須恵器鉢に酷似している。片口部が残存している。

138・139はともに備前焼擂鉢だが、口縁部の形態は上下に若干拡張ぎみな138と口縁帯の発達した139とで型式差が存在する。

これらはすべて浅い落ち込み内の同一層をなす埋土から出土しており、層位の前後関係はない。もっとも新しい時期を示すのは、備前焼擂鉢139の15世紀後半である。

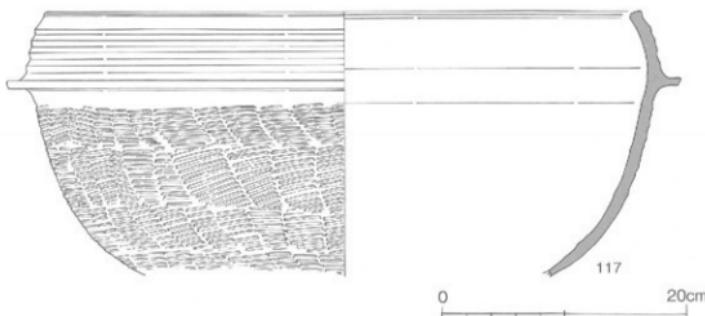


図34 SK19出土土器土師質土器・煮炊具 羽釜型

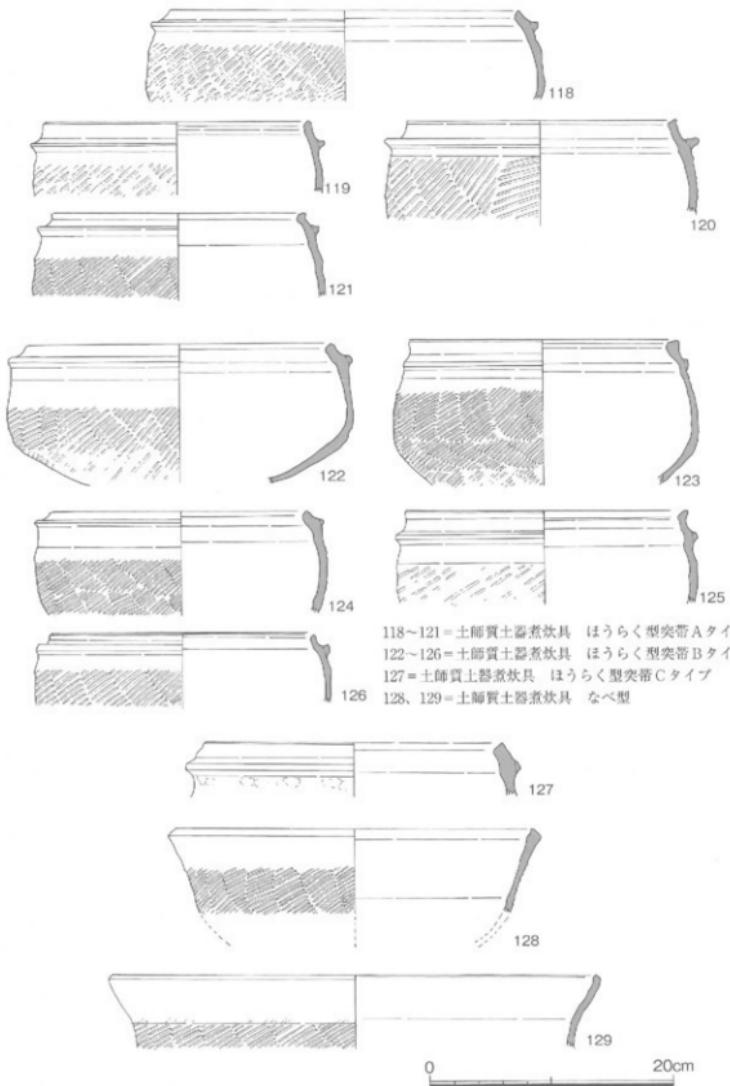
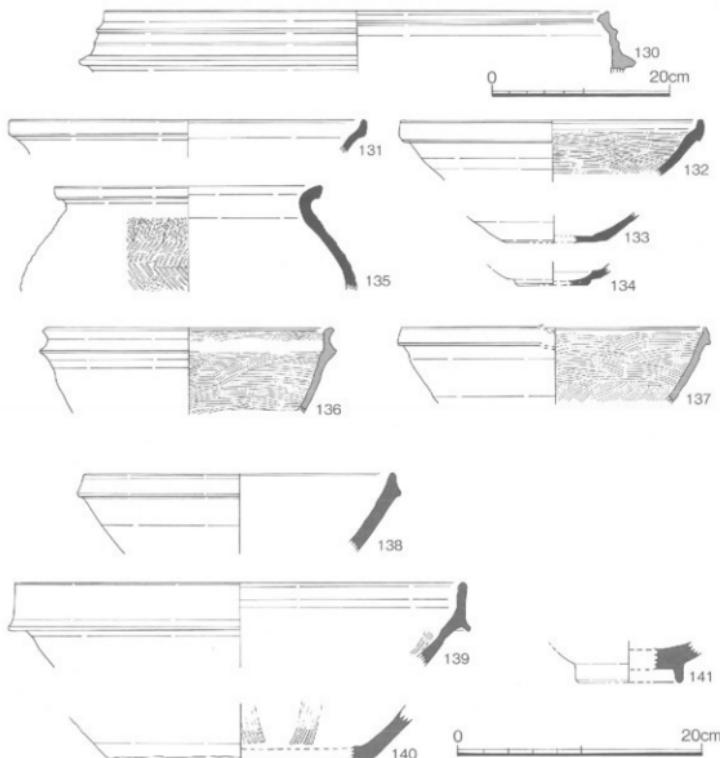


図35 SX02出土土器(1) 土師質土器・煮炊具



130=土師質土器煮炊具 羽釜型

134=東播系須恵器食器 塊

136、137=土師質土器調理具 捕鉢

141=青磁食器 塊

131~133=東播系須恵器調理具 鉢

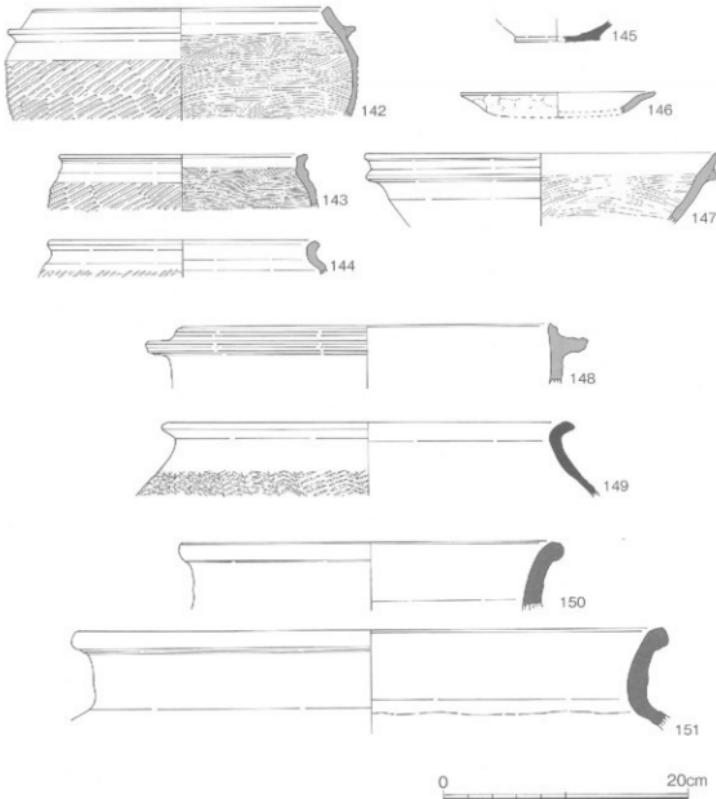
135=東播系須恵器貯藏具 壺

138~140=備前焼調理具 捕鉢

(5) SX03出土の土器・陶磁器 図37

SX03からは土師質煮炊具・ほうらく型突帯Aタイプ（142）、土師質煮炊具・甕型（143・144）須恵器壠底部（145）土師質土器皿（146）土師質土器捕鉢（147）土師質土器煮炊具・羽釜型（148）東播系須恵器壠（149）備前焼壠（150・151）が出土している。

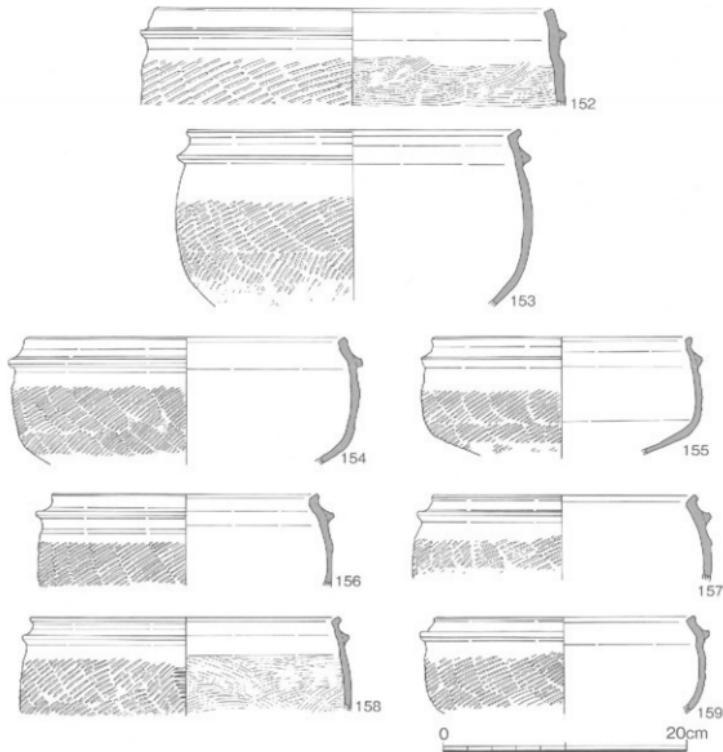
これらはすべて浅い落ち込み内の同一層をなす埋土から出土しており、層位的前後関係はない。玉縁の短い備前焼壠150・151の示す年代は間壁編年Ⅲ期にあたり、実年代で14世紀と考えられる。



142=土師質土器煮炊具 ほうらく類突番Aタイプ 143、144=土師質土器煮炊具 瓢型
 145=東播系須恵器食膳具 鉢(混入品) 146=土師質土器食膳具 盆 147=土師質上器調理具 撥鉢
 148=土師質土器煮炊具 羽釜型 149=東播系須恵器貯藏具 瓢 150、151=備前焼貯藏具 瓢

図37 SX03出土土器 土師質土器・須恵器・他産地系土器

一方で148の煮炊具・羽釜型や145の東播系須恵器壺底部などは12世紀代の製品と考えられる。ここだけを見ればSX02よりSX03が古相であるかのような印象を与えるが、章の冒頭で述べたようにSXを冠した遺構同士から出土した遺物同士が接合する場合も多々みられるなど、SX名の遺構同士の埋没時期は同時であると考えている。今回古相を示すような印象を与えてるのは資料化の網の偶然という要素によるものと判断する。



152～159 = 土師質土器煮炊具 ほうらく型突帯Aタイプ

図38 SX04出土土器(1) 土師質土器煮炊具 ほうらく型

(6) SX04出土の土器・陶磁器 図38・39・40

SX04からは土師質煮炊具・ほうらく型突帯Aタイプ（152～159）、土師質煮炊具・ほうらく型突帯Bタイプ（160、161）土師質煮炊具・ほうらく型突帯Cタイプ（162～164）土師質煮炊具・なべ型（165）東播系須恵器鉢（166～169）土師質土器小皿（170～174）備前焼擂鉢（175・176）備前焼窯底部（177）が出土している。166～169の東播系須恵器鉢は口縁部が玉縁化しているが、168以外は淡黄色系胎土で軟質な焼成状態を示し、魚住窯系の資料と考えられる。175の備前焼鉢は口縁帶の発達したタイプで15世紀後半のものと考えられる。

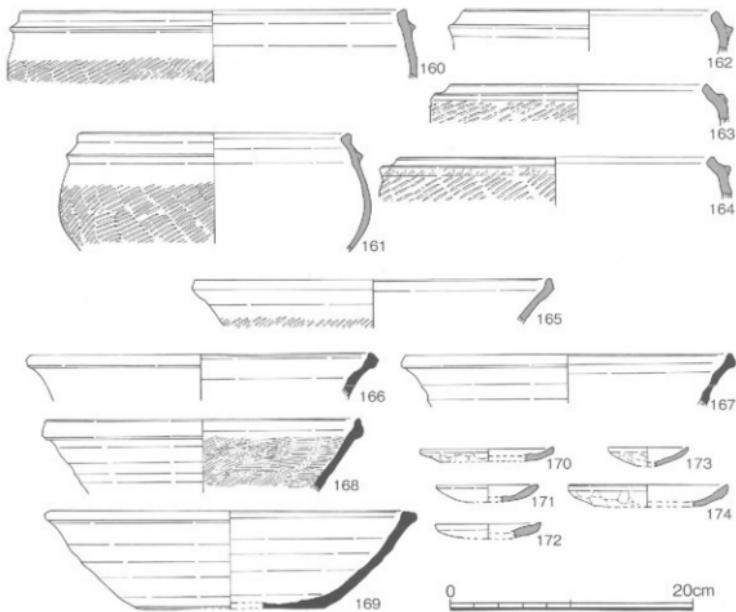


図39 SX04出土土器(2) 土師質土器・須恵器

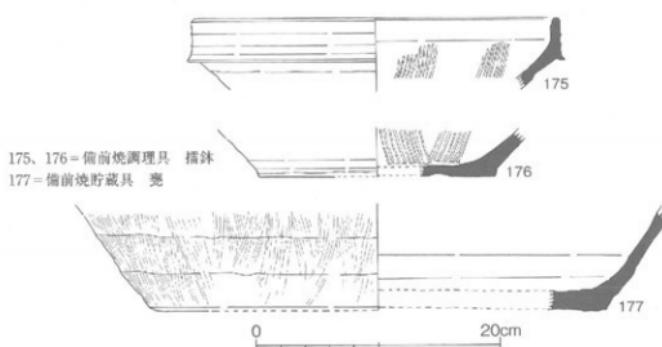
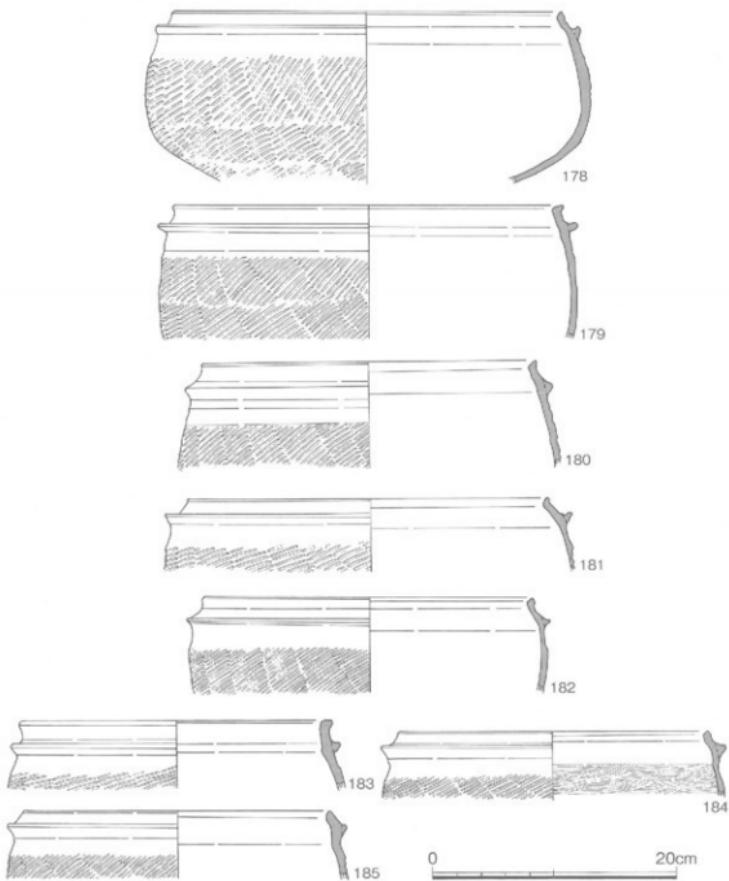


図40 SX04出土土器(3) 他産地系陶磁器



152~159=土師質土器煮炊具 ほうらく型突帯Aタイプ

図41 SX05出土土器(1) 土師質土器煮炊具 ほうらく型

(7) SX05出土の土器・陶磁器 図41・42・43

SX05からは上師質煮炊具・ほうらく型突帯Aタイプ（178～185）、土師質煮炊具・ほうらく型突帯Bタイプ（186～188）土師質煮炊具・ほうらく型突帯Cタイプ（189～191）土師質煮炊具・壺型（192）東播系須恵器鉢（193～195）土師質土器小皿（196～203）備前焼擂鉢（204～206）古瀬戸水差（207）が出土している。193～195の東播系須恵器鉢は淡黄色系胎上で軟質な焼成状

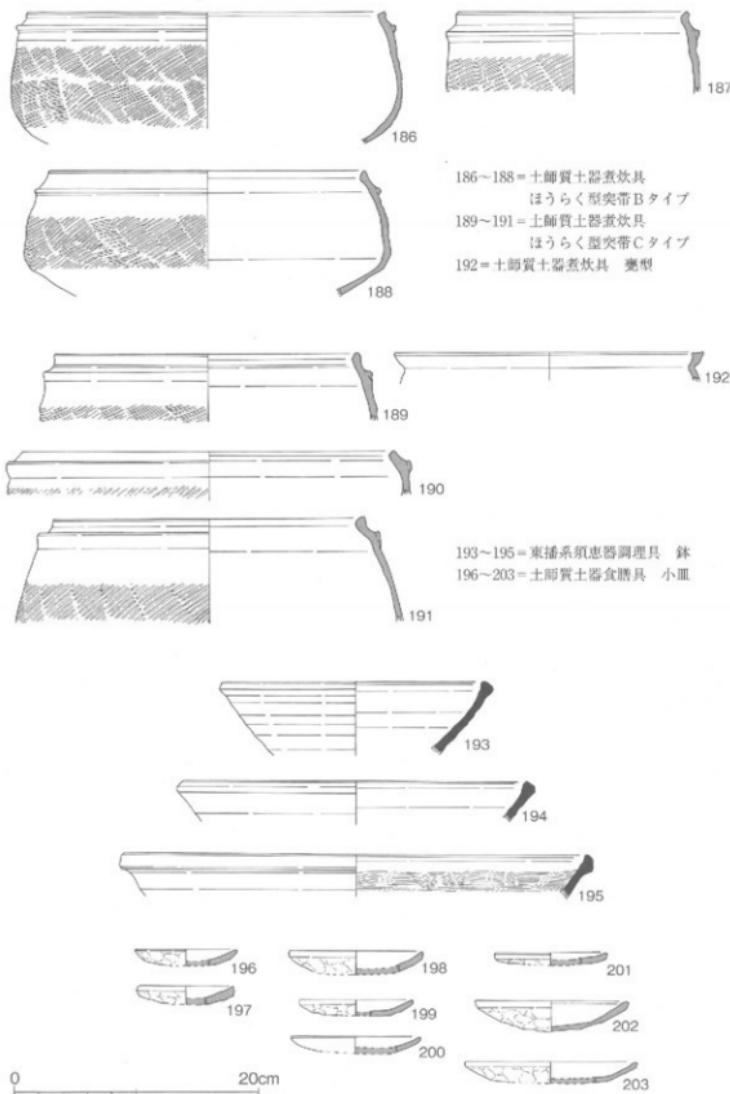


図42 SX05出土土器(2) 土師質土器・須恵器

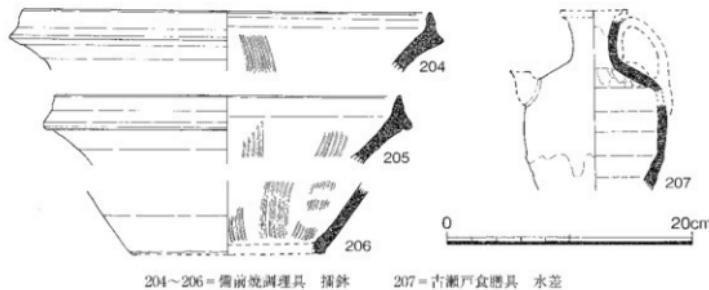


図43 SX05出土土器(3) 他産地系陶磁器

態を示し、魚住窯系の資料と考えられる。194は灰色系で硬質な焼き上がりを示す。196は内面にハケ目を施すもので、魚住窯系と肉眼で識別できるものにもそうでないものにも、ハケ目は等しく認められるものであると分かる。

204・205の備前焼擂鉢は口縁部上下角の突出が認められるが、特に上方への拡張が進み始めており、間壁編年IV b期前半、実年代で15世紀前半に該当する資料である。

209の古瀬戸水差は口縁部と底部の欠損した資料だが頸部の形状から柄崎分類の古瀬戸水差しI類にあたり、実年代で15世紀前半を示す。

（注）

- (1) 黒田恭正「神戸市域（六甲南麓地域）における弥生時代代V様式～布留式併行期の上器様相」『森南町遺跡発掘調査報告書－第1・2次調査－』2005 神戸市教育委員会 および
篠宮正「東播磨地域における弥生土器編年」「弥生土器集成と編年－播磨編－」2007 大手前大学史学研究所
- (2) 同田章一・長谷川眞「兵庫洋道跡出土の土製煮炊具」「兵庫県埋蔵文化財研究紀要」第3号 2003兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- (3) 千河良和「堺灘源都市遺跡出土の土師質土器・ほうらくについて」『関西近世考古学研究』IV 1996
- (4) 依柄俊夫「中世食器の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集 [共同研究] 中世食文化の基礎的研究』1997 国立歴史民俗博物館
- (5) 森川稔「中世須恵器」「概説 中世の土器・陶磁器」1995 中世土器研究会
- (6) (5) に同じ
- (7) 丹治康明「東播系須恵器について」『中世土器の基礎研究』1985 中世土器研究会
- (8) 菅本宏明「東播系須恵器出現期における振押窯境地域の土器様相」1993 「潮見 浩先生退官記念論集考古論集」
- (9) 草土千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ「北部地域北半部の調査」1993 草土千軒町遺跡調査研究所
「草土千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ「北部地域南半部の調査」1994 草土千軒町遺跡調査研究所
「草土千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ「南部地域北半部の調査」1995 草土千軒町遺跡調査研究所
- (10) 神出 1986 神出古墳群に隣接する遺跡群の調査 1986 紗見山遺跡調査会
- (11) 「愛知県史 別編 中止・近世 濱戸系 窯業 2」2007 愛知県史編さん委員会
- (12) 岡田忠彦・周壁茂子「備前焼研究ノート(1)」「倉敷考古館研究集報」第1号 1966 倉敷考古館
ノート
「備前焼研究ノート(2)」「倉敷考古館研究集報」第2号 1966 倉敷考古館
ノート
「備前焼研究ノート(3)」「倉敷考古館研究集報」第5号 1968 倉敷考古館
ノート
「備前焼研究ノート(4)」「倉敷考古館研究集報」第18号 1984 倉敷考古館
- (13) 乘岡実「備前焼擂鉢の編年について」2000 第3回中近世備前焼研究会 資料

表3 中世土器・陶磁器観察表(1)

()内は復元値あるいは残存値

図 番 号	出土地点	器種	法 身 (口 径 (底 径))	口盤部	胴体部	底部(脚部)	色調	釉上	実 測 値 (%)
47	土坑08	須恵器碗	(19.2) (3.9) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY7/1 灰白色 外面SY6/1 灰白色	長石 黑色粘物粒	85
48	土坑08	須恵器碗	(19.0) (4.2) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面N8 灰白色 外面N5 灰白色	長石 黑色粘物粒	84
49	土坑08	須恵器碗	(14.8) (2.5) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY5/1 灰白色 外面25YS5/1 灰白色	長石 チャート 黑色粘物粒	92
50	土坑08	須恵器碗	(18.8) (3.3) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY5/1 灰白色 外面N5 灰白色	長石 黑色粘物粒	88
51	土坑08	須恵器碗	(18.4) (3.3) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面25Y6/2 灰黄色 外面25YK7/2 灰黄色	長石 チャート 黑色粘物粒	78
52	土坑08	須恵器碗	(15.8) (2.7) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面25YK7/2 灰黄色 外面25YK7/2 灰黄色	長石 黑色粘物粒	86
53	土坑08	須恵器碗	(15.1) (3.7) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面25Y8/2 灰白色 外面25Y8/2 灰白色	長石 チャート 黑色粘物粒	78
54	土坑08	須恵器碗	(14.6) (2.9) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面25Y6/1 灰白色 外面25Y6/1 灰白色	硝石 黑色粘物粒	86
55	土坑08	須恵器碗	(14.8) (2.6) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY6/1 灰白色 外面SY6/1 灰白色	長石 黑色粘物粒	89
56	土坑08	須恵器碗	(15.0) 3.9 -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY7/1 灰白色 外面SY6/2 灰白色	チャート 黑色粘物粒	79
57	土坑08	須恵器碗	(16.0) (4.2) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面N7 灰白色 外面N6 灰白色	長石 黑色粘物粒	76
58	土坑08	須恵器碗	(13.4) (3.7) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY6/1 灰白色 内面25Y6/1 灰白色	長石 黑色粘物粒	77
59	土坑08	須恵器碗	(15.2) (2.9) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面N5 灰白色 外面N5 灰白色	長石 黑色粘物粒	90
60	土坑08	須恵器碗	(15.2) (2.2) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面SY7/1 灰白色 外面SY7/1 灰白色	長石 黑色粘物粒	91
61	土坑08	須恵器碗	(13.6) (2.7) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面N5 灰白色 外面N6 灰白色	長石 黑色粘物粒	87
62	土坑08	須恵器碗	(15.4) (3.1) -	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面7SY6/1 灰白色 外面SY6/1 灰白色	長石 黑色粘物粒	81

表3 中世土器・陶磁器観察表(2)

()内は復元品あるいは残存種

房番 番号	出土地点	器種	法華 (門柱) (移高) (底付)	口部	溝整地部	底部(脚部)	色調	胎土	参考 番号
63	土坑08	須恵器碗	- 欠損 (箱付高台) (6.0)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面N5 灰色 外面N6 灰色	長石 チャート 黒色粘物質	104	
64	土坑08	須恵器碗	- 欠損 箱付高台 (2.0) (6.0)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面SY6/1 灰色 内面SY6/1 灰色	長石 チャート 黒色粘物質	97	
65	土坑08	須恵器碗	- 欠損 平高台 (3.4) (6.4)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面N5 灰色 外面赤切痕 外面SY5/1 灰色	長石 チャート 黒色粘物質	113	
66	土坑08	須恵器碗	- 欠損 平高台 (3.8) (6.6)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面N6 灰色 外面SY8/1 灰白色	長石 チャート 黒色粘物質	112	
67	土坑08	須恵器碗	- 欠損 平高台 (2.2) (5.2)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ 外面赤切痕	内面SY7/2 灰黄色 外面SY7/2 灰黄色	長石 チャート 黒色粘物質	114	
68	土坑08	須恵器碗	欠損 平高台 (2.3) (5.0)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面SY8/2 灰白色 外面SY8/2 灰白色	長石 チャート 黒色粘物質	115	
69	土坑08	須恵器碗	- 欠損 平高台 (2.0) (6.0)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面SY6/1 灰色 外面SY6/1 灰色	長石 黒色粘物質	116	
70	土坑08	須恵器碗	- 欠損 高台なし (2.3) (5.8)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ	内面N6 灰色 外面赤切痕 外面N5 灰色	長石 黒色粘物質	111	
71	土坑08	須恵器碗	- 欠損 高台なし (2.8) (10.0)	内外面盛減のため不明	内外面盛減のため不明	内面SY7/1 灰白色 外面SY6/1 灰白色	長石 黒色粘物質	116	
72	土坑08	須恵器碗	- 欠損 高台なし (2.8) (6.0)	内外面ロクロナデ	内外面ロクロナデ 外面赤切痕	内面N3 暗灰色 外面SY6/2 灰白色	長石 黒色粘物質	105	
73	土坑08	須恵器碗	- 欠損 高台なし (2.4) (5.7)	内外面盛減のため不明	内外面盛減のため不明	内面N3 暗灰色 外面SY6/2 灰白色	長石・石英 チャート 黒色粘物質	108	
74	土坑08	須恵器鉢	(39.8) 内外面ロクロナデ (3.5) -	内外面ロクロナデ	欠損	内面SY5/1 灰色 外面SY7/1 灰白色	長石 チャート 黒色粘物質	100	
75	土坑08	須恵器鉢	(37.2) 内外面ロクロナデ (3.7) -	内外面ロクロナデ	欠損	内面SY7/1 灰白色 外面SY7/1 灰白色	長石 チャート 黒色粘物質	91	
76	土坑08	須恵器鉢	(29.4) 内外面ロクロナデ (4.5) -	内外面ロクロナデ	欠損	内面N3 暗灰色 外面SY7/1 灰白色	長石 黒色粘物質	95	
77	土坑08	須恵器鉢	(7.4) 内外面ロクロナデ (4.9) -	内外面ロクロナデ	欠損	内面N6 灰色 外面N2 黑色	長石 黒色粘物質	109	
78	土坑08	須恵器鉢	(37.2) 内外面ロクロナデ (3.6) -	内外面ロクロナデ	欠損	内面SY7/2 灰黄色 外面SY7/2 灰黄色	長石 黒色粘物質	96	

表3 中世土器・陶磁器観察表(3)

() 内は復元値あるいは残存値

河内 青森 等 考古 学 館 番 号	出土地点	器種	法則 (目録) (割合) (範例)	口部部	肩部部	底部(脚部)	色調	船上 支 持 具	支 持 具 番 号
79	上坡08	須恵器碗 平高台	- (28) (100)	欠損	内面不定方向ナデ 外面クロコナデ	内面不定方向ナデ 外面系切痕	内面2.5Y6/1 黄灰色 外面5Y6/1 灰色	長石 チャート 黒色鉱物粒	101
80	上坡08	須恵器碗 平高台	- (43) (100)	欠損	内面不定方向ナデ 外面クロコナデ	内面不定方向ナデ 外面系切痕	内面N6 灰白色 外面5P 紫色	チャート 黒色鉱物粒	106
81	土坑08	須恵器碗 平高台	- (30) (124)	欠損	内面不定方向ナデ 外面クロコナデ	内面不定方向ナデ 外面系切痕	内面2.5Y6/2 灰黄色 外面5Y6/1 灰白色	長石 チャート 黒色鉱物粒	102
82	上坡08	須恵器碗 平高台	- (120) (40)	欠損	内面不定方向ナデ 外面クロコナデ	内面不定方向ナデ 外面ヘラ切痕?	内面N6 灰白色 外面2.5Y6/1 灰白色	長石 チャート 黒色鉱物粒	103
83	土坑08	須恵器碗 難行高台	- (44) (104)	欠損	内面不定方向ナデ 外面クロコナデ	内面不定方向ナデ 外面系切痕?	内面2.5Y7/1 灰白色 外面5Y7/1 灰白色	石英、長石 チャート 黒色鉱物粒	106
84	土坑08	須恵器蓋 難行高台	- (192) (69) -	内外面クロコナデ	内面横位ナデ 外面平行印き	欠損	内面N4 灰白色 外面N5 灰白色	石英、長石 黒色鉱物粒	98
85	上坡08	須恵器碗	(212) (46)	内外面クロコナデ	内面横位クロコナデ 外面底部平行印き	欠損	内面2.5Y7/1 灰白色 外面3.5K6/2 灰白色	長石 チャート 黒色鉱物粒	99
86	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型	(23.6) (6.7) -	内外面横位ナデ	内面ナデ 外面平行印き	欠損	内面10YR7/3 にふく黄褐色 外面10YR5/3 にふく黄褐色	石英、長石 骨粉 黒色鉱物粒	153
87	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型	(22.0) (8.2) -	内外面横位ナデ	内面壓成のため不明 外表面平行印き	欠損	内面10YR4/1 鐵灰色 外面5YR6/6 褐色	石英 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	229
88	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型	(19.4) (6.0) -	内外面横位ナデ	内面ナデ 外表面平行印き	欠損	内面2.5YR3/8 明褐色 外面2.5YR2/2 黑色	石英、長石 チャート 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	132
89	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型	(15.0) (7.8) -	内外面横位ナデ	内面壓成のため不明 外表面壓成した平行印き	欠損	内面2.5YR1/6 橙色 外面2.5YR2/6 橙色	石英、長石 チャート 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	155
90	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型	(19.2) (5.5) -	内外面横位ナデ	内面ナデ 外面平行印き	欠損	内面2.5YR7/8 黃褐色 外面5YR6/8 褐色	長石 黒色鉱物粒	154
91	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型 ほうらく型	(31.0) (3.1) -	内外面横位ナデ	欠損	欠損	内面2.5YR7/9 黃褐色 外面5YR6/9 褐色	石英、長石 チャート 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	191
92	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型	(23.8) (4.7) -	内面壓成のため不明 外表面横位ナデ	内面壓成のため不明 外表面平行印き	欠損	内面2.5YR6/6 橙色 外面2.5YR6/6 橙色	長石 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	228
93	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 ほうらく型 なべ脚	(21.6) (4.6) -	内外面横位ナデ	内面横位ナデ 外表面壓成のため不明	欠損	内面2.5YR7/6 橙色 外面5YR7/8 褐色	石英、長石 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	156
94	溝状遺構07	土師質土器 蓋付具 なべ脚	(25.8) (7.5) -	内外面横位ナデ	内面横位ハケ 外表面平行印き	欠損	内面5YR5/4 にふく赤褐色 外面2.5YR6/6 褐色	石英、長石 赤色酸化土粒 黒色鉱物粒	179

表3 中世土器・陶磁器観察表(4)

()内は復元値あるいは残存値

回収番号	出土地点	器種	法蓋 (円錐) (若高) (底付)	口縁部	調整部	底部(脚部)	色調	胎土	実測番号
95	清状遺構07	十脚質十脚	(37.6)	内外面横位ナデ	内面横位ナデ	欠損	内面7SYR6/6 粗色 外面7SYR6/6 粗色	長石 粗色 黑色粘物質	177
		煮炊具	(8.1)		外面平行印き				
		なべ型	-						
96	清状遺構07	十脚質土器	(32.0)	内外面横位ナデ	内面横位ナデ	欠損	内面7YR6/8 粗色 外面7SYR6/6 粗色	石英・長石 赤色微化土粒	184
		煮炊具	(6.7)		外面平行印き				
		羽釜鉢	-						
97	清状遺構07	須恵器鉢	(19.2)	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面7YS5/1 灰色 外面内面7SY6/1 灰色	長石 チャート	130
			(7.1)						
		-	-						
99	清状遺構07	須恵器鉢	(12.4)	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面7SY6/1 灰色 外面7SY6/1 灰色	長石 チャート	122
			(4.5)						
		-	-						
100	清状遺構07	須恵器鉢	(36.6)	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面5Y6/1 灰色 外面5Y6/1 灰色	長石 黑色粘物質	123
			(5.2)						
		-	-						
101	清状遺構07	須恵器鉢	(38.6)	内外面クロナデ	内外面クロナデ	欠損	内面5Y6/1 灰色 外面5Y6/1 灰色	石英・長石 チャート	121
			(3.9)						
		-	-						
102	清状遺構07	須恵器鉢	-	欠損	内外面クロナデ	内外面クロナデ	内面N6 灰色 外面5Y6/1 灰色	長石 チャート	119
			(5.2)						
			(16.6)						
103	清状遺構07	須恵器鉢	-	欠損	内外面クロナデ	内外面クロナデ	内面3Y6/2 灰オリーブ色 外面2SY7/2 灰黄色	長石 チャート 黑色粘物質	117
			(4.3)						
			(11.8)						
104	清状遺構07	須恵器鉢	-	欠損	内外面クロナデ	内面ロクロナデ	内面N5 灰色 外面3SY6/1 灰色	石英 チャート 黑色粘物質	118
			(4.5)						
			(10.4)						
105	清状遺構07	須恵器鉢	(17.0)	内外面クロナデ	内面ロクロナデ	欠損	内面2SY4/13 貴灰色 外面2SY5/1 貴灰色	長石 黑色粘物質	126
			(8.3)		外側肩部位置被杉文				
		-	-		外側全体位置被杉文				
106	清状遺構07	十脚質十脚	(9.6)	内面不定方向ナデ	内面不定方向ナデ	内面10YR7/3 にぶい黄褐色	黑色粘物質	175	
		小皿	11	外面ユビオサエ	外面ユビオサエ	外面10YR7/3 にぶい黄褐色			
		-	-						
107	清状遺構07	十脚質土器	(7.2)	内面不定方向ナデ	内面不定方向ナデ	内面10YR7/2 にぶい黄褐色	長石	171	
		小皿	2	外曲ユビオサエ	外曲ユビオサエ	外面10YR7/2 にぶい黄褐色	赤色微化土粒		
		-	-						
108	清状遺構07	上脚質土器	(8.2)	内面不定方向ナデ	内面不定方向ナデ	内面10YR7/2 にぶい黄褐色	黑色粘物質	176	
		小皿	(1.6)	外面ユビオサエ	外面ユビオサエ	外面10YR7/2 にぶい黄褐色			
		-	-						
109	清状遺構07	上脚質土器	(8.4)	内面不定方向ナデ	内面不定方向ナデ	内面10YR7/4 にぶい黄褐色	長石	169	
		小皿	(1.9)	外面ユビオサエ	外面ユビオサエ	外面10YR7/4 にぶい黄褐色	黑色粘物質		
		-	-						
110	清状遺構07	十脚質十脚	(8.2)	内面不定方向ナデ	内面不定方向ナデ	内面10YR7/4 にぶい黄褐色	長石	172	
		小皿	(1.1)	外面ユビオサエ	外面ユビオサエ	外面10YR7/4 にぶい黄褐色	赤色微化土粒		
		-	-						
111	清状遺構07	十脚質十脚	(7.2)	内面不定方向ナデ	内面不定方向ナデ	内面10YR7/4 にぶい黄褐色	長石	170	
		小皿	(1.8)	外面ユビオサエ	外面ユビオサエ	外面10YR7/4 にぶい黄褐色	赤色微化土粒		
		-	-						

表3 中世土器・陶磁器観察表(5)

() 内は復元値あるいは残存値

国 家 文 庫 番 号	出土地点	器種	状態 (L/H) (高さ) (直径) (底径)	口縁部	調整歩部	底部(脚部)	色調	胎土	支 持 棒 番 号
112	塗状遺構07	土師質土器	(8.2) 小皿	内面不定方向ナゲ 外縁ユビオサエ	内面不定方向ナゲ 外縁ユビオサエ	内面不定方向ナゲ 外縁ユビオサエ	内面10YR7/3 に赤・黄褐色 外縁10YR7/3 に赤・黄褐色	灰石 黑色粘物粒	173
113	塗状遺構07	古窯# 平底	(6.0) (6.4)	欠損	二爻トチン 茹輪	輪内・無釉面	内縁5Y7/4 浅褐色 外縁5Y7/4 浅褐色		127
114	塗状遺構07	古窯戸 平底	(4.7) (4.2)	欠損	ニ爻トチン 茹輪	輪内・無釉面	内縁5Y6/4 オリーブ青色 外縁5Y5/3 灰青・一色		128
115	塗状遺構07	青磁 碗	(13.0) (2.9) -			欠損	内縁5Y4/3 暗オリーブ色 外縁5Y4/3 暗オリーブ色		129
116	塗状遺構07	青磁 碗	(2.7) (5.0)	欠損	欠損	輪内台	内縁5Y6/2 灰オリーブ色 外縁5Y6/2 灰オリーブ色		130
117	上坑19	上師質土器 蓋炊具 羽輪型	(68.8) (21.7) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR6/6 暗色 外縁10YR5/2 に赤・橙色	石英・黄石 赤色酸化鉄 黑色粘物粒	167
118	SX02	上師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(28.8) (7.5) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YB6/4 に赤・褐色 外縁10YR6/3 に赤・黃褐色	石英・黄石 黑色粘物粒 青母	218
119	SX02	土師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(21.8) (2.8) -	内外面横位ナゲ	内面磨溝のため不明 外縁削した平行印き	欠損	内面10YR3/4 黒褐色 外縁10YR3/3 に赤・黃褐色	石英・黄石 赤色酸化土粒 黑色粘物粒	219
120	SX02	土師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(22.0) (8.0) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR7/6 暗色 外縁10YR6/6 褐色	石英・黄石 赤色酸化土粒 黑色粘物粒	217
121	SX02	上師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(20.8) (6.8) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR7/6 暗色 外縁10YR6/6 褐色	石英・黄石 黑色粘物粒	230
122	SX02	上師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(28.8) (11.8) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR7/4 に赤・褐色 外縁5YR7/6 褐色	石英・黄石 赤色酸化鉄 黑色粘物粒	204
123	SX02	土師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(22.0) (12.4) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR6/6 暗色 外縁10YR6/6 褐色	石英・黄石 赤色酸化鉄 黑色粘物粒	158
124	SX02	土師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(20.6) (8.5) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR7/8 暗色 外縁5YR7/8 褐色	石英・黄石 黑色粘物粒	198
125	SX02	土師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(23.0) (7.7) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面削成した平行印き	欠損	内面5YR7/6 暗色 外縁5YR6/6 褐色	石英・黄石 赤色酸化土粒 黑色粘物粒	215
126	SX02	上師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(21.8) (5.8) -	内外面横位ナゲ	内面ナゲ 外面平行印き	欠損	内面5YR7/8 暗色 外縁5YR7/8 褐色	石英 赤色酸化鉄 黑色粘物粒	216
127	SX02	土師質土器 蓋炊具 ほうらく型	(24.4) (4.3) -	内外面横位ナゲ	欠損	欠損	内面5YR6/6 暗色 外縁5YR5/4 に赤・褐色	石英・黄石 赤色酸化鉄 黑色粘物粒	193

表3 中世土器・陶磁器観察表(6)

()内は復元値あるいは残存値

団体 登録 番号	出土地点	形態	法量 (目録 登録 番号)	口部部	調整体部	底部(脚部)	色調	船上	実測 寸
128	SX02	十輪質土器 直鉢	(29.4) (7.0)	内面横位ナデ 外面平行叩き	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR6.6 橙色 外面7.5YR6.4 にぶい橙色	石英・長石 赤色 黑色粘物質	168
129	SX02	十輪質土器 直鉢	(40.2) (6.9)	内面横位ナデ 外面平行叩き	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR6.6 橙色 外面7.5YR6.6 暗色	石英・長石 赤色 黑色粘物質	180
130	SX02	上輪質土器 直鉢	(36.0) (6.9)	内面横位ナデ 外面	内面ナデ 外面	欠損 欠損	内面7.5YR7.6 橙色 外面7.5YR7.6 暗色	石英・長石 チャート 赤色 黑色粘物質	196
131	SX02	須恵器鉢	(19.4) (2.8)	内面底減 外面ロクロナデ	-	欠損	内面7.5Y6.1 灰色 外面NS 灰色	長石 黑色粘物質	135
132	SX02	須恵器鉢	(24.4) (4.8)	内面横位ハケ 外面ロクロナデ	-	欠損	内面N4 灰色 外面NS 灰色	長石 黑色粘物質	137
133	SX02	須恵器鉢	- (2.3) (7.6)	- 外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面系切痕	内面ロクロナデ 外面NS 灰色	内面5Y5/1 灰色 外面NS 灰色	長石 黑色粘物質	134
134	SX02	須恵器鉢	- (1.7) (5.8)	- 欠損	内面ロクロナデ 外西系切痕	内面ロクロナデ 外西系切痕	内面5Y6/1 灰色 外面5Y6/1 灰色	長石 チャート	132
135	SX02	須恵器鉢	(21.8) (8.6)	内面ナデ 外面肩部横移文 外全体模位板移文	内面ナデ 外面肩部横移文 外全体模位板移文	欠損	内面5Y5/1 灰色 外面NS 灰色	長石 チャート	141
136	SX02	十輪質土器 縦鉢	(23.4) (7.0)	内面横位ハケ 外面ナデ	内面横位ハケ 外面ナデ	欠損	内面5YR4/2 灰褐色 外面25Y16/8 橙色	石英・長石 黑色粘物質	154
137	SX02	上輪質土器 縦鉢 (片口)	(25.0) (6.3)	内面横位ハケ 外面ナデ	内面横位ハケ 外面ナデ	欠損	内面7.5YR7.6 橙色 外面7.5YR6.6 橙色	石英・長石 赤色 黑色粘物質	211
138	SX02	衛面甕 縦鉢	(25.4) (6.6)	内面ロクロナデ 内面	内面ロクロナデ 内面	欠損	内面25Y3/4 暗赤褐色 外面25Y3/4 暗赤褐色	長石 黑色粘物質	139
139	SX02	衛面甕 縦鉢	(36.6) (5.9)	内面ロクロナデ 内面横位堆積	内面ロクロナデ 内面横位堆積	欠損	内面25Y3/4 暗赤褐色 外面25Y3/4 暗赤褐色	石英・長石	138
140	SX02	衛面甕 縦鉢	- (4.7) (21.0)	- 欠損	内面横位堆積	内面	内面10Y5/6 赤色 外面25Y6/6 橙色	長石 黑色粘物質	140
141	SX02	音頭 鉢	(3.8)	- 欠損	欠損	縦高台	内面10Y5/2 オリーブ灰色 外面10Y5/2 オリーブ灰色	-	130
142	SX03	十輪質土器 直鉢	(24.0) (9.0)	内面横位ナデ 外面平行叩き	内面横位ハケ 外面平行叩き	欠損	内面5YR6/4 にぶい橙色 外面5YR6/6 橙色	石英・長石 黑色粘物質	165
143	SX03	上輪質土器 直鉢	(22.2) (4.5)	内面横位ナデ 外面平行叩き	内面横位ハケ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR6/4 にぶい橙色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	長石 黑色粘物質	181
144	SX03	上輪質土器 直鉢	(20.8) (3.1)	内面横位ナデ 外面	内面	欠損 欠損	内面5YR5/4 にぶい黄褐色 外面5YR6/6 橙色	石英・長石 黑色粘物質	182

表3 中世土器・陶磁器観察表(7)

()内は復元値あるいは残存値

器種番号	出土地点	器種	法量 (L) (容積) (底径)	口端部	肩部外輪	底部(脚部)	色調	胎土	実測 参考値
145	SX03	頬張土器	- 欠損 (1.7) (6.8)	欠損		内面磨滅のため不明 外面部切妻	内面2SY7/1 灰白色 外面部2SY6/1 黄褐色	灰石	324
146	SX03	土師質土器 皿	(19.2) 内外釉磨滅のため不明 (5.8) -	内面磨滅した模様ハケ 外面磨滅のため不明	欠損		内面2SY7/6/1 に赤い褐色 外面部2SY6/4 に赤い褐色	石英、長石、玄母 赤色酸化土粒 黑色粘物質	209
147	SX03	土師質土器 箱鉢	- 大破 (6.6) 11	大破	欠損	内面磨滅成 外面部ハリミガキ	内面2SY8/2 灰白色 外面部2SY10B/3 浅黄色	石英、長石、 赤色酸化土粒	305
148	SX03	土師質土器 煮炊具 羽釜型	(30.0) 内外釉磨滅のため不明 (5.5) -	内外釉磨滅のため不明	欠損		内面2SY12/3 黄褐色 外面部2SY5/3 黄褐色	長石、チャート 赤色酸化土粒 黑色粘物質	397
149	SX03	頬張土器	(32.6) 内外釉磨滅のため不明 (6.1) -	内外釉磨滅のため不明 外面部模様被付文	欠損		内面2SY6/4 に赤い褐色 外面部2SY6/3 褐色	石英、長石、 赤色酸化土粒 雲母	328
150	SX03	偏前焼 甕	(29.0) 内外面クロコナデ (5.3)	欠損	欠損		内面26 灰色 外面部2SY5/1 灰色		331
151	SX03	偏前焼 甕	(47.6) 内外面ロクロナデ (8.4)	欠損	欠損		内面24 灰色 外面部26 灰色		325
152	SX04	七郎質土器 煮炊具 ほうらく型	(32.2) 内外面横位ナデ (8.9) -	内面磨滅ハケ 外面部平行印き	欠損		内面2SY6/4 に赤い褐色 外面部2SY6/4 に赤い褐色	石英、長石 赤色酸化土粒 黑色粘物質	223
153	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(27.2) 内外面横位ナデ (4.5) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR7/6 褐色 外面部2YR7/6 褐色	雲母 黑色粘物質	206
154	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(26.2) 内外面横位ナデ (10.5) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR7/7 褐色 外面部2YR7/7 褐色	石英、長石 赤色酸化土粒 黑色粘物質	339
155	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(21.2) 内外面横位ナデ (9.7) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR5/2 灰褐色 外面部2YR5/3 に赤い褐色	長石 黑色粘物質	337
156	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(21.6) 内外面横位ナデ (7.5) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR8/4 浅黄色 外面部2YR6/6 褐色	石英、長石 黑色粘物質	221
157	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(11.2) 内外面横位ナデ (6.8) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR6/4 に赤い黃褐色 外面部2SY6/4 に赤い褐色	長石 チャート 黑色粘物質	221
158	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(25.0) 内外面横位ナデ (7.8) -	内面横位ハク 外面部平滑	欠損		内面2SYR7/6 褐色 外面部2SYR6/6 褐色	赤色酸化土粒 黑色粘物質	220
159	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(21.2) 内外面横位ナデ (7.8) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR5/3 に赤い褐色 外面部2YR5/2 灰褐色	長石 赤色酸化土粒	363
160	SX04	土師質土器 煮炊具 ほうらく型	(31.6) 内外面横位ナデ (6.7) -	内面ナデ 外面部平行印き	欠損		内面2YR6/3 に赤い褐色 外面部2SY5/4 に赤い褐色	石英、長石 チャート 黑色粘物質	322

表3 中世土器・陶磁器観察表(8)

() 内は復元値あるいは残存値

遺物番号	出土地点	器種	法量 (口径) (高さ) (底径)	口部	調整係部	底部(脚部)	色調	粘土	実測番号
161	SX04	土師質土器	(22.0) 内外面横位ナデ 蓋状具 (9.8) (はうらぐ型) -	欠損	欠損	内面25YR7/3 浅黄色 外面25YR7/2 灰黄色	石英、長石 黑色粘物質	166	
162	SX04	土師質土器	(20.6) 内外面横位ナデ 蓋状具 (3.0) (はうらぐ型) -	欠損	欠損	内面5YR6/6 棕色 外面5YR6/6 棕色	石英、長石 黑色粘物質	192	
163	SX04	土師質土器	(21.0) 内外面横位ナデ 蓋状具 (3.1) (はうらぐ型) -	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面5YR6/6 棕色 外面5YR6/6 棕色	石英、長石 黑色粘物質	191	
164	SX04	土師質土器	(25.6) 内外面横位ナデ 蓋状具 (3.4) (はうらぐ型) -	欠損	欠損	内面5YR6/7 棕色 外面5YR6/7 棕色	石英、長石 赤色酸化土粒 黑色粘物質	185	
165	SX04	土師質土器	(19.0) 内外面横位ナデ 蓋状具 (3.7) なべ型 -	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面5YR6/6 棕色 外面5YR6/6 棕色	石英、長石 黑色粘物質	178	
166	SX04	燒造器	(30.4) 内外面ロクロナデ (8.0) (15.0)	欠損	欠損	内面10YR6/4 にふく青褐色 外面10YR6/4 にふく青褐色	石英、長石 赤色酸化土粒 黑色粘物質	179	
167	SX04	燒造器	(16.6) 内外面ロクロナデ (4.3) - -	内外面ロクロナデ	欠損	内面10YR6/4 にふく青褐色 外面10YR6/4 にふく青褐色	石英、長石 赤色酸化土粒 黑色粘物質	212	
168	SX04	燒造器							
169	SX04	燒造器	(30.4) 内外面磨減らしい (8.0)	欠損	欠損	内面25YR6/3 にふく黄色 外面25YR7/1 浅黄色	石英、長石 チャート 黑色粘物質	160	
170	SX04	土師質土器	(9.8) 内外面ナデ 小皿 (1.1) - -	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/4 にふく黄褐色 外面10YR7/4 にふく黄褐色	石英、長石 黑色粘物質	206	
171	SX04	土師質土器	(8.2) 内外面ナデ 小皿 (1.4) - -	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英、長石 黑色粘物質	203	
172	SX04	土師質土器	(8.6) 内外面ナデ 小皿 (1.2) - -	内面不定方向ナデ 外面磨減のため不明	欠損	内面5YR7/6 棕色 外面5YR7/6 棕色	石英、長石 黑色粘物質	210	
173	SX04	土師質土器	(6.0) 内外面ナデ 小皿 (1.5) - -	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/4 にふく黄褐色 外面10YR7/4 にふく黄褐色	石英 赤色 黑色粘物質	201	
174	SX04	土師質土器	(12.8) 内外面ナデ 小皿 (1.7) - -	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/4 にふく黄褐色 外面10YR7/4 にふく黄褐色	石英 赤色 黑色酸化土粒 黑色粘物質	202	
175	SX04	燒造器	(20.0) 内外面ロクロナデ 鋸鋸 (5.8) - -	内外面ロクロナデ 内面発白痕目	欠損	内面10R 4/2 灰赤色 内面10R 4/6 赤色	153		
176	SX04	備前焼 捲鉢	- 欠損 (4.0) (19.2)	欠損	欠損	外腹ロクロナデ 内面腰位捲目	内面5YR5/6 明赤褐色 外面25Y6/8 棕色	150	
177	SX04	備前焼 盤	- 欠損 (8.7) (33.6)	欠損	欠損	内外面ロクロナデ	内面5YR4/2 灰褐色 外面25Y3/1 暗赤褐色	146	

表3 中世土器・陶磁器観察表(9)

()内は復元値あるいは残存値

回 数 SB8 SX05	出土地点	器種	法蓋 (門透 都高) (共持)	口頭部	調整体部	底部(洞部)	色調	跡上	実測 番号
178 SX04- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(32.4) 内外面横位ナデ (11.0)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR7/6 褐色 外面YR6/6 褐色	石英・長石 赤色鐵化粧 黑色鐵物紋	164		
179 SX04- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(32.0) 内外面横位ナデ (11.0)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面10YR8/3 褐色 外面YR7/8 褐色	石英・長石 チャート	233		
180 SX04- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(17.2) 内外面横位ナデ (8.5)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR6/6 褐色 外面YR6/6 褐色	石英・長石 黑色鐵物紋	222		
181 SX01- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(29.8) 内外面横位ナデ (5.7)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR6/6 褐色 外面3YR6/6 褐色	石英・長石 チャート 赤色鐵化粧	227		
182 SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(36.8) 内外面横位ナデ (7.9)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面10YR7/4 褐色 外面3YR7/6 褐色	石英・長石 チャート	236		
183 SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(25.1) 内外面横位ナデ (5.5)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面3YR6/6 褐色 外面3YR6/6 褐色	石英・長石 赤色鐵化粧 黑色鐵物紋	233		
184 SX04- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(13.4) 内外面横位ナデ (5.4)	内面横位ハケ 外面平行叩き	欠損	内面3YR6/6 褐色 外面3YR6/6 褐色	石英・長石 チャート	226		
185 SX02- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(25.5) 内外面横位ナデ (5.5)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR4/1 褐色 外面3YR5/2 褐色	石英 赤色鐵物紋	224		
186 SX04- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(29.2) 内外面横位ナデ (10.8)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面SYR4/1 褐色 外面SYR5/4 褐色	長石	162		
187 SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(18.8) 内外面横位ナデ (6.6)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面SYR5/3 に赤褐色 外面SYR6/6 褐色	石英・長石 チャート 赤色鐵化粧 黑色鐵物紋	337		
188 SX04- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(20.0) 内外面横位ナデ (10.3)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面2SYR4/1 褐色 外面SYR5/3 に赤褐色	長石	161		
189 SX01- SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(24.8) 内外面横位ナデ (5.5)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面SYR6/6 褐色 外面SYR6/6 褐色	石英・長石 チャート	223		
190 SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(30.2) 内外面横位ナデ (3.5)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面2YR7/4 に赤褐色 外面3YR7/6 褐色	石英・長石 黑色鐵物紋	207		
191 SX05	土師質土器 蓋状具 ほうらく型	(25.4) 内外面横位ナデ (8.4)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面7.5YR8/6 浅黃褐色 外面SYR6/6 褐色	石英・長石 赤色鐵化粧 黑色鐵物紋	234		
192 SX05	土師質土器 蓋状具 盃型	(25.2) 内外面横位ナデ (2.5)	内面ナデ 外面平行叩き	欠損	内面SYR5/3 に赤褐色 外面10YR6/3 に赤褐色	石英・長石 赤色鐵化粧	183		
193 SX04- SX05	粗窓器鉢 (6.0)	(21.3) 内外面クロコナデ	内外面クロコナデ	欠損	内面2SYR6/2 褐色 外面2SYR7/3 浅黃褐色	石英・長石 黑色鐵物紋	144		
194 SX05	粗窓器鉢 (3.3)	(28.2) 内外面クロコナデ	内外面クロコナデ	欠損	内面7.5YR2/4 に赤褐色 外面7.5YR6/4 褐色	石英・長石 黑色鐵物紋	213		

表3 中世土器・陶磁器観察表(10)

()内は復元値あるいは残存値

器物番号	出土場所	種類	法盤 (口部) (肩部) (底辺)	門類	調整部位	底部(脚部)	色調	胎土	実測番号
195	SX05	須恵器外	(38.6) (35) -	内面外面横模ナデ	内面横模ハケ 外面ロクロナデ	欠損	内面N6 灰色 外面N6 灰色	灰石 黑色粘物質	136
196	SX05	上部質土器	(8.4) 小皿 (1.0) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/4 にぶく黄褐色 外面10YR7/4 にぶく黄褐色	赤色酸化鉄 黑色粘物質	200
197	SX05	十輪質土器	(7.8) 小皿 (1.4) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面7SYR7/6 褐色 外面7SYR7/6 褐色	長石 チャート	188
198	SX05	上部質土器	(10.6) 小皿 (1.7) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/6 明黄褐色 外面10YR7/6 明黄褐色	赤色酸化鉄 黑色粘物質	187
199	SX05	十輪質土器	(19.2) 小皿 (1.3) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR8/4 浅黃褐色 外面10YR8/4 浅黃褐色	赤色酸化鉄 黑色粘物質	199
200	SX05	十輪質土器	(10.6) 小皿 (1.3) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面7SYR7/6 褐色 外面7SYR7/6 褐色	石英、長石 赤色酸化鉄 黑色粘物質	190
201	SX05	上部質土器	(9.2) 小皿 (0.8) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR8/4 浅黃褐色 外面10YR8/4 浅黃褐色	石英、長石 チャート	189
202	SX05	七輪質土器	(12.2) 小皿 (2.5) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/6 明黄褐色 外面10YR7/6 明黄褐色	石英、チャート 赤色酸化鉄 黑色粘物質	176
203	SX05	十輪質土器	(13.8) 小皿 (1.6) -	内面外面横模ナデ	内面不定方向ナデ 外面ユビオサエ	欠損	内面10YR7/4 にぶく黄褐色 外面10YR7/4 にぶく黄褐色	チャート 黑色粘物質	186
204	SX05	佛前壇	(33.2) 矮跡 (5.1) -		内面横模接目	欠損	内面10M4/2 灰赤色 外面10M4/1 暗灰赤色		196
205	SX05	佛前壇	(28.0) 矮体 (5.6) -		内面横模接目	欠損	内面10R5/3 赤褐色 外面7SYR 1/2 灰褐色		145
206	SX05	佛前壇	- 接跡 (6.0) (16.0) -		内面横模接目	欠損	内面10YR5/3 にぶく黄褐色 外面10YR5/2 灰褐色		147
207	SX04- SX05	古董口	-	欠損	欠損外縁崩落層	欠損	内面SYR8/1 灰白色 外面SYR8/1 灰白色		151
		木蓋	(13.9) -						

※色調については農林水産省監修「新版標準土色帖」による

4. 瓦

瓦が出土した造構は表4に示すとおりである。出土した瓦はすべて硬質で、軒瓦の瓦当文様および製作技法から播磨産と判断して差し支えないと思われるが、特に日輪寺遺跡北方6.5km地点に存在する神出古窯址群が具体的な産地としてもっとも有力な候補地である。第7次調査でも今回調査で出土した軒丸瓦と同範の可能性が高い瓦当が出土しており、「神出古窯址群・堂ノ前支群」出土の瓦当と同範=神出産瓦として報告されている。

しかし東播系古窯間に存在する瓦の共通性を考慮すると、第7次調査出土軒丸瓦は正確には「神出古窯址群・堂ノ前支群出土の瓦当と同系」と表現すべきで、現時点で日輪寺遺跡出土の瓦に神出古窯址群産であるという具体的証拠はない。したがって本調査出土の瓦の様相は、神出古窯址群より広域の、東播産瓦の生産と消費の様相の一端を読み取るための資料と位置付けたい。

a. 分類

本調査地出土の瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦に分けられる。道具瓦などその他の種類は認められず、軒瓦も数点のみで大半は平瓦か丸瓦である。ただし完形品ではなく、どれも破片であるため、小片については正確な判断は難しい。

軒瓦については丸・平ともに瓦当文様を中心に面取りの有無、ナデ方向などを加えて観察したが、丸瓦・平瓦については ①凸面の調整 ②凹面の調整 ③側面・端面の面取りの有無 の3つの観察点を設定して分類した。

その結果、凸面調整については叩きの認められるものとナデによって叩きを消しているものがあり、叩きは3ないし4種類の原体を用いていることがわかった。凹面の調整に比して凸面の調整技法は多彩であり手の個性を反映しており、分類に際して凸面の調整を主分類とした。

凸面調整技法の分類

- A I 凸面斜格子目（×印）叩き
- A II 凸面斜格子目叩き
- B I 凸面平行叩き（縄目均等）
- B II 凸面平行叩き（縄目不均等）
- C I 凸面ナデ
- C II 凸面ケズリ

A I 類

側面に対し平行の直線とその間に「×」印状の格子の叩き目である。叩き工程→一部にナデを施すのが基本で、全面に「×」印が残っているものは皆無である。出土量は少ないが、このタイプは用いた叩き工具に明らかに他との差異が認められ、軟質傾向、厚さ、凹面の仕上げ技法、色調ともすべてに共通性がある。これらはおそらくその共通性から同一工人・同一窯で同じ時期に製作されたものであると考えられる。

A II類

側面に対し長方形の格子目を斜位に施す。おそらく板状の叩き工具を用いている可能性が高いが、叩き目は連続しており、一単位を読み取ることは難しい。叩きの後、一部をナデてすり消すものと、全くすり消さないものとが混在している。これも出土量はさほど多くない。厚さ、凹面の仕上げ技法、色調は多様である。

B I類

側面に対して平行に幅3mm程度の縄目叩き目が均等な間隔で残るものである。おそらく板などに均等に繩を巻きつけた叩き具を用いていると思われる。基本は側面平行の縦位であるが、端面・側面とも欠損している破片には、あるいは斜位のものもある可能性が残る。これも出土量はさほど多くない。厚さ、凹面の仕上げ技法、色調は多様である。

B II類

B I 同様縄目叩き目が残ることから、おそらく板などに繩を巻きつけた叩き具を用いていると思われるが、斜位が基本で、繩目は細い1mm程度の繩目と3mm程度の太い繩目とがランダムな順に平行に並ぶものである。叩き具に巻きつけた繩が複数種類を不均等な幅で巻きつけたものだったと思われる。これも出土量はさほど多くない。厚さ、凹面の仕上げ技法、色調は多様である。

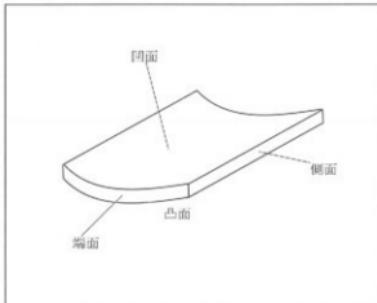


図44 瓦 部位の呼称

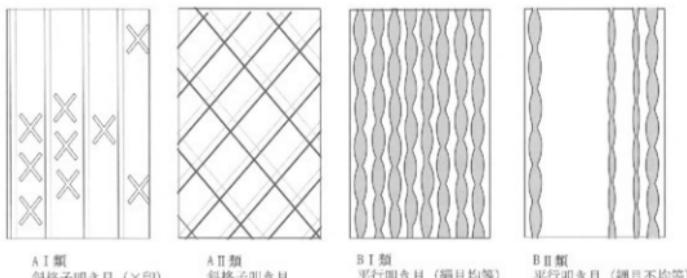


図45 平瓦凸面調整分類 模式図

C I類

全面をナデで消すが、ナデの方向は縱位、横位、斜位、不定方向など様々とみえ、破片の小さな資料については部分的に縱位に見えても不定方向の一部をみているにすぎず、全体がそうだとは限らない。今回の調査中もっとも出土量が多いが、厚さ、凹面の仕上げ技法、色調は多様である。

C II類

叩き目をヘラ削りによって消すものだが、1点ごく小さな破片の凸面にヘラケズリ様の痕跡が認められるのみである。この資料はごく細片で、正確な判定は難しく、基本的には本調査地においては認められない技法と考えている。

上記主分類の枝として凹面の調整、側面、端面の仕上げ技法がぶら下がる。

凹面調整技法の分類

- 1 布目痕 粗い
- 2 布目痕 細かい
- 3 ナデ

側面・端面の調整技法の分類

- ①種 指で瓦を挟むようにしてなでており、ナデが凸面・凹面のいずれか片側の端まで及んでいる
- ②種 指で瓦を挟むようにしてなでており、ナデが凸面・凹面の両面の端まで及んでいる
- ③種 面だけをなで、凸凹面までは及ばない

以上観察点を明確にし、凸面と凹面の技法を合わせて「A I - 1類」などと表現することとする。ただし凹面の調整について、厳密には1と2はどちらも布目を刷り消さない無調整の状態であり、それを刷り消したものが3である。したがって1、2にはコビキ痕、模骨痕など製作工程の痕跡をともなう場合がしばしばある。

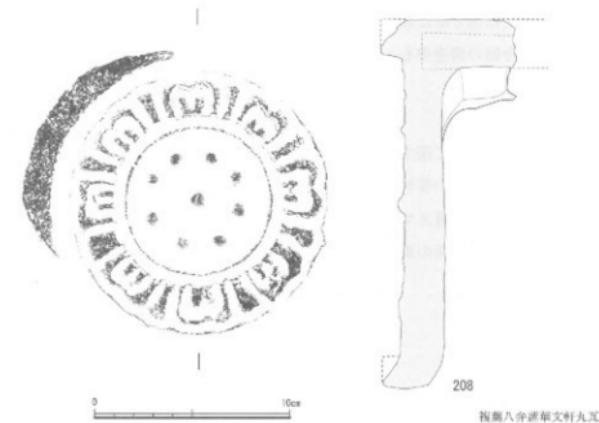
側面のナデについては、それ以外の各種調整・製作痕の上から施されていることが、特に平瓦①・②種の状態から明確に観察できる。したがって側面、端面のナデが平瓦製作工程における最終仕上げの作業であると指摘できる。今回出土した平瓦・丸瓦についてはすべて上記分類のどこかに当てはまり逸脱したものは認められなかった。なお瓦の出土量は多いが、ごく小さな破片も多い。以下に図化したものは残存状態のよいごく一部で、文中に説明があっても調整が前出の例と同様の場合は図を省略した。それらに関しては表4の観察表で概略を示すこととする。

b. 土坑08出土の瓦 図46~54

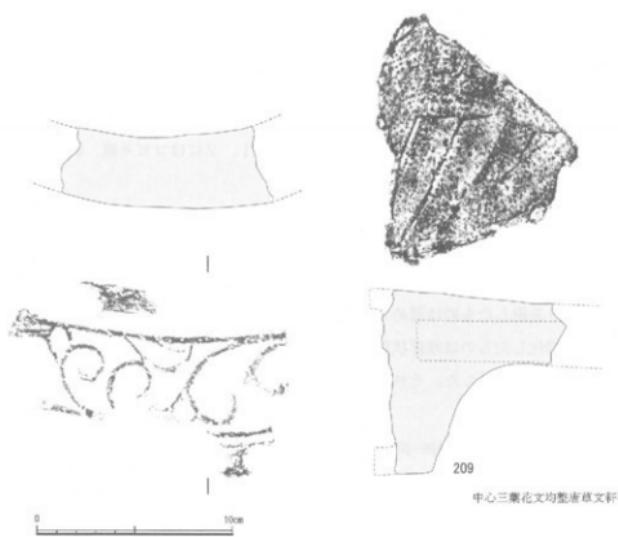
土坑08からは軒丸瓦瓦当1点、軒丸瓦片と軒平瓦瓦当1点、軒平瓦片1点のほか、丸瓦片5点、平瓦片16点が出土している。

軒瓦

208は複弁八葉蓮華文軒丸瓦瓦当である。第7次調査においてSD01と番号された遺構（今回調査の構造遺構07と同一遺構）から、これと同文の瓦当片が出土している。



複刻八分連草文軒瓦



中心三葉花文均型唐草文軒瓦

図46 土坑08出土 軒瓦拓影および断面図(1)

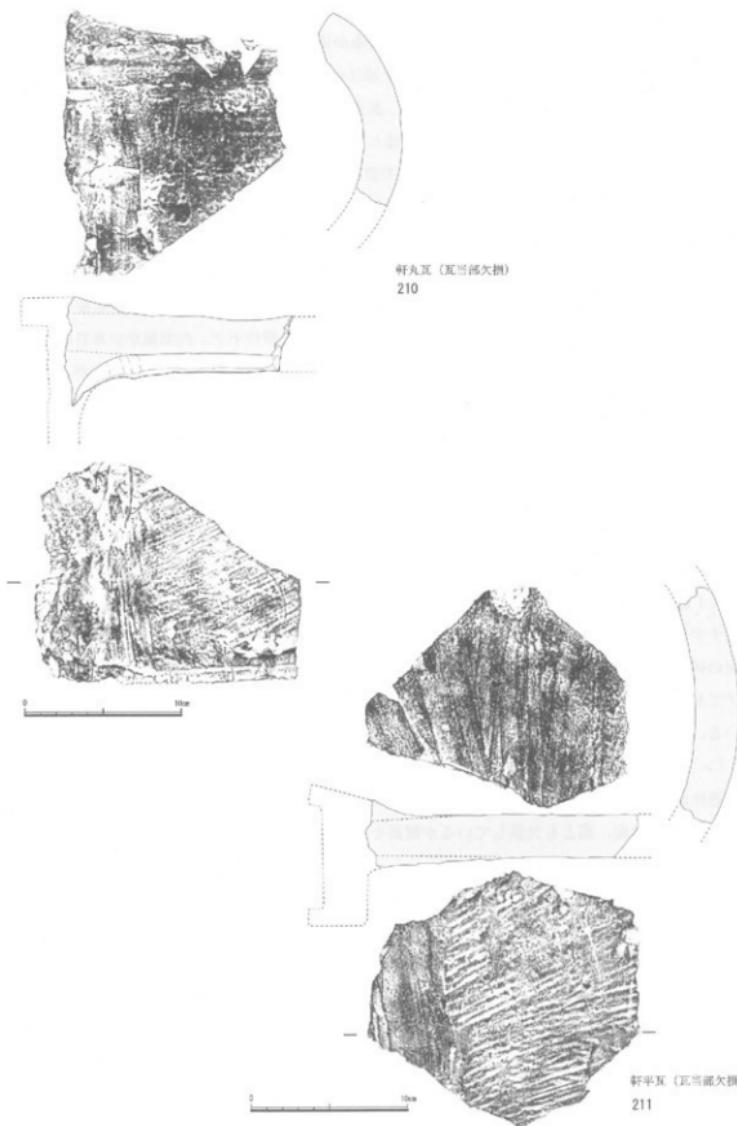


図47 土坑08出土 軒瓦拓影および断面図(2)

中房は平坦で蓮子は1+8。圓線は1条めぐり、八葉の複蓮弁で子葉は小さく、盛り上がらない。間弁は頭部の膨らんだ棒状を呈す。外区に圓線1条が連弁にそって起伏してめぐる。周縁は平たい。周縁に面取りは認められず、瓦当部周辺上部はヘラケズリで整形のち横位ナデ、裏面上半継位ナデと半横位ナデを施す。丸瓦部は欠損し、瓦当部接合は包み込み式。瓦当面径18.2cmを測る。209は均整唐草文軒平瓦瓦当だが、中心飾り部と端が欠損し、おそらく3転する唐草文と考えられる。単位ごとに圓線と接しながら巻き込む主葉は、繊細かつ流麗で特徴的なため、尊勝寺出土資料236に同文の平瓦を求める事ができる。直角彫で、瓦当接合部は包み込み式。瓦当部凹面は斜位のナデを施した後、側面付近のみ継位のナデで仕上げる。瓦当面に面取りは認められず、裏面横位ナデ、凸面との接合部からは継位ナデ。瓦当面の幅7.5cmを測る。

210は瓦当部が欠損した軒丸瓦片で、瓦当の接合部付近の破片である。包み込み式接合痕が明瞭に残る。凸面ヘラケズリのち丸瓦部は継位ナデ、接合部横位ナデ。凹面細かい布目痕と斜位のコビキ痕を残す。上記の調整を行ったのち側面部を大きく継位ナデで仕上げているが、その際瓦側刃を指で挟むようにしてナデしており、側面部を超えて凹凸面両端にまでおよぶナデが仕上げの最終工程となる。211は瓦当部が欠損した軒平瓦片接合部付近の破片で、包み込み式接合痕が明瞭に残る。凸面斜位の平行叩きのち接合部のみ横位ナデを施す。叩きの原体は幅5mm程度の繩を均等に巻き締めた道具と思われ、たたき日のそれぞれには繩のヨリ単位がみてとれる。凹面横位のナデで一部に粗い布目痕が残る。側刃部は欠損している。厚さ1.9cmを測る。

平瓦

A I類 4点。212は、凸面に「×」印状斜格子目叩きを残す半瓦である。叩いたのち部分的にナデを施し、「×」の叩き目が認められるのは一部である。212は側面・端面の残る破片で、端面の残る破片1点、側面が残る破片が1点ある。どれも全体的に摩滅が進んでいるが、凹面はナデで布目を完全にすり消している。横位のナデで、側面部を最後に挟んで継位にナデで仕上げている。

「×」印状の叩き目を有する平瓦については、すべて軟質傾向で、色調、厚さ、ナデ調整にも共通性が認められるため、おそらく同一工人・同一窯で同じ時期に製作されたものである可能性が高い。213は縁、端とも欠損しているが側面を残す破片で、側面を挟んでナデで仕上げ、凹凸両面まで継位のナデが及ぶ。

A II類 2点存在する。そのうち214は凸面に斜位の格子目叩きを施し、凹面に粗い布目とコビキ痕が認められる。

B I類 3点。215、216は凸面に平行叩きを施す。叩きの原体は幅3mm程度の繩を均等に巻き締めた道具と思われ、たたき日のそれぞれには繩のヨリの単位がみてとれる。側面・端面をそれぞれ残しており、叩きを継位に施しているのがわかる。どれも凹面は細かい布目とコビキ痕が認められる。215の側面はナデで仕上げているが、面だけをナデしており挟みこむナデではない。216の端面も同様である。

C II類 20点。217・218は凸面をナデで仕上げ、凹面は粗い布目痕とコビキ痕を残す。217は側面・端面を、218は側面を残す破片だが、側面ナデは217が面だけ、218は凹面端までナデしている。そ

の他2点凸面ナデ凹面粗い布目の破片が認められる。どれも小さな破片だが、色調、厚さ、凹面・側面調整は多様である。

219は凸面をナデで仕上げ、凹面は細かい布目痕を残す。220は凹凸両面をナデで仕上げているものである。側面・端面ともに残す破片だが、どちらも面だけをナデで仕上げている。その他土坑08からは凸凹両面ナデの平瓦破片が8点出土しているが、色調、厚さ、凹面・側面調整は多様である。平瓦の調整技法としては、220のような凹凸両面ナデのものがもっとも量的に多い。

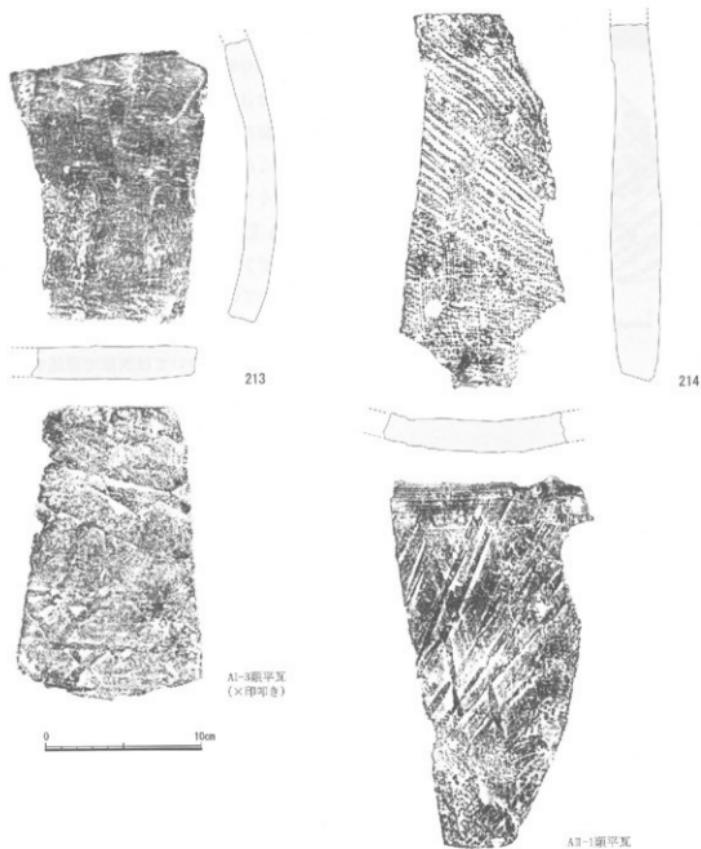


図48 土坑08出土 平瓦拓影および断面図(1) A類 凸面斜格子目叩き

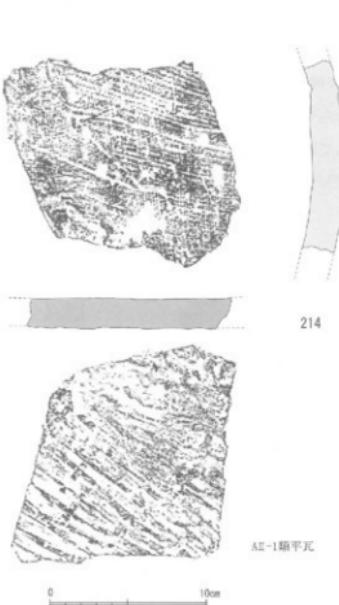


図49 土坑08出土 平瓦拓影および断面図(2)
A類 凸面斜格子目叩き

丸瓦

丸瓦の破片は全部で10点出土しており、うち玉縁部の破片が2点含まれる。丸瓦の凸面調整も、基本的に平瓦と同様だが、量的にはナデ消すC1類が最も多い。

221は凸面斜格子目叩きで端面を残す。凹面はコビキ痕と粗い布目を残す。端面のナデは凹凸面どちらにも及んでいない。

222は大きさから軒丸瓦片の可能性が考えらるるものだが、凸面に斜位の撻目均等平行叩きのち、部分的に叩き目をすり消している。凹面は粗い布目を残しながら部分的にすり消している。玉縁部と思われる破片も同時に出土しているが、この破片の凹面は玉縁の接合部付近を横位に強くナデしている。

223も玉縁部の破片だが、凹凸画面とも縦位のナデで丁寧にすり消し、玉縁接合部だけを横位にナデしている。側面が一部残るが、ナデは凹凸面どちらにも及ばない。外見的に他玉縁と異なるが、これについては次節で詳述する。224は丸瓦端面の破片だが、凸面は縦位ケズリ状のち横位にナデを施す。ケズリ痕を残す破片は全出土瓦中この1点だけである。端面は凹面側に明瞭な面取りを施す。

c. 溝状遺構07出土の瓦 図55・56

軒丸瓦片1点、軒平瓦片3点、玉縁片1点の他、平瓦片22点、丸瓦片3点が出土している。

軒瓦

225は蓮草文軒丸瓦の瓦当片である。中房の蓮子と蓮弁の一部のみの破片だが、意匠の構成からおそらく神山古窯址群堂の前支群出土の複弁十三葉蓮草文軒丸瓦と同文である可能性が高い。1+8の蓮子で、蓮弁が著しく退化しているタイプである。226・227は軒平瓦片だが、その他瓦当部が完全に欠損しているものも1点ある。226は樹状の中心飾り付近のみが残存している均整唐草文軒平瓦で第7次調査出土資料563と同文と考えらるが、別章で詳述する。1転目と2転目の主葉の間に、小さな子葉の表現がある。227も均整唐草文軒平瓦片と思われ、こちらは中心飾りを欠く。226と異なり1転目と2転目の主葉の間の子葉の表現がない。226も227も周縁部がなく内区界線が瓦当面の端にあたる。



図50 土坑08出土 平瓦拓影および断面図(3) B類 凸面平行叩き(縄目均等)

平瓦

A II 類 6点確認できるが、228だけが端面を一部残し、その他の破片は側面も端面も欠損している。228は斜位というよりは側面に平行に近い角度で凸面に長方形の格子目叩きを施し、凹面は粗い布目を残す。端面のナデは凹凸面どちら側にも及ばない。

B I 類 14点の破片が確認できるが、側面あるいは端面を残す破片はうち5点である。どれも縄目均等の平行叩きを凸面に施しているが、叩き具原体は2~3種類判別できる。凹面は細かい布目を残すものがほとんどだが、230のみ布目が粗い。229は側面のナデと凹面側に鈍い面取りがあり、230は側面のナデが凹面まで及ぶ。その他側面凸面側に面取りが認められ、凹面側はナデが及ぶもの1点、側面は凹面側に明瞭に面取りが認められるもの1点、側面、端面ともに残る破片だがどちらもナデは凹凸面までは及ばないもの1点が存在する。

B II 類 2点の破片が確認できるが、胎土が酷似しており同一個体の可能性がある。どちらも端面側面とも欠損している。凹面にはコビキ痕と細かい布目が認められる。



図51 土坑08出土 平瓦拓影および断面図(4) C類 凸面ナデ

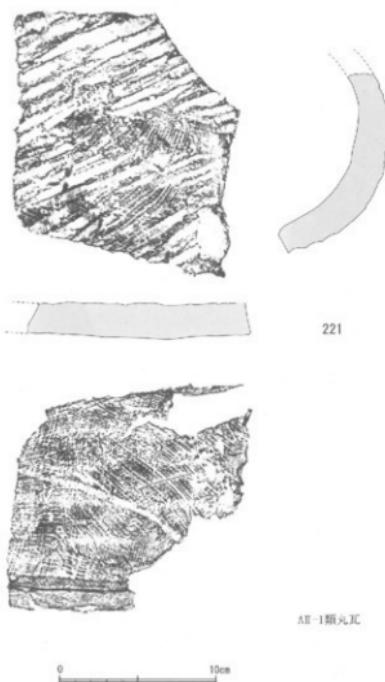


図52 土坑08出土 平瓦拓影および断面図(1)
A類 凸面斜格子叩き目

C I 類 26点認められるが、そのうち凹面もナデで消しているものは6点である。その他は粗い布目を残すものが12点、細かい布目を残すものが8点である。これらは厚さも色調も多用である。側面あるいは端面が残存しているものは複数あるが、内訳は側面凹面側に鈍い面取りを施すもの1点、3端面部の凹面側に明瞭な面取りが認められるもの1点、側面のナデが凹面まで及んでいるもの3点などである。その他端面の凹面側に明瞭に面取りが認められるものが1点ある。

丸瓦

溝状遺構07から出土した丸瓦は7点と少なく、どれも小片である。玉縁部の破片は3点あるが、うち2点は凸面はナデで消し、凹面はコビキ痕と粗い布目を残す。1点は玉縁端面がわずかに残っているが、凹面側は明瞭に面取りされている事が確認できる。凹面端面付近は横位ナデ、それ以外は粗い布目を残す。

d. SX03出土の瓦

SX03からは軒瓦は出土せず、平瓦22点と丸瓦7点が出土している。丸瓦のうち3点は玉縁部を含む破片である。

平瓦

A II 類 1点のみである。側面、端面ともに欠損した小片のため詳細は不明だが、凸面は斜格子叩き、凹面はコビキと細かい布目が認められる。

B I 類 繩目均等の平行叩き目を凸面に施したものは7点認められるが、そのうち叩き目が斜位に施されているものが1点ある。その他は縦位である。凹面側に明瞭な面取りが認められるものは2点ある。A I 類およびB II 類の平瓦のうち、凹面がナデで消されているものは存在せず、全て布目が認められる。ただし布目の細かさは粗いものも細かいものも存在する。



222



81-1類平瓦

図53 土坑08出土 丸瓦拓影および断面図(1) B類 凸面平行叩き目(縦目均等)

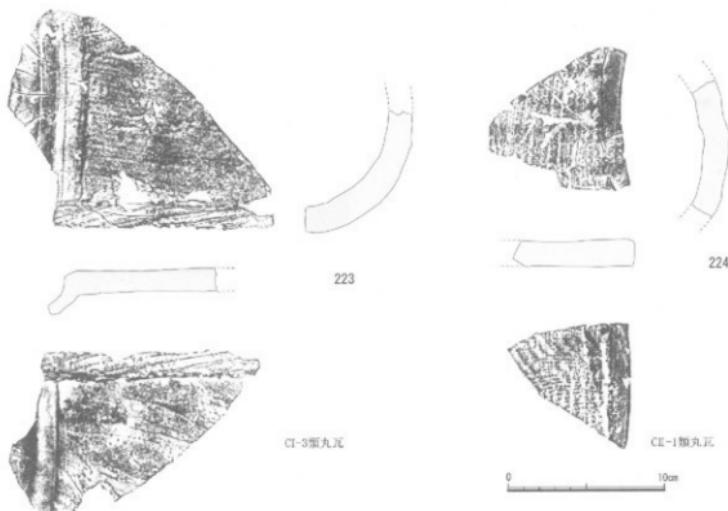


図54 土坑08出土 丸瓦拓影および断面図(3) C類 凸面ナデ

C I類 この遺構でも凸面の調整をナデですり消したものが14点と量的には最も多い。凹面をナデですり消しているものは5点、細かい布目が残るものは4点、粗い布目が残るものが5点存在する。その中には火を受けて赤化したものが1点ある。側面を一部残す破片で、凹面側にナデが及んでいるものは3点認められる。

丸瓦

丸瓦のうち、凸面に繩目均等の平行叩き目を残すものは2点あり、それ以外は全て凸面調整はC I類である。は玉縁部を残す破片は2点あり、どちらも玉縁端面の凹面側は明瞭な面取りを施し、凹面は布目痕あるいはコビキ痕を残す。丸瓦の端面部の破片が1点存在するが、凸面は繩目均等の平行叩きを縱位に施す。凹面はナデですり消し、端面部のナデは、凹凸どちらの面にも及ばない。

e. SX04出土の瓦

SX04から出土した瓦はごくわずかで、平瓦片が8点と丸瓦片が2点のみである。

平瓦

C I類 SX04の平瓦は全て、凸面をナデですり消したC I類のものである。色調、厚さなどは多様だが摩滅して調整が不明なもの除き、凹面は粗い布目を残すものが2点、細かい布目を残すものが3点確認できる。端面、側面を残す破片が存在しないため、その調整の詳細は不明である。

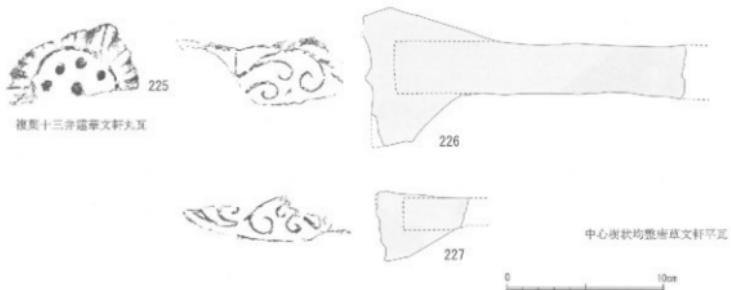


図55 满状造構07出土 軒瓦拓影および断面図

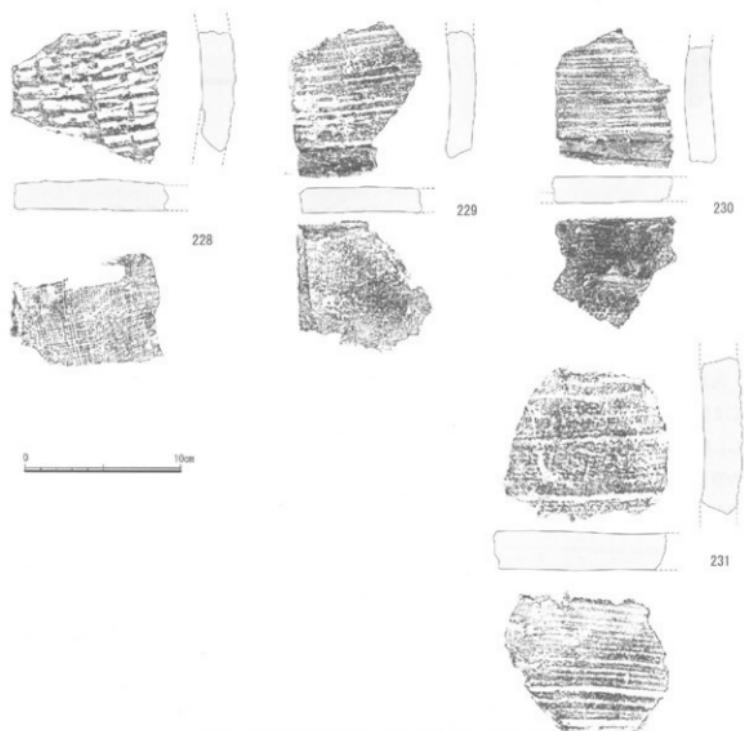


図56 满状造構07出土 平瓦拓影および断面図

丸瓦

2点の丸瓦片のうち、側面・端面の一部を残す破片が1点ある。凸面はナデですり消し、凹面は細かい布目を残す。側面のナデは凹面側まで及んでおり、にぶい面取り状を呈す。端面のナデは凹凸面どちらにも及ばない。

f. SX05出土の瓦

SX05からは軒丸瓦瓦当が1点と、平瓦片8点、丸瓦片1点が出土している。軒丸瓦以外の破片はどれも小片である。

軒瓦

この遺構から出土した軒丸瓦は、軒丸瓦瓦当が割れて2分の一ほどが残存したものである。土坑08から出土した複弁八葉蓮華文と同文である可能性が高いものだが、火を受けて著しく瓦当面が焼け焦げており、正確な瓦当文様の観察、図化などは難しい。焼け焦げているのは瓦当面側だけで、瓦当部裏面には火の痕跡は認められない。

この瓦1点のみをもって、瓦が葺かれていた堂塔に火災が起きたことの直接の証拠となりうるかどうかという判断は難しいが、第3章冒頭で述べたように、本調査地からは、地山面の焼土化、火を受けて赤化した石材片、壁材片など複数の火災と思われる痕跡が確認されている。これらを総合した結果、おそらく本調査地に程近い場所に存在した瓦葺建物=普光山日輪寺閑連の堂塔と思われる建物が、火災で焼亡した可能性がある判断しても差し支えないのではないだろうか。

平瓦

A II類 2点認められる。うち1点は側面を一部残す破片である。2点はどちらも凸面はよく似た斜格子文叩きだが、一方の門面布目は著しく粗く、側面ナデで、凸面側に鈍い面取りが認められる。
 B I類 1点認められるが、側面、端面ともに欠損したごく小さな破片のため、詳細は不明である。
 C I類 量的には最も多い5点が確認できる。凸面はすべてナデですり消す技法で共通しているが、凹面は粗い布目を残すもの3点と、細かい布目を残すものなど差異が存在する。その他側面の破片だが、凹面部はコビキ痕と、側面門面側に明晰な面取りとが確認できるものがある。

丸瓦

SX05から出土した丸瓦はわずか1点だが、玉縁接合部付近の破片である。玉縁そのものは欠損している。凸面はナデで調整をすり消しており、門面は細かい布目を残している。おそらく凹面の玉縁接合部のみに横位のナデを施していると思われるが、摩滅が進んでおり観察不可能である。

g. 小結

以上本調査で出土した瓦について詳述したが、厚さ、色調などは多様で一貫性をもたないことが特徴である。一方で調整技法に関する傾向には共通性が認められるなど、今後検討を加えるべき点も確認できた。出土した軒瓦類に付いては、文様構成に神出古窯址群出土資料との共通性が認められるが、その他二つ屋跡あるいは尊勝寺資料などとも広く同文・同一意匠関係にある。それに付いては別章に詳述する。

表4 出土瓦觀察表

出土番号	出土地点	種類	性別	年齢	調査者	色調(表面・裏面)	形状	上部	下部	丸当	安定期
								上 部	下 部		
208	土佐08 前丸: CI-3	-	-	-	-	7.5Y3/1灰色 - 3Y5/1灰色	1.23	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式	11	
225	清須07: -	-	-	-	-	7.5Y3/1オーリーブ黒色 - 7.5Y4/1灰白色	1.24	瓦石	瓦み込み式	26	
SX05	1	-	-	-	-	瓦石, 黒色鉛物類, 7.5Y6/1灰白色	1.25	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式	2	
209	十河1-1: 前平: CI-3	-	-	-	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y5/1灰白色	1.26	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式, 両面削	2	
210	-	CI-2: 1種	有	-	-	N灰色 - 9Y6/1灰白色	1.27	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式	3	
211	-	CI-2: 1種	有	-	-	N灰色 - 9Y6/1灰白色	1.28	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式	4	
226	清須07: -	CI-1: 1	-	瓦当上: 横後	-	2.5Y6/1灰白色 - 3Y5/1灰白色	1.29	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式, 斜面削	27	
227	-	CI-1: ④種	瓦當下: 横後	-	-	5Y7/1白色 - 3Y5/1灰白色	1.30	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式	28	
212	七尾08: 平丸: CI-3: ①種	なし	有	25Y6/4に付いた黄白色 - 25Y6/2灰青色	1.31	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	瓦み込み式	5			
-	-	CI-2: 1種	-	-	2.5Y7/1灰白色 - 25Y7/0灰青色	1.32	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	6		
-	-	AI-3: 1種	なし	-	25Y7/0灰青色 - 25Y7/2灰青色	1.33	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	7		
-	-	AI-3: ⑤種	-	-	2.5Y6/4に付いた黄白色 - 25Y3/3黄褐色	1.34	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	8		
213	-	AI-1: 1種	-	-	N灰色 - 5Y4/1灰白色	1.35	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	9		
214	-	AI-2: 1種	有	-	5Y5/1灰色 - 5Y2/2灰青色リーブ色	1.36	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	10		
215	-	AI-2: 2種	-	-	5Y1/2オリーブ黒色 - N灰色	1.37	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	11		
216	-	AI-2: 1種	-	-	5Y6/1灰色 - N6灰色	1.38	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	12		
-	-	AI-2: 2種	なし	-	5Y4灰色 - N4灰色	1.39	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	13		
-	-	BI-2: 1種	-	-	7.5Y8/1灰白色 - 7.5Y7/3灰白色	1.40	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	14		
217	-	CI-1: 1種	なし	-	7.5Y3/1灰白色 - 7.5Y5/1灰白色	1.41	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	15		
218	-	CI-1: ①種	-	-	5Y7/2N灰色 - 3Y7/2灰白色	1.42	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	16		
219	-	CI-2: 1種	なし	-	5Y7/1白色 - 5Y7/1灰白色	1.43	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	17		
-	-	CI-2: 2種	なし	-	7.5Y8/1灰白色 - 7.5Y8/1灰白色	1.44	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	18		
220	-	CI-3: 1種	なし	-	5Y6/1灰色 - N3灰色	1.45	瓦石, 黒色鉛物類, チャート	-	19		
-	-	CI-3: 2種	-	-	25Y7/1灰白色 - 7.5Y7/1灰白色	1.46	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	20		
221	丸山: AI-1: -	なし	有	5Y8/1白色 - 5Y7/1灰白色	1.47	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	21			
222	-	BI-1: 1種	-	-	7.5Y5/1灰白色 - 10Y6/1灰白色	1.48	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	22		
223	-	BI-3: 1種	-	-	5Y6/1灰白色 - 5Y5/1灰白色	1.49	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	23		
224	-	BI-3: 3種	なし	-	N灰色 - 5Y5/2灰白色	1.50	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	24		
225	清須07: 平丸: AB-1: -	なし	-	-	N灰色 - 5Y6/1灰白色	1.51	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	25		
226	-	BI-1: 1種	-	-	5Y6/1灰色 - 5Y6/1灰白色	1.52	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	26		
227	-	BI-1: 2種	-	-	5Y6/1灰色 - 5Y5/1灰白色	1.53	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	27		
228	-	BI-1: 3種	-	-	25Y6/2灰黄色 - 25Y5/2灰青色リーブ色	1.54	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	28		
229	-	BI-1: 4種	-	-	5Y6/1灰白色 - 5Y7/1灰白色	1.55	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	29		
230	-	BI-1: 5種	-	-	5Y6/1灰白色 - 5Y5/1灰白色	1.56	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	30		
231	-	BI-1: 6種	なし	-	5Y6/1灰白色 - 5Y5/1灰白色	1.57	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	31		
232	-	BI-1: 7種	-	-	25Y6/2灰黄色 - 25Y5/2灰青色リーブ色	1.58	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	32		
233	-	BI-1: 8種	-	-	5Y6/1灰白色 - 5Y5/1灰白色	1.59	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	33		
234	-	BI-1: 9種	なし	-	5Y6/1灰白色 - 5Y5/1灰白色	1.60	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	34		
235	-	BI-1: 10種	-	-	25Y6/2灰黄色 - 25Y5/2灰青色リーブ色	1.61	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	35		
236	-	BI-1: 11種	なし	-	5Y6/1灰白色 - 5Y5/1灰白色	1.62	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	36		
237	-	CI-1: 1種	-	-	10Y7/1白色 - N5灰色	1.63	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	37		
238	-	CI-1: 2種	-	-	7.5Y6/1灰白色 - 10Y7/6灰白色	1.64	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	38		
239	-	CI-1: 3種	-	-	7.5Y6/1灰白色 - 10Y7/6灰白色	1.65	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	39		
240	-	CI-1: 4種	-	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.66	瓦石, 黑色鉛物類, チャート	-	40		
241	-	CI-1: 5種	なし	-	N3灰色 - N2灰色	1.67	黑色工芸灰	-	41		
242	-	CI-1: 6種	なし	-	N3灰色 - N6灰色	1.68	瓦石, 黑色鉛物類	-	42		
243	-	CI-1: 7種	なし	-	N4灰色 - N6灰色	1.69	瓦石, 黑色鉛物類	-	43		
244	-	CI-1: 8種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.70	瓦石, 黑色鉛物類	-	44		
245	-	CI-1: 9種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.71	瓦石, 黑色鉛物類	-	45		
246	-	CI-1: 10種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.72	瓦石, 黑色鉛物類	-	46		
247	-	CI-1: 11種	なし	-	10Y6/1灰白色 - 10Y6/1灰白色	1.73	瓦石, 黑色鉛物類	-	47		
248	-	CI-1: 12種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.74	瓦石, 黑色鉛物類	-	48		
249	-	CI-1: 13種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.75	瓦石, 黑色鉛物類	-	49		
250	-	CI-1: 14種	なし	-	10Y6/1灰白色 - 10Y6/1灰白色	1.76	瓦石, 黑色鉛物類	-	50		
251	-	CI-1: 15種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.77	瓦石, 黑色鉛物類	-	51		
252	-	CI-1: 16種	なし	-	10Y7/1灰白色 - 10Y7/1灰白色	1.78	瓦石, 黑色鉛物類	-	52		
253	-	CI-1: 17種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.79	瓦石, 黑色鉛物類	-	53		
254	-	CI-1: 18種	なし	-	10Y6/1灰白色 - 10Y6/1灰白色	1.80	瓦石	-	54		
255	-	CI-1: 19種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.81	瓦石	-	55		
SX03	平丸: BI-2: -	-	有	N灰色 - 7.5Y6/1白色	1.82	瓦石, 黑色鉛物類	-	56			
-	-	BI-2: 1種	なし	-	N6灰色 - N5灰色	1.83	瓦石, 黑色鉛物類	-	57		
-	-	BI-2: 2種	有	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.84	瓦石, 黑色鉛物類	-	58			
-	-	BI-2: 3種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.85	瓦石, 黑色鉛物類	-	59		
-	-	BI-2: 4種	なし	-	10Y6/1灰白色 - 10Y5/1灰白色	1.86	瓦石, 黑色鉛物類	-	60		
-	-	BI-2: 5種	なし	-	5Y5/1灰白色 - 5Y7/4灰白色	1.87	瓦石	-	61		
-	-	BI-2: 6種	なし	-	N2灰色 - N2灰色	1.88	瓦石	-	62		
-	-	BI-2: 7種	なし	-	N1灰色 - N2灰色	1.89	瓦石	-	63		
-	-	BI-2: 8種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.90	瓦石	-	64		
-	-	BI-2: 9種	なし	-	10Y6/1灰白色 - 10Y6/1灰白色	1.91	瓦石	-	65		
-	-	BI-2: 10種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.92	瓦石	-	66		
-	-	BI-2: 11種	なし	-	10Y6/1灰白色 - 10Y6/1灰白色	1.93	瓦石	-	67		
-	-	BI-2: 12種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.94	瓦石	-	68		
-	-	BI-2: 13種	なし	-	10Y7/4灰白色 - 10Y7/4灰白色	1.95	瓦石	-	69		
-	-	BI-2: 14種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.96	瓦石	-	70		
-	-	BI-2: 15種	なし	-	10Y7/4灰白色 - 10Y7/4灰白色	1.97	瓦石	-	71		
-	-	BI-2: 16種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	1.98	瓦石	-	72		
-	-	BI-2: 17種	なし	-	10Y7/4灰白色 - 10Y7/4灰白色	1.99	瓦石	-	73		
-	-	BI-2: 18種	なし	-	7.5Y6/1灰白色 - 7.5Y6/1灰白色	2.00	瓦石	-	74		

※色調については農林水産省監修『新版標準土色帖』による

5. 断面サンプリングによる玉縁丸瓦製作技法の構造的分析

a. 目的

本調査で出土した平安時代瓦のうち、丸瓦玉縁に関して、二つの型式に大別できることは前節で述べた通りである。この二型式の玉縁は、一方が横位ナデ痕を凹凸両面に有するもの（223）、もう一方は凹面に布目痕を残し、凸面はナデによるすり消しを施すもの（223以外）で、調整技術的に明確な差異がある。さらに形状等の外見的特徴も大きく異なるため、成形技法自体も大きく異なる可能性が推察される。

本節ではこれら二型式の玉縁について断面サンプルを作成し、玉縁肩部の作り出し技法に、外見的特徴から推察されるような差異が存在するかを、断面の粘土粒子の方向から検証することを目指した。同時に粒子の方向から丸瓦部が「粘土纏巻上げ技法」による成形なのか、あるいは「粘土上板」を用いているのかの判定も行い、瓦全体の成形技法を明確にすることも目的とした。

播磨における平安時代瓦の製作技法をより具体的に復元することで、「播磨瓦屋」の実態解明につながる糸口を模索するための試みとしてのサンプリング作業と位置づけたい。なお本調査で出土した丸瓦玉縁の点数が少ないと、「播磨瓦屋」の生産品全体を俯瞰するための第1歩であるという視点から、日輪寺所用瓦の推定产地として現時点でもっとも有力な、神出古窯址群出土資料から任意に抽出した数点もあわせてサンプリングを行った。

ただし今回のサンプリング作業で得られる情報は、神出古窯址群の一部と日輪寺遺跡のみであり、東播磨一帯に広域に分布していた播磨瓦屋の生産品全体を俯瞰するには遠く及ばないものである。本論はあくまでも議論の端緒としての役割を果たすに過ぎないであろう。特に神出古窯址群については、膨大な資料の公表が待たれている状態のものを先んじて任意に抽出しており、この遺跡に対する緻密なデータ検証の努力が省略された、不完全なものであることを前提とせねばならない。

b. 方法

今回の作業で観察対象とした玉縁部サンプルの総量は、日輪寺遺跡資料、神出古窯址群資料あわせて37点である。内訳と各サンプルの詳細はサンプルリスト(1)および(2)に示す。

これらの中から日輪寺資料を3点、神出古窯址群資料14点を岩石カッターを用いて縱位方向に切断し、約5mm幅の柱状断面サンプルを作製した。各試料の切断位置については本文写真1～4に示す。その後各断面サンプルのX線透過写真撮影を行い、得られた写真をスキャナー取り込みでMicrosoft Office Document Imaging型式のデジタル画像データ化し、さらにAdobe Photoshop7.0を用いてX線画像の可視領域を引き上げる処理を施した。

37点のサンプルのうち、今回切断作業の対象としなかったものについては、肉眼で得られる情報をのみを記載する。なお実際のサンプリング作業は中村大介が行い、画像処理作業は丸山潔が、本節の執筆は石島がそれぞれ担当した。

c. 型式分類

対象とする玉縁を形状から二型式に大別し、横位ナデ玉縁をI式、そうでないものをII式玉縁として分類した。さらにI式玉縁については、玉縁部と丸瓦部の高低差を主な指標として、さらにa類とb類に細別した。それぞれの主な特徴は以下のとおりである。

I式 玉縁部凹凸両面に横位ナデ痕が観察できる。玉縁肩の稜線は比較的不明瞭。

丸瓦部凹面に布目痕が残る例はなく、すべて縦位ナデ調整による。丸瓦部凸面も丁寧に縦位ナデですり消されており、内眼で粘土紐痕等が観察できるものはない。凹面丸瓦との境目、連結面裏側に、丸瓦側に板状工具あるいは、指頭痕状の凹みが観察されるものが多い。

サンプルリスト(1)神出古窯址群

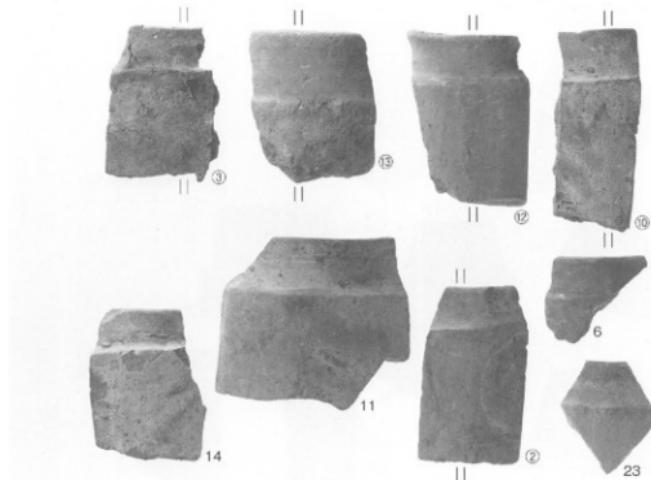
サンプル番号	支番名	地区名	層位	玉縁型式	断面サンプリング	出土年月日
1	空ノ前	I-D	下部灰層	II	●	19820915
2	ク	ク	ク	I-a	●	ク
3	ク	ク	ク	ク	●	ク
4	ク	I-E	ク	II		19820917
5	ク	ク	ク	I-b		ク
6	ク	ク	ク	I-a		ク
7	ク	ク	ク	II		19820915
8	ク	ク	ク	I-a		ク
9	ク	I-J	上部灰層	II	●	19820921
10	ク	I-C	ク	I-a	●	1982
11	ク	ク	ク	I-b		ク
12	ク	I-2	ク	ク	●	19820921
13	ク	ク	ク	I-a	●	ク
14	ク	I-K	下部灰層	ク		19820917
15	田井裏	1号窯	灰層	ク	●	19821005
16	ク	ク	ク	I-b		ク
17	ク	ク	ク	ク		ク
18	ク	ク	ク	ク		ク
19	ク	ク	ク	ク	●	19821006
20	ク	ク	ク	ク	●	ク
21	ク	ク	灰層	I-a	●	19821009
22	老ノ口	6号窯	灰層	I-b		19841016
23	ク	ク	ク	I-a	●	ク
24	宮ノ裏	J-3区	II			19810818
25	ク	ク	ク	ク	●	ク
26	ク	J-5区	純灰層	ク		19819812
27	池ノ下	2号窯	ク	ク	●	19821115
28	ク	ク	ク	I-b		ク
29	万葉池	I号窯3区	Wトレンド灰層	ク		19880218
30	ク	ク	ク	ク		ク
31	ク	ク	ク	ク		ク
32	釜ノ口	3トレ	灰褐色粘土(東方灰層)	II		19811105

サンプルリスト(2)日輪寺10~12次調査

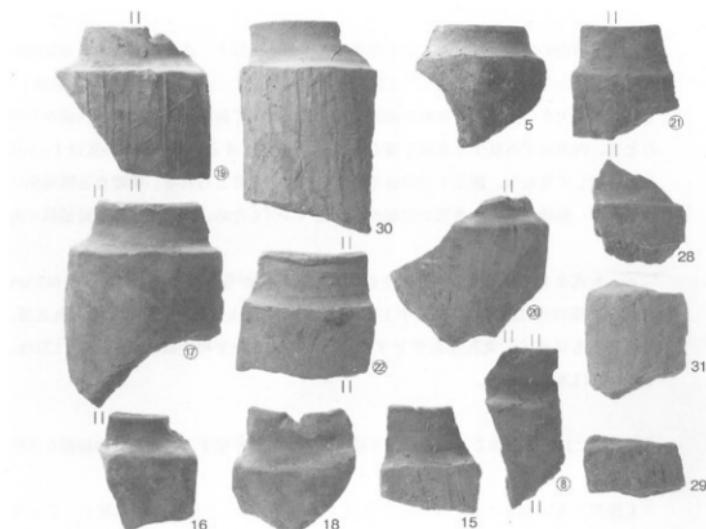
サンプル番号	実測番号	R番号	層位	玉縁型式	
33	53	114	溝状遺構07	II	
34	52	14	ク	ク	
35	66	79	SX03	ク	●
36	23	40	上坑08	ク	
37	24	52	土坑08	I-a	●

表5 断面サンプルリスト

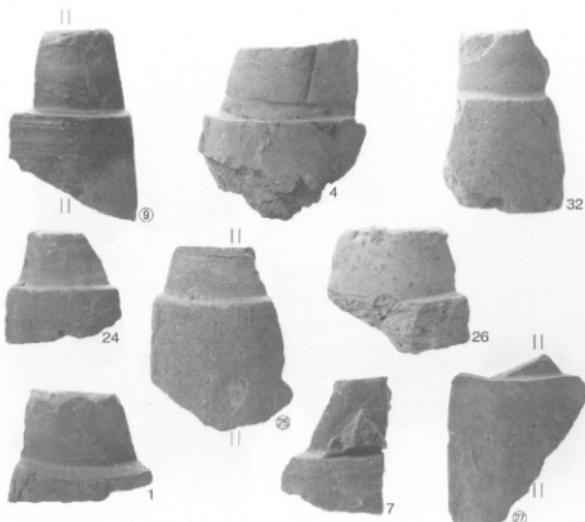
●=実施



挿図写真1 神出古窯址群出土 玉縁丸瓦 I-a式サンプル(断面サンプリング作業実施前)



挿図写真2 神出古窯址群出土 玉縁丸瓦 I-b式サンプル(断面サンプリング作業実施前)



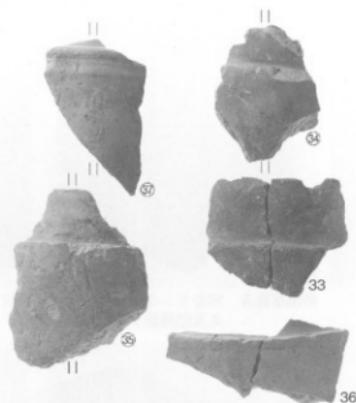
挿図写真3 神出古窯址群出土 玉縁丸瓦II式サンプル(断面サンプリング作業実施前)

凸面連結面の段差はほとんどなくその高低差が5mm以下、あるいは明瞭な連結面がなく丸瓦部から緩やかに傾斜して玉縁部をなすものをI-a式、連結面の高低差はI-aに比べて大きいが、肩の稜線が後述するII式に比べて鈍角で、玉縁部が凸面から見たとき、内湾せず外反する曲線を描くものをI-b式とする。玉縁部の外反はI-a式にも共通して見られ、横位ナデが施されているためと考えられる。明瞭な玉縁端面は作られず、曲線的な丸い端部で凹面から凸面へつづくため、一見土器の口縁部様である。

a、b式とも玉縁縱位方向の長さは短く、連結面から玉縁端部までおおむね2.5cm～4.0cmの幅の中に納まる。37点中I-a式は9点、I-b式は15点存在する。丸瓦部、玉縁部とともに薄く、丸瓦部のサンプル全数での厚さの平均値は、I-a式で1.31cm、I-b式は1.39cmである。

II式 外見的には、いわゆる一般的な「玉縁」らしい形状を呈する。玉縁肩の稜線が比較的明瞭。

玉縁部と丸瓦部との連結面は直角に近く、高低差はおおむね1.0cm前後か、それを凌駕する。凹面には布目が残り、布目は玉縁端部まで達する。



挿図写真4 日輪寺遺跡
第10~12次調査出土
玉縁丸瓦全サンプル
(サンプリング作業実施前)

33~36=Ⅱ式玉縁
37=Ⅰ-a式玉縁

本文写真1~4中
○に番号表記のものが断面
サンプルを作成したもの



挿図写真5 Ⅰ-a式玉縁② 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部縱位ナデ

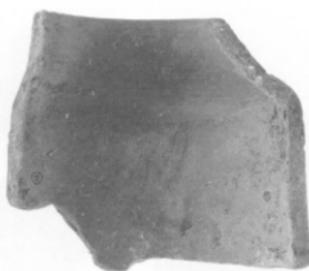


挿図写真6 同左サンプル凹面
玉縁部横位ナデ 丸瓦部縱位ナデ

凹面の布目をすり消しているものは皆無で、多くは布が玉縁部でしわになっている痕跡を残す。玉縁部凸面の調整はすべて横位ナデである。シャープな玉縁端面を呈し、さらに玉縁部凹面は玉縁端面、左右側面ともに幅広の面取りが施される。玉縁縦位方向の長さは連結面から玉縁端部までおおむね4.0cm~6.5cmの幅の中に納まりⅠ式に比べて明らかに長い。37点中15点存在する。丸瓦部厚さの平均値は、1.84cmである。



挿図写真7 I-a式玉縁11 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部縦位ナデ



挿図写真8 同左サンプル凹面 玉縁部横位ナデ
丸瓦部縦位ナデ・指頭痕様圧痕



挿図写真9 I-a式玉縁37 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部縦位ナデ
右側面コビキ痕



挿図写真10 同左サンプル凹面
玉縁部横位ナデ・丸瓦部縦位ナデ



挿図写真11 I-b式玉縁17 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部縦位ナデ



挿図写真12 同左サンプル凹面
玉縁部横位ナデ・丸瓦部縦位ナデ
連結面板状工具様圧痕



挿図写真13 I-b式玉縁17 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部×印斜格子
目叩き



挿図写真14 同左サンプル凹面
玉縁部横位ナデ 丸瓦部継位ナデ
連結面板状工具様圧痕



挿図写真15 II式玉縁9 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部横位ナデ



挿図写真15 同左サンプル凹面
玉縁部・丸瓦部布目圧痕・玉縁部しわ状



挿図写真16 II式玉縁25 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部横位ナデ



挿図写真17 同左サンプル凹面
玉縁部・丸瓦部布目圧痕
後端面および左側面後側面取り



挿図写真18 II式玉線35 凸面調整
玉縁部横位ナデ 丸瓦部横位ナデ



挿図写真19 同左サンプル凹面
玉縁部・丸瓦部布目圧痕 しわ状痕
後端面面取り



挿図写真20 II式玉線 肉眼で接合痕跡の見える例 挿図写真21 II式玉線 肉眼で接合痕跡の見える例
サンプルNo7(技法2) サンプルNo32(技法2)



d. 神出古窯址群出土資料

本論では32点の神出古窯址群出土資料をサンプルとして抽出している。神出古窯址群は日輪寺遺跡北方約6.5km地点、日輪寺遺跡の所在する低位段丘の後背部を形成する高位段丘上に位置する。現地番で西区神出町一帯にあたる地域に広域分布する窯址群で、過去に行われた発掘調査によって、おおむね11世紀後半から14世紀代にかけて稼動していたと考えられている。瓦陶兼業方式の経営形態をとっており、神出窯内に位置することから、国衙の管理のもとで生産活動を行っていたのではないかとの指摘が多数の研究者からなされている。

神出古窯址群の各窯体は、少しずつ重なり合いながらも個々に稼動年代が異なり、神出窯の人たちは時代によって窯を移動しながら生産活動を継続したと考えられる。

法勝寺・尊勝寺を中心とした院政期の御願寺遺跡から実際に神出古窯址群出土資料と同文同系の瓦当文様の瓦が多く出土しているため、神出窯では11世紀末葉から12世紀前葉にかけて多量の瓦を生産し、中央の造寺事業に供給していたと考えられている。『法勝寺金堂造営記』中の承暦元

年（1077）高科為家受領成功、『中右記』康和四年（1102）藤原基隆受領成功記事など、各代の播磨守がそれぞれ上皇御願寺の造営を担当したという記録はそれを裏付けている。

ただし東播地方には神出のみならず、明石市、三木市などさらに広い範囲に、古代から中世に展開した須恵器・瓦窯が分布しており、これらは互いに瓦当文様に強い共通性を有する。このことから、中央への瓦供給は神出窯のみならず「東播系古窯址群」として包括的にとらえるべき存在によって行われていた可能性が高い。しかし古代から中世に活躍した東播窯工人たちの技術の実体などについては、遺跡から出土した遺物の膨大さなどが起因して、断片的な情報が公開されるにとどまっている。

今回の作業では、神出古窯址群の中から、サンプルリスト(1)に示した7つの支群から、任意に抽出した出土した玉縁を対象とした。それぞれの窯のおよその稼動年代は表6に示したとおりだが、灰原からの出土品が多く、詳細な年代決定は難しいため、あくまでおまかなか目安として考えている。

神出古窯址群出土遺物の中から、玉縁瓦を任意抽出する作業中に得られた印象としては、表6に示した窯のうち、より古い時期に稼動していた万葉池支群、堂ノ前支群、田井裏支群の三支群の遺物には、I式玉縁が多く含まれていたが、12世紀中葉以降を中心に稼動していた釜ノ口支群、老ノ口支群、宮ノ裏支群などの各支群の資料ではII式玉縁がほとんどで、I式玉縁はほとんど見出せなかった。



図57 神出古窯址群の位置

ちなみに12世紀中葉以降の窯では、瓦そのものの含有率がかなり低い印象を受けたため、あるいは神出古窯址群における瓦生産の時期というには、神出窯の歴史の中でも前半期に集中する可能性を考えられるが、あくまでも多量の遺物を概観しただけの感想であり、実証性に乏しいため、この問題については今後機会を改めて持ちたいと考えている。

	11c後半	11c末	12c初頭	12c前半	12c中葉	12c後半	13c初頭	13c前半	13c後半	14c前半	14c後半	15c前半
万 保 池												
堂 ノ 前												
茶 山												
田 井 裏												
釜 ノ 口												
宮 ノ 裏												
老 ノ 口												
池 ノ 下												
垣 内												
肩谷谷池												
大 池 北												
招子ヶ池							?	?				

表6 神出古窯址群窯体におけるおよその稼動年代

e. 前提

今回のサンプリングおよび観察作業では、あらかじめ玉縁の成形技法について、以下のようないくつかの存在を想定している。

技法1 粘土糰巻き上げによって全体を作り、その後端部凹凸面を横位ナデによって作り出すもの。I式玉縁の成形技法である。

技法2 一枚板粘土板によって模骨となる型上で成形したのち、玉縁肩となる粘土を貼り付けて成形し、その後ナデを施す。II式の成形技法である。

f. 玉縁の製作技法に関する研究

I式玉縁については上原真人の研究にある尊勝寺出土資料のうち、「削り出し玉縁丸瓦」として言及及されているものと同一の可能性が高いと考えているが、筆者は尊勝寺資料を実見していない。上原は論文中でこの玉縁をもつ瓦について、①「粘土糰巻き上げて成形し、玉縁部を横ナデや削りによって造り出す技法は、一般的の瓦製作とかなり異質である。」と指摘している。

そのほか②「平瓦凸面に施す平行条線の叩き目」③「焼成・胎土が瓦と須恵器ではほとんど同質である点」をあげて④「須恵器工人を大量に導入し」て製作されたものが、尊勝寺出土資料における播磨系瓦であると結論づけている。

これらの指摘について、②の平瓦を含めた平行条線叩きとは、本書でいう瓦凸面のB類叩き目に該当すると考えられ、③については、胎土観察から土器との類似性が認められると確認した(表4参照)。①の指摘については、本調査出土の丸瓦玉縁は出上点数も少なく、特に横位ナデが観

察できるものは破片1点のみであるため、より詳細な実態解明のためには、今回出土した資料だけでなく、上原の言う「播磨瓦屋」の生産品全体を俯瞰する必要があると考えられる。なお今回サンプリングしたすべてのI式玉縁は横位ナデが認められ、上原がいうような「削りによって」作り出されたと思われるものは確認できなかった。

ところで①の問題のうち製作技法上とくに重要な点は、ナデによる玉縁部の造り出しについてである。粘土紐巻上げ成形技法については、「泥条盤築技法」として7世紀以降地域に関わらず普遍的に見られるものであることが、大脇潔の研究から確認できる。

日輪寺資料と同時期の具体例としては、鳥羽離官金剛心院出土資料のうち、讃岐系丸瓦として報告されているものなかに、粘土紐巻上げ技法によるものが確認できる。

なお大脇のいう「泥条盤築技法」=本書でいう「粘土紐巻上げ技法」によって作られた瓦は、大脇によると一般的に広く知られている繩引を用いた糸引き技法で得られた粘土板を用いるより、より簡易で大量の受容を満たすことができるとしている。この指摘は上原の「須恵器工人を大量に導入し」て量産化を目的とした結果生産されたものという尊勝寺出土資料に対する横位ナデ玉縁の評価に通ずるものがある。ここでは玉縁製作技法に関する基本的理解については大脇の論に寄っていることをあらかじめ明記しておく。

大脇は玉縁成形技法をA手法=円柱形の模骨に粘土板を巻きつけて玉縁とするもの、B手法=玉縁部のある模骨に、まず玉縁部になる粘土板を巻きつけてから丸瓦部をいくらくか重複させて巻きつけるもの、C手法=玉縁部のある模骨に一枚の粘土板あるいは一連の粘土紐でつくり、肩に粘土を足すもの、D手法=厚めに作った狭端部の凸面を箒をもちいて削りだし、玉縁とするもの、の4つに大別し、もっとも普遍的な手法としてC手法を挙げている。

本論で作業前に予測した技法2は大脇の言うC手法に該当し、本論がII式と分類した玉縁の成形技法にあたる。本論の技法1=I式玉縁の製作技法に該当するものは、大脇の論中にはない。

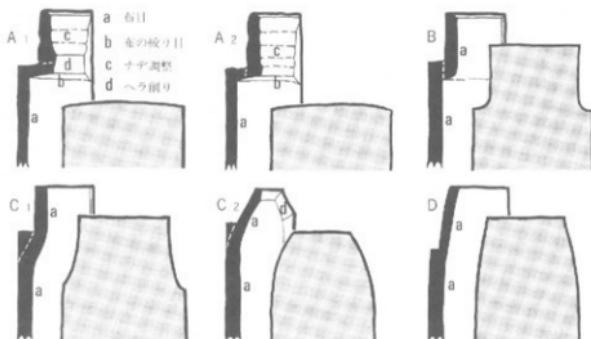


図58 丸瓦玉縁の成型法模式図(大脇 潔「研究ノート丸瓦の制作技術」1991 所収)

g. 結果

以上のような表面の肉眼観察による推論をあらかじめ設定した上で、実際のサンプリングを行った結果、サンプル断面を肉眼観察した時点では成形技法が判明したものと、粒子が細かく肉眼観察では判別が難しいものとに分かれた。

その後これらのサンプルについてすべて先述の方法で写真撮影から画像処理までを行った結果を以下に記す。

粘土紐を構成する単位が、粘土粒子の方向および粘土内部の空隙の形状から読み取れ、技法 I = 粘土紐巻き上げによる成形であると判るもの

I-a 式玉縁 サンプルNo. 3、10、12、13、

I-b 式玉縁 サンプルNo. 8、17、20、21、22

丸瓦部分に上記のような状態は観察できず、肩のところに接合痕状の粒子の流れが確認できるもの。技法 2 = 肩貼り付けによる成形

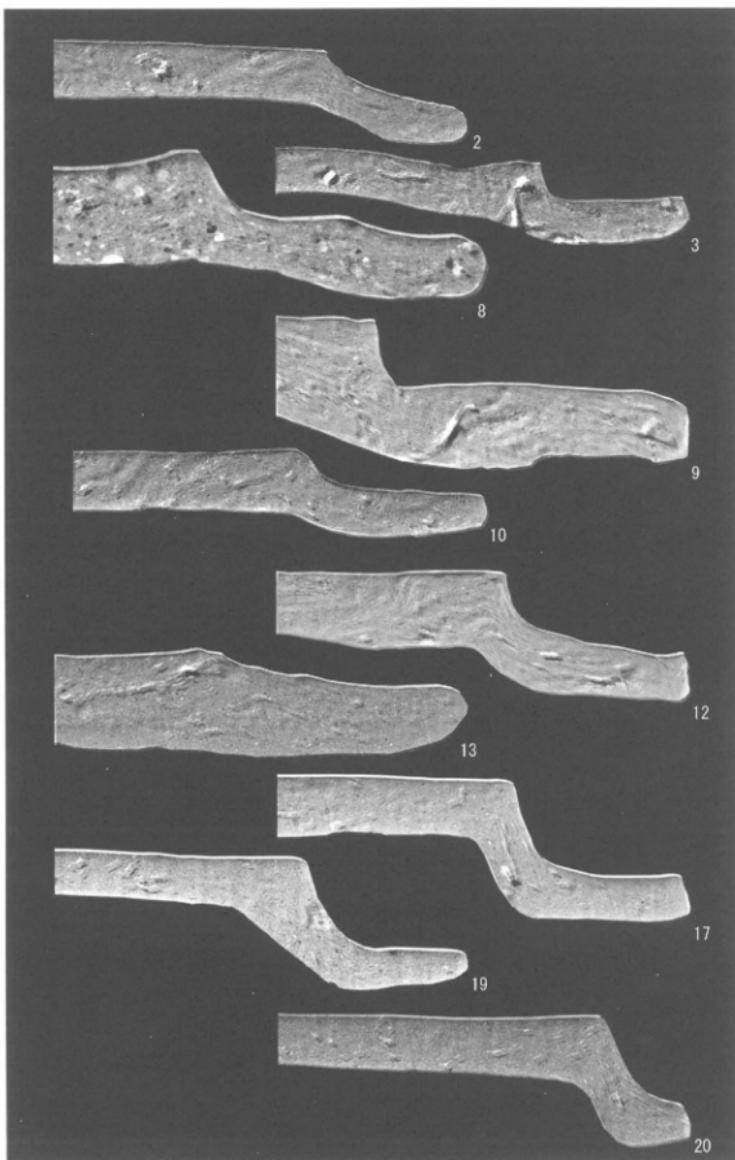
II 式玉縁 = サンプルNo. 9、25、27、34

したがって各サンプルの画像情報からは、① I 式玉縁は粘土紐巻き上げによって玉縁まで一体に作り上げている② II 式玉縁は一枚板の粘土板に後から肩を貼り付けていることが証明できた。なお I 式玉縁については I-a、I-b のいずれでも同様の結果を見せており、両者のあいだには成形技法的な差異がないことがわかる。

h. 考察

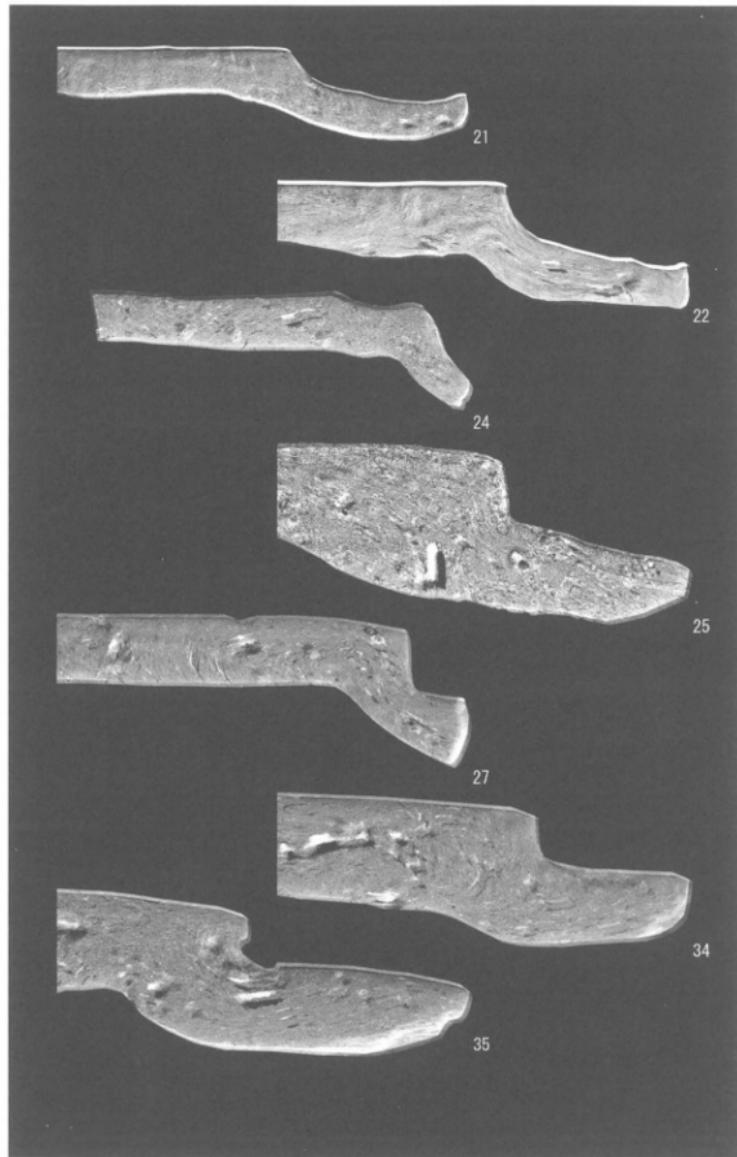
断面サンプルの画像情報から読み取れる玉縁製作技法は当初の予測どおり、外見的特徴であらかじめ分類した二つの型式それぞれで異なることが証明されたが、I 式玉縁については、巻き上げた筒状の粘土紐の後、端部を回転台の上で横位ナデによって土器口縁部のように作り出していると考えられる。サンプルNo.37の資料の右側縁部にコビキ痕状の条線が認められることから、模骨からはずした後、糸引きによって分割している可能性もあると考えられる。そのほか表面の肉眼観察から得られる I 式玉縁丸瓦の、およその製作手順は、以下のように推測される。円筒形の模骨に粘土紐を巻き上げたのち→丸瓦部凸面を工具を用いて叩き、さらに縦位ナデ調整（I-b 式に数例ナデが省略され、叩き目を残すものがある）→横位ナデで玉縁部を成形し→（糸引き？）分割となる。一般的な丸瓦の成形技法と比較すれば、①一枚板の粘土ではなく粘土紐巻き上げであること②糸引きによる分割の可能性があること③模骨は円筒形で玉縁部のないタイプと推測されることの三点が例外的と言えるだろう。

糸引き分割については、全資料のうちわずか一点のみでしか確認できておらず、それ以外のすべての資料で側面についてはナデ調整が施されていることから、一定程度手法として定着していたものか、例外的なものか、あるいは通常凹面側から「瓦の厚さ 2 分の 1 ~ 3 分の 1 程度」に「刃



挿図写真22 断面サンプルX線透過写真(1)

Adobe Photoshopにより可視領域を引き上げる処理を施したもの



挿図写真22 断面サンプルX線透過写真(2)

Adobe Photoshopにより可接領域を引き上げる処理を施したもの

物をあてて」切断分割するものが、偶然側面全体に糸きり状に残されたものか、適切に判断しがたく、あくまでも可能性にとどまる。

Ⅱ式玉縁については大脇のいうC手法とほぼ同様と考えられ、現時点でそれを逸脱する何らかの痕跡は認められない。

今回調査を行った二つの型式の玉縁丸瓦の差異が時期差によるものか共存する形態差なのかについては、消費地、生産地の資料両者を扱ったが、どちらの遺跡においてもその出土状況から証明することは困難である。「窯体が稼動していた時間の幅、あるいは遺構が埋没するのに要した時間の幅の中では共存していた」とことが証明できるに過ぎない。ただし日輪寺遺跡資料のうち、上坑08からⅠ式、Ⅱ式が共伴して出土していることから、この遺構が示す12世紀の初頭にあっては、共存するものであると考えられる。

玉縁丸瓦の形態が、日本にもたらされた当初からⅡ式玉縁的であることを思えば、いずれかの時点で、Ⅰ式のような形状のものが生み出されたことになるが、具体的なⅠ式誕生の時期については、資料数が少ないため現時点での判断は難しい。

またⅠ式玉縁が、かつて上原が指摘したように「須恵器工人によって」「大量生産」を目的として生み出されたものであるかについては、事象を解釈する上の概念的な要素であるため今回は言及しない。ただし12世紀初頭という時期にすでにⅠ式玉縁が生産され、消費されていたことは確実である。この事実と、上原の言う、受領成功により東播系窯に多くの瓦需要が生じたという時期的な整合性は、今日説明し得る中で、もっとも合理的な説であることは間違いない。あるいは先に述べたように、神出古窯址群資料のサンプリング作業に際して、12世紀中葉以降の窯では、瓦そのものの含有率がかなり低い印象を受けたことも、この仮説の流れのうえで説明できる可能性もある。

今後の考古学的課題としては、Ⅰ式玉縁の地理的な分布範囲、時期的な存続期間などを、生産地、消費地の両面からさらに解明していくことがあげられる。また今回対象にしたサンプルだけでも、個々の資料の胎土的特徴にはかなりの個性が認められ、それらが何に起因するものかといった理化学的アプローチから各窯の個性を抽出することにも、何がしかの有効性があると考えられる。

いざれにせよ、今回の作業は播磨における平安時代瓦の製作技法から「播磨瓦屋」の実態解明するという試みの端緒にすぎず、今後も機会あるごとに、資料と真摯に向かい合い、情報化し続ける努力が必要となる。

（注）

- (1) 上原真入「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号 1978
元興寺文化財研究所考古学研究室
- (2) 大脇 謙「研究ノート 丸瓦の製作技術」奈良国立文化財研究所学報 第49冊 研究論集X 1991
奈良国立文化財研究所
- (3) 森 郁夫『瓦』考古学ライブラリー43 1986 ニュー・サイエンス社

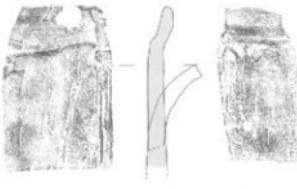
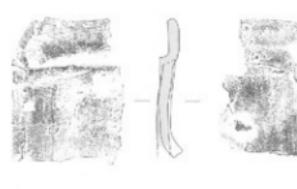
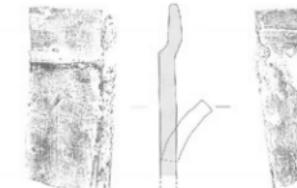
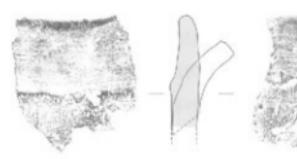
	<p>サンプルNo. 2</p> <p>遺跡名：神山古窯址群 宮ノ前支群 山ノ瀬：1号窯 層位：下部灰層 色調：灰褐色 N7 岩白色 測定：間隔三種切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 凸面玉縁切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 筋土：チリト、長石、雲母 厚さ：1.2cm 残存長：13.5cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 3</p> <p>遺跡名：神山古窯址群 宮ノ前支群 山ノ瀬：1号窯 層位：下部灰層 色調：灰褐色 N7 岩色 測定：間隔三種切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 凸面玉縁切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 筋土：長石 厚さ：1.0cm 残存長：10.4cm その他：左側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 10</p> <p>遺跡名：神山古窯址群 宮ノ前支群 山ノ瀬：1号窯 層位：上部灰層 色調：灰褐色 N7 岩白色 測定：間隔三種切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 凸面玉縁切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 筋土：チリト、長石、雲母 厚さ：1.2cm 残存長：13.1cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 13</p> <p>遺跡名：神山古窯址群 宮ノ前支群 山ノ瀬：1号窯 層位：上部灰層 色調：灰褐色 N7 岩色 測定：間隔三種切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 凸面玉縁切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 筋土：長石、黒色鉱物粒 厚さ：1.2cm 残存長：9.4cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 23</p> <p>遺跡名：神山古窯址群 宮ノ前支群 山ノ瀬：6号窯 層位：中部 色調：灰褐色 N3 特灰色 測定：間隔三種切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 凸面玉縁切取位ナダ 丸瓦玉縁切取位ナダ 筋土：チリト、長石、黒色鉱物粒 厚さ：1.0cm 残存長：5.3cm その他：右側面を残す破片</p>

図59 I-a式玉縁サンプル 拓影および断面図

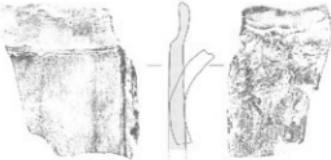
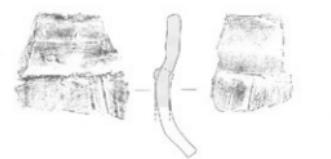
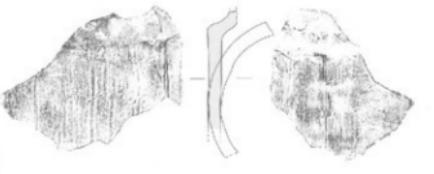
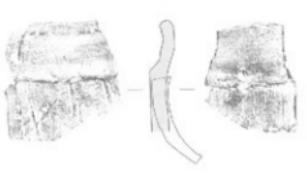
	<p>サンプルNo. 12</p> <p>造跡名：押立古窯址群 意ノ前支群 出土地：1号窯 層位：上部灰窯 色調：凹面 NT 灰色 調査：凹面玉縁部復元ナデ・押焼注目 丸瓦部復元ナデ 凸面玉縁部復元ナデ 粘土：チャート、長石、黑色粘土質 厚さ：1.2cm 残存長：12.9cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 15</p> <p>造跡名：神山古窯址群 末井戸支群 出土地：1号窯 層位：灰窯 色調：凹面 NT 灰色 凸面 NT 灰白色 調査：凹面玉縁部復元ナデ・押焼？注目 丸瓦部復元ナデ 凸面玉縁部復元ナデ 粘土：チャート、長石 厚さ：1.3cm 残存長：7.4cm その他：左側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 19</p> <p>造跡名：神山古窯址群 正井戸支群 出土地：1号窯 層位：灰窯 色調：凹面 NT 灰色 凸面 NT 灰色 調査：凹面玉縁部復元ナデ・指揮？注目 丸瓦部復元ナデ 凸面玉縁部復元ナデ 丸瓦部復元ナデ 粘土：チャート、長石 厚さ：1.2cm 残存長：12.7cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 20</p> <p>造跡名：押立古窯址群 末井戸支群 出土地：1号窯 層位：灰窯 色調：凸面 NT 灰色 凹面 NT 灰色 調査：凹面玉縁部復元ナデ・指揮？注目 丸瓦部復元ナデ 凸面玉縁部復元ナデ 丸瓦部復元ナデ 粘土：チャート、長石 厚さ：1.0cm 残存長：9.9cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 21</p> <p>造跡名：神山三望堂群 四才戸支群 出土地：1号窯 層位：灰窯 色調：凹面 7.65% NT 灰色 凸面 7.65% NT 灰色 調査：凹面玉縁部復元ナデ・注目 丸瓦部復元ナデ 凸面玉縁部復元ナデ 丸瓦部復元ナデ 粘土：チャート、長石 厚さ：1.3cm 残存長：9.1cm その他：左側面を残す破片</p>

図60 I-b式玉縁サンプル 拓影および断面図

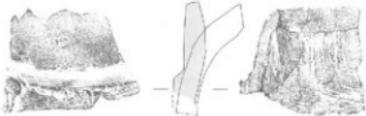
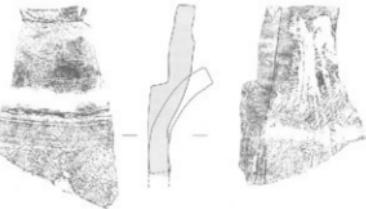
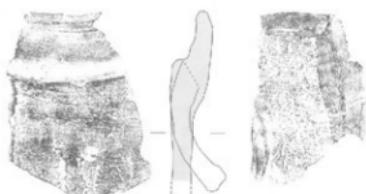
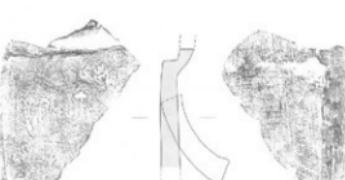
	<p>サンプルNo. 1</p> <p>遺跡名：神代古窯址群 宮ノ前支群 出土地：I-9 層位：下部灰層 色調：開面 V4 灰色 内面 V4 灰色 調査：岡田三郎治他日暮（調） 三井利次郎（右側面に面取り） 丸瓦形火舟（結合部のみ） 内面三層構造ナダ 丸瓦形火口斜格子口又切き 胎土：チャート、長石 厚さ：1.9cm 残存高：7.4cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 9</p> <p>遺跡名：神代古窯址群 宮ノ前支群 出土地：I-9 層位：下部灰層 色調：開面 SG2/1 黑色 内面 N2 黑色 調査：岡田三郎治他日暮（調） 三井利次郎（右側面に面取り） 内面三層構造ナダ 丸瓦形火舟（結合部のみ） 胎土：チャート、長石、黑色粘物質 厚さ：1.6cm 残存高：16.8cm その他：右側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 25</p> <p>遺跡名：神代古窯址群 宮ノ前支群 出土地：I-9 層位：下部灰層 色調：開面 M1 灰色 内面 SG2/1 黑色 調査：岡田三郎治他日暮（調） 三井利次郎（右側面に面取り） 丸瓦形火舟（結合部のみ） 内面三層構造ナダ 丸瓦形火舟（結合部のみ） 胎土：チャート、長石、黑色粘物質 厚さ：1.6cm 残存高：14.8cm その他：左側面を残す破片</p>
	<p>サンプルNo. 27</p> <p>遺跡名：神代古窯址群 北ノ下支群 出土地：2号室 層位： 色調：開面 N9 灰色 内面 SG2/1 黑色 調査：岡田三郎治他日暮（調） 三井利次郎（右側面に面取り） 内面三層構造ナダ 丸瓦形火舟（結合部のみ） 胎土：チャート、長石 厚さ：1.6cm 残存高：13.2cm その他：左側面を残す破片</p>

図61 II式玉縁サンプル 拓影および断面図

サンプル番号	出土場所	出土地	横型式	工具部調整	丸瓦部調整		色調(裏面・内面)	厚さ(裏面・内面)(mm)	軸長(mm)	玉頭部側面(右側)	備考
					凹面	凸面					
1	神山県立歴史科学館 出土文書	I-D	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N4赤色	1.9	7.4	凹面後端部・右側面	ナード・長石
2	同上	1-a	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6灰赤色・N4赤色	1.3	13.1	無	長石・ナード・長石
3	同上	2	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1	10.4	無	長石
4	同上	3	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	2.2	12.9	凹面側面・左側面	長石・石・黑色・白色・鉄粉
5	同上	4	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.2	9.2	無	長石・黑色・白色
6	同上	5	II	面面	横位ナード	横位ナード	N4赤色・N5灰白	1	6	無	ナード・黑色・白色
7	同上	6	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.3	9.4	不明	長石・黑色・黑色
8	同上	7	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.3	11.6	無	長石・黑色・黑色
9	同上	8	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.5	14.8	凹面側面	長石・ナード・黑色・白色
10	同上	9	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.3	11	無	長石・ナード・黑色・白色
11	同上	10	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.4	11.7	無	長石・ナード・黑色・白色
12	同上	11	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.2	12	無	長石・黑色・白色
13	同上	12	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	2.2	9.4	無	長石・黑色・黑色
14	同上	13	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.4	10.4	無	長石・黑色・黑色
15	神奈川県立歴史科学館 出土文書	1号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5灰白	1.3	17.4	凹面側面	ナード・長石
16	同上	2号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色	1.7	8.5	無	長石・黑色・白色
17	同上	3号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N6灰白	1.5	15	無	長石・ナード・黑色・白色
18	同上	4号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N6灰白	1.1	8.6	無	ナード・黑色・白色
19	同上	5号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N6灰白	1.2	10.7	無	ナード・黑色・白色
20	同上	6号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N6灰白	1	9.6	無	長石・ナード
21	同上	7号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N6灰白	1.3	9.1	無	長石・ナード・黑色・白色
22	神奈川県立歴史科学館 出土文書	6号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色	1.5	9.4	無	長石・黑色・白色
23	同上	8号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5ナリオ	1	5.9	無	長石・ナード・黑色・白色
24	神奈川県立歴史科学館 出土文書	1-3区	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N5灰白	2	8	凹面側面	凹面側面
25	同上	4-5区	II	面面	横位ナード	横位ナード	N4赤色・N4灰白	1.8	13.9	無	長石・ナード・黑色・白色
26	同上	6-7区	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5ナリオ	2.8	8.8	凹面側面	凹面側面
27	神奈川県立歴史科学館 出土文書	2号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N6赤色・N6灰白	1.6	11.7	凹面側面	長石・黑色・白色
28	同上	1-b	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.5	5.5	無	長石・ナード・黑色・白色
29	神奈川県立歴史科学館 出土文書	1号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.7	4.3	無	長石・ナード・黑色・白色
30	同上	2号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5ナリオ	1.5	15	無	長石・ナード・黑色・白色
31	同上	3号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5ナリオ	1.7	10	凹面側面	ナード・黑色・白色
32	神奈川県立歴史科学館 出土文書	3号室	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5ナリオ	2.3	13.2	無	ナード・黑色・白色
33	11号普通10-12次焼成	SU07	II	面面	横位ナード	横位ナード	N2赤色・N2灰白	1.7	10	凹面側面	ナード・黑色・白色
34	同上	SX03	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	2	11.3	欠損の有無不明	長石・ナード・黑色・白色
35	同上	SX08	II	面面	横位ナード	横位ナード	N2赤色・N2灰白	2.2	14.8	無	長石・ナード・黑色・白色
36	同上	SX08	II	面面	横位ナード	横位ナード	N7A14・N6赤色・N5ナリオ	1.9	6.3	欠損の有無不明	長石・ナード・黑色・白色
37	同上	1-a	II	面面	横位ナード	横位ナード	N5赤色・N5灰白	1.2	11.3	欠損の有無不明	長石・ナード・黑色・白色

赤線図についての説明は、黒林屋名古屋店(販売店)による。

表7 王縁丸瓦調査表

6. 鉄製品

鉄製品は5点出土し、232～234はSD07、235はSB04、236は遺構面直上層出土である。

232は綫長の三角形を呈する身部後端に把手が付く焼鍛である。身の横断面は扁平な三角形を呈し、上面中央に鶴があり、底面はやや外反する。把手は一辺1cmの正方形断面であり、身部の上面に垂直に取り付けられ、途中で斜め上方に屈曲する。身部の残存長は8.0cm、最大幅3.8cm、最大厚1.2cm、重量103.8gを測る。X線透過画像を見るに総体的に腐食は少ないが、身の縁辺には最大径7mm前後の孔が観察でき、鋳造品であることがわかる。把手の内部は鋳造品に通有な均質構造であり、別作りされた部品を接合した可能性がある。

233・234は鉄釘である。233は頭部を折り曲げた角釘である。断面は長辺6.7mmの長方形を呈し、残存長4.2cm、重量4.3gを測る。234は角釘先端で、断面は一辺6.5mmの正方形である。残存長は2.6cm、重量1.4gを測る。

235は厚さ約8mmの鉄板に、一辺が5.5mmの正方形断面を呈する基部が取り付く製品で、鉄錆の可能性がある。X線透過画像からは鬆の入りが無く、鋳造品であると考えられる。残存重量4.1gを測る。

236は刀子の身部である。最大幅1.0cmで、ほぼ同じ幅で切先付近に至る。身の厚さは3.3mmで、残存重量3.3gを測る。

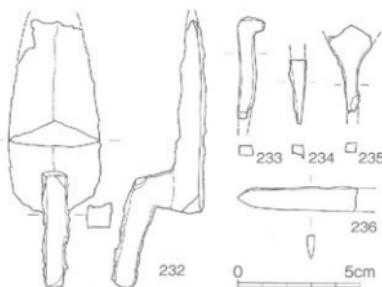
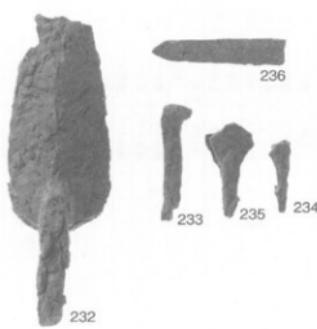
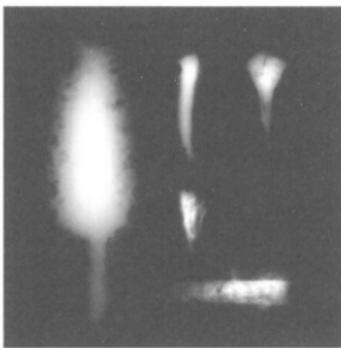


図62 鉄製品実測図



挿図写真23 鉄製品



挿図写真24 同左X線透過画像

第5章 結語 明石川流域中世世界へのアプローチ 一佛教寺院と莊園社会一

1. はじめに

前章までに見たように、今回の調査でも過去の調査の例に漏れず、弥生時代後期と平安時代末～戦国時代という二つの異なる時代の遺構が同じ層の上で確認された。二つの（およそ）無関係な遺跡は、ちょうど2つの円が重なるように、重なり合って存在している。しかし第1章に記したように、現在「日輪寺遺跡の範囲」とされている内でも、実は西側へいくほどにより中世遺構・遺物の密度は濃く、逆に東側ほど弥生時代の遺構・遺物の密度が濃いことが、今日までの調査の積み重ねから見てとれる。二つの円は完全に重なり合っているのではなく、少しづつ左右にずれながら重なり合う部分を共有しているといえるだろう。あるいは弥生時代の円は大きく、そのなかに中世の小さな円が存在するのかもしれない。

いずれにせよ過去の調査を含めても、実際のところ第1次調査を西限としてそれより西で調査が実施された例はない。第1次調査を除けば、本調査が最も濃密に中世の遺物を出土した調査といえるが、結論としては、普光山日輪寺の堂塔跡そのものを確認することはできなかった。第7次調査でも同様の指摘がなされているが⁽¹⁾、本調査地付近が寺域の東限にあたり、今回調査地以西に伽藍が広がっていると考えるのが妥当であるように思える。

中世の普光山日輪寺がどのような姿をしていたのかを今回の調査から具体的に語ることは不可能である。ただし瓦を中心とした出土遺物、この遺跡の立地、遺跡を取り巻く環境そのものには、明石川流域における中世世界を復元するための重要な情報が多く込められていることも、今回の調査で判明した。本章では今回の調査結果にこれらの諸要素をえつつ、明石川流域の中世がどのような姿をし、そこに生きる人々の暮らしがいかなるものであったのかを、断片的ではあるが振り返っていこう。

2. 中世遺構の時期と機能

本調査では、確認した中世遺構の大半が「SX」を冠する用途不明の遺構であることは第3章で述べた。また第4章においてSXの遺構同上から出土する土器片同士が接合する例が多くあり、遺構埋没時期の同時性の証拠と考えられることもすでに述べた。今回確認した中世遺構のうち、形成時期が明らかに異なるものは土坑08のみであり、その年代は瓦および出土土器から判断して12世紀初頭と考えられる。この遺構は多数の手拳大の砾とともに一組の軒丸瓦・軒平瓦、多数の束縛系須恵器塊、鉢と数点の壺が共伴して出土した。そのほか平瓦・丸瓦の破片も多く共伴している。出土する瓦は損傷著しい破片のみで、完形品はみとめられない。何らかの意図をもってこれらの遺物を投棄するために穿った土坑ではあるが、祭祀等特別な精神活動の痕跡は認められない。堂塔建造に際して廃棄の必要が生じた破損瓦を身の回りの食器類とともに投棄した可能性も考えられるが、推測の域は出ない。

次に溝状遺構07については、第7次調査で同じ遺構の南側を検出している。二つの調査結果を総合して、この遺構が「寺域の東限を示すもの」という第7次調査での結論は妥当であると考え

る。なぜならこの溝状遺構を境に、西では中世の遺構・遺物が量的に急激に優勢となる。

一方で時期について、第7次調査では開削の上限を11世紀後半とし、15世紀末に人為的に埋め戻されたものであると結論つけている。これについて今回の調査で検証できる範囲として、まず遺物の出土する層序について検討する。

今回溝状遺構07に関しては、上・中・下層に大別して出土遺物を取り上げているが（図19）とくに下層に古い時期の遺物が集中するということではなく、量的には大半の遺物が上層に集中して出土し、下層からはわずかに上層とさほど変わらない時期の遺物が出土する、という出土傾向が確認できた。上層の遺物は12世紀初頭から16世紀第1四半期までの時期幅があるものが混在しており、同一層内での出土遺物間の時期差をとらえて遺構の形成時期の上限を定めることは妥当かどうかを確認する必要が生じてくる。

そこで溝状遺構とその他SXを冠する遺構群との出土遺物の量・質的傾向がほぼ同様であることに注目する。SX遺構群からも溝状遺構07同様11世紀末から12世紀初頭を示す東播系須恵器群が16世紀前半までの土器・陶磁器と共に併せて出土しているが、類似した状況で出土する両者の一方が混入品であり、他方が通常堆積であるとして区別することは不自然である。第7次調査では、周辺に同時期の遺構が確認されておらず、比較する対象が存在しなかった。しかし今回、溝状以降07とその周辺のSX遺構群からの遺物の出土状況、遺物の内容を比較することが可能となった。その結果両者の類似傾向のなかに廃棄の同時性を認めることができると判断する。

溝状遺構07の開削時期については「溝」（あるいは堀）という機能的観点から、SX群より前段階を想定して差し支えないが、その共通性の中にある「廃棄の同時性」を一方で無視し、他方で積極的に採用することは論理的矛盾があり、とすれば両者とも11世紀末に開削されて約400年間開口していたか、さもなくばSXの示す形成時期に溝状遺構の開削時期をより近づけて修正するかのどちらかと考えるべきであろう。SX遺構群の埋没が短時間に起こった現象であることは疑いようがなく、400年の存続時期を想定する可能性は皆無である。

以上の点から見て

- ①溝状遺構07の開削時期は不明である。11世紀末から12世紀初頭の土器類が少量出土しているが、埋土の層序的状況および周辺遺構の状況から見て混入品であり、開削時期を示す遺物となりうるかは検討を要し、断定はできない。
- ②溝状遺構07の埋没時期は15世紀末から16世紀第1四半期の短時間に限定できる。SX群とともに人為的に埋め戻された可能性が高い。

この2点を再確認しておきたい。

溝状遺構07の機能については、先述の通りこの溝状遺構以西で急激に中世の遺構・遺物が量的に優勢となることから、「寺域の東限を示すもの」という第7次調査での結論は妥当であると考える。ただし後述するように、普光山日輪寺の沿革に沿って寺域は時代によって移動していることを念頭に置き、「16世紀直前段階」での寺域の東限をしめすという但し書き付となる。

次にSXを冠する遺構群、SX02、03、04、05については、SX05が井戸を埋め戻したものと考えられる以外は、浅く不定形な落ち込み状の遺構で、用途は不明である。出土遺物は多彩で、11世紀末から15世紀までの東播系須恵器や14世紀の古瀬戸、16世紀第1四半期までの備前焼などが共伴して出土しており、埋没時期の下限はこれらの遺物の内もっとも新しい時期を示す16世紀第1四半期であると考えられる。異なるSX同士の出土遺物が接合することから、これらの遺構群の埋没は同時かつ一過性のものであると推測される。

以上の点から最も妥当な可能性として、15世紀末から16世紀第1四半期の限定された時期の範囲内で、井戸であるSX05や堀である溝状遺構07の埋め戻しを含めて本調査区周辺地域で整地が行われたもので、浅い不定形な落ち込み群は整地の痕跡ではないか、と考えられる。

最後に普光山日輪寺の沿革、伝承との整合性について確認しておこう。

天台宗普光山日輪寺は、奈良時代に行基上人により創建されたとする縁起をもつ古刹で、その沿革としては、元徳元年（1329）の自然災害で段丘上の諸堂が崩壊したためいったん麓に移転したこと、天文二十四年（1555）枝吉城主明石氏が三好氏と交戦すべく日輪寺を陣所としたことが伝承として、江戸時代の文献に残されている^②。

今回の調査では12世紀初頭の埋没・投棄土坑である土坑08、室町時代後半直前までの寺域の東限を示す溝（堀）である溝状遺構07、同時期の井戸であるSX05が確認でき、SX02、03、04といった整地跡の存在から、溝（堀）や井戸などは16世紀第1四半期にはすべて埋め戻されたこともわかる。その他今回の調査地北半部は、地山層上面が部分的に火を受けて赤化しており、焼けた礫土、石材片、瓦当などの出土も確認されている。

これらはすべて普光山日輪寺関連の遺構・遺物と考えられ、以下のような具体像が浮かび上がる。

1. 普光山日輪寺の創建年代の上限は、出土瓦から判断して12世紀初頭までは遡ることが確実である
2. 普光山日輪寺所用の瓦は東播系産地のもので、神出古窯址群堂の前支群に同文の瓦が出土していること及び寺院の立地から具体的な産地として、神出古窯址群が最も有力な候補である。
3. 16世紀第1四半期には段丘上に日輪寺関連の施設が存在した。その空間的東限は今回検出した溝状遺構07で、本調査地よりもっと西側に堂塔などが存在したものと推測される。しかし寺域の東端部は、このころ火災等の災害にあうなどして施設が焼亡したため、復興のため整地された。

これら調査結果は、先述の伝承に見る普光山日輪寺の沿革とはあまり整合性がないといえる。14世紀前半に麓に移転していたという諸堂は、16世紀までにはふたたび丘の上に戻されていた可能性が高いことが指摘できる程度である。16世紀半ばの戦乱による焼亡の伝承に関しても、伝承の時代まで下る遺物・遺構は確認できなかった。

3. 山上の寺、山下の寺 –普光山日輪寺の立地について–

かつて摂津旧清澄跡（兵庫県宝塚市）の発掘調査報告書の中で、野地脩左は清荒神清澄寺について、以下のような考察を述べている。

「・・・山中にあるが、畝山三塔とちがって、ここは麓の集落から立ち登る人煙をじかに眺められる開かれた世界であるということである。・・・(中略)・・・かつては松林がうっそうと茂った山林静寂のところであったらしく、その故にこそこの地が寺地に定められたのだと思う。そしてその点は、畝山の伝統の中に深い根を持つものであるといえる。かといってそのままではない。ここ「旧清」の台地に立つと、たたなわる六甲山系の山なみだけでなく、南には美しくて広大な武庫の平野を控えた勝地であったことがよくわかる。・・・(中略)・・・麓の集落から立ち登る人煙をじかに眺められる清爽の気は、みはるかす蓮浦と暁發して一段と快適なものであったと察せられる。山林静寂のところだといっても、一面にそういう開かれた世界でもあった。これに対して、畝山は集落から孤立した山上の閉ざされた世界であって、そこに性質の違があることを看過してはならない。」^③

この言葉は、そのままここ摂磨国普光山日輪寺にもあてはまるといってよい。ためしに「六甲山系」を「明石海峡」に、「武庫の平野」を「印南台地」と読みかえてみていただきたい。

標高150m級の清澄寺と、標高30mをわずかに超える普光山日輪寺とでは、簡単に同一に論じることはできない。しかしこの二つの中世密教寺院が志向した精神性には、著しい共通点が認められる。そしてまた、明石川流域に点在する顕密佛教寺院の多くも、この二つの寺院が生み出されたのと似た時代背景のもとに築かれたのではないだろうか。

顕密佛教寺院が、比叡山延暦寺に代表されるような人里はなれた山中の修行寺ではなく、村落に程近い場所へと立地を変えていく様子、山上から山下へ移行していく過程を野地は報告書の中で鮮やかに描き出しているが、その時代背景としては、長谷川賢二が指摘したような、中世社会における顕密佛教の深い浸透性、「中世の国家・社会を貫くイデオロギーとして転換した」姿が想定される^④。王権との密接な関係性に基づく国家仏教は、古代末から中世初頭にかけて、末法思想と連動してその布教対象を民衆へと拡大していく。顕密佛教の変容に対するこの理解は今日文献史学・仏教史学の基本として定着しており、長谷川は続けて指摘する。「顕密佛教が国家・社会を貫くというのであれば、いかに地方に広がり、民衆との接点があったのかということを知る必要がある」と。

中世明石川流域社会にあっても、顕密佛教寺院の果たした役割はけして小さくはなかった。時にそれは太山寺のごとく莊園領主として権勢をふるう姿として、また時にうつし世の補陀落淨土として、多様な姿とくたちで中世びとの暮らしの中に存在したはずである。われわれは今日残された古刹あるいは廃寺遺跡の姿に、古代から中世への転換期の明石川流域社会に、顕密佛教寺院が浸透していく過程を読み取ることができる。ひいてはその姿を解き明かすることで、中世びとの社会と心のありようの一部に内薄できるのである。

群名	寺院名	宗教	創建年代	編年	立地	棟出屋根	另別立地跡	上部棟出屋根	年代
A群 伊河左	二身山人寺山	天台(12世紀初頭)	800m:谷合・林院跡	前山遺跡	燒土坑				
	頭高山人寺谷	太白(15世紀後)	117.5km:平陸上・礎遺	長坂遺跡	獨立柱建築物・土堆	11世紀-12世紀			
B群 田中莊	普光山日輪寺	天台(12世紀初頭)	31.00m:段丘上・礎地堆・廣	佐竹小山遺跡	獨立柱建築物	13世紀			平安時代末～鎌倉時代
下野村					今井遺跡	獨立柱建築物	12世紀後半-13世紀後半		
					山路遺跡	獨立柱建築物			12世紀
					豊田遺跡	濠・土坑			奈良時代-13世紀前半
					上池遺跡	獨立柱建築物・土槽遺跡	10世紀後半-平安時代後期		
					芝塚遺跡	獨立柱建築物・土堆	13世紀-14世紀		
					高津遺跡・高瀬遺跡	獨立柱建築物	飛鳥時代・奈良時代・平安時代		
					玉津田小山遺跡	獨立柱建築物・房頭	11世紀-13世紀		
					出合遺跡	奈良道場跡	12世紀後半		
					西川遺跡	獨立柱建築物・土坑	13世紀-14世紀初頭		
					二ツ屋遺跡	獨立柱建築物・礎石遺跡	12世紀後半		
					大原遺跡	獨立柱建築物	12世紀後半		
C群 横谷莊	比金山如意寺	天台(11世紀末)	700m:谷合	瓦瓶(15世紀)	小寺遺跡	獨立柱建築物	鎌倉時代後半		
中里保			12世紀初頭	豈增(14世紀)	豈好寺跡	獨立柱建築物・濠	11世紀後半-12世紀後半		
					曾谷遺跡	十石・濠・號土地	鎌倉時代後半		
					松木遺跡	濠・町界	12世紀-13世紀		
D群 伊川谷群・推定「延命寺」	-	8世紀後	14.00m:平地	梵鐘跡・遺物	別別立地跡	瓦器	10世紀		
					小寺遺跡	獨立柱建築物・壇	7世紀後半-8世紀		
					寒風跡	獨立柱建築物	10世紀後半-11世紀前半		
					六方遺跡	獨立柱建築物	8世紀末		
					第六方遺跡	獨立柱建築物・井口	8世紀末-鎌倉時代		
					水木遺跡	獨立柱建築物	9世紀-11世紀		
					古川向遺跡	獨立柱建築物・資本遺跡?	奈良時代-平安時代		
					相立遺跡	独立柱建築物	奈良時代-平安時代		
E群 (東田庄)赤羽山桂寺寺	真言(12世紀後半)	800m:谷合			相立遺跡	相・照御院	奈良時代		
(櫻山田庄)近江山近江寺	天台	1.00m:小原	13.00m:谷合		石舟跡	獨立柱建築物・土堆	鎌倉時代前半		
					西野所遺跡	獨立柱建築物	平安時代後半		
					御作遺跡	濠	鎌倉時代前半		
					御田遺跡	六郎	中世		
					貴田遺跡	濠・溝	平安時代後半-鎌倉時代		
F群 神出古					神出古跡群	遺跡群	11世紀-15世紀前半		

表8 明石川流域の主な中世寺院・遺跡・莊園

「山上の寺・山下の寺」という区分に従うならば、明石川流域に残された寺院のほとんどが「山下の寺」であり、日輪寺もその例外ではない。表8に見るように、明石川流域の中世寺院は太山寺のように谷合に位置する場合がほとんどで、日輪寺のような低段丘上に位置するものや、太谷寺のような中程度の山上に位置するものはまれであることがわかる。しかしこれらはみな、山林寺院と比較すれば、野地の指摘にあるように、森の緑の奥深く静寂の地ではあるが、いずれも中世びとの視野のなかに常にあった。

ならばこれら山下の寺は、いつ明石川流域に現れたのだろう？その答えとしては、これら寺院と周辺遺跡の考古学的調査から、以下のような仮説が導き出される。

仏教寺院は、みな縁起伝承的にはより古く語られることが常であるが、実際のところ明石川流域寺院の考古学的調査の例は極めて限られており、わずかに頭高山太谷寺のみが大規模な発掘調査の実施例として報告されているほかは、トレント調査などで部分的な情報が得られているものが数箇所あるだけである。このことから寺院各々の具体像の復元については、今後のさらなるデータの蓄積をまたねばならぬ部分も多いことはまず確認しなくてはならない。

そのうえで、議論の端緒として、寺院造構、周辺の集落遺構など既存の情報を整理してみよう。図62に示すように、明石川流域で確認されている中世遺跡は太山寺・太谷寺を含むA群、日輪寺を含むB群、如意寺を含むC群、推定「延命寺」を含むD群および性海寺・近江寺を含むE群と、神出古窯址群を中心としたF群に大別できる。神出古窯址群については、単獨で広大な遺跡を形成しており、その性格も他とは一線を画するもので、もっとも近在の寺院は性海寺・近江寺となる。しかし互いの関連性は現時点ではとくに認められない。

図63 明石川流域の遺跡群および寺院

